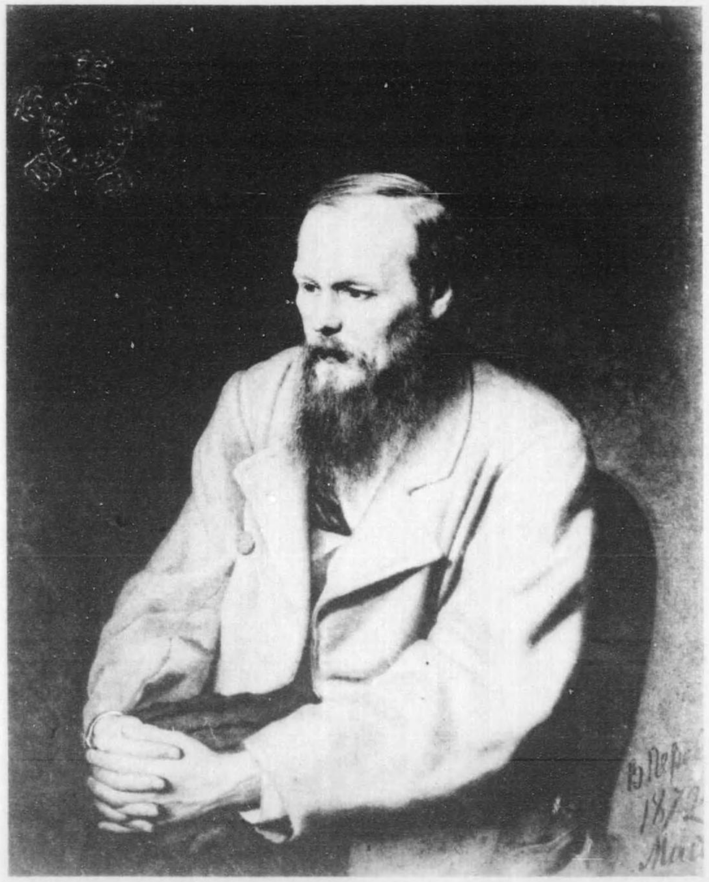
始

惡靈

全

大正
4. 7. 29
購求



譯者の序

『惡靈』の名は作者自から、本文の中で説明して居るやうに、『路加傳』第八章にある神の子イエスが墓場に住む憑かれた男から惡鬼を追ひ出して、其の惡鬼が豚の中に入ると、豚は皆山坡を駈け下りて、湖の中に溺れ死んだといふ話から來て居る。で、若し和譯聖書の譯語に從ふものとすれば、『惡鬼』とすべき處である。只『惡鬼』では語呂が惡いのと、最一つ人に憑くと云ふやうな心持が出しにいために、故と『惡靈』として見た。別に意味はない。

『死人の家』で西伯利亞に於ける囚人生活を描き、『罪と罰』で犯罪者の心理を描いた作者は、此書に於てキヒリストに對する彼の成熟した態度を示して居る。此點から見て、同じくキヒリストを描いたツルゲーネフの『父の子』――露西亞人には、此書が父と子と兩時代を侮辱したものと見えるのださうな――に對する返答だとも取られる。此事實は、最後の作『カラマゾフ兄弟』がトルストイの『戰爭と平和』に對偶を爲すものである。兎に角、此作が作者自身に取つても特に意味のある作であつたことは爭はれない。

自分は此書の譯者として、此處に作全體を提供して居る以上、此作に就いて彼此批評がましい說を爲すことを好まない。寧ろ直ちに作其者に就いて吟味して貰ひたいのである。が、讀者の便利のために、二つ三つ鑑賞の手引と成るやうなことを擧ぐれば、作者は此作に於て特に神人と人神との間の葛藤を力說して居る。在來の神、卽ち神人と、在來の神が滅びてからの神、卽ち人神との間の葛藤である。二つの神が有り、二つの信仰が有り、全體を支配する二つの惡鬼が有り、最後に愛する下から憎み、憎む下から愛する二つの戀が有る。女主人公リザのスタフローギンと、婚約の所天マヴーリキイ・ニコラーエヴィチとに對する戀がそれである。飽く迄兩極端を以て此の一篇を貫いて居るのだ。それが又熱くもなければ冷やかでもない、信仰もない癖に、自分では善人だと考へて居るやうな生溫い人間を心から唾棄して、極端から極端に走らねば我慢の出來ない此作者の必然の歸趨でもあらう。

主人公スタフローギンは、土木師キーリロフの言葉に從へば、『神を信ずるとしても、自分が神を信じて居ることを信ずることの出來ない、又神を信じないとしても、自分が神を信じて居ないといふことを信ずることの出來ない』やうな人間である。換言すれば、ニヒリストとも成り得ないやうな、徹底的なニヒリストである。此處に此主人公の怖ろしい宿命が有る。これが若し『父と子』のバザロフであつたら、自分の時代さへ來れば、彼も其の處を得るのだが、スタフローギンは永劫其の處を得る期がない眞個息の塞るやうな惡鬼である、豚の中へでも這入る外に仕樣がないのだ。

ビョートルに到つては典型的なニヒリストである。彼は毫末も自分がニヒリストであることを疑はない從つて一番惡辣な仕事も爲るが、同時に彼も亦一種のアイデアリストである。そして、スタフローギンを以て自分の理想として居る、自分の『より善き半身』として居る。但し彼は單に在來の神を否定しただけで、『人神』は未だ彼の中に醱酵して居ない。所謂『超人』の觀念に膠着して離れないものは、半狂人のキーリロフである。

フリードリッヒ・ニイチエは常にドストイエフスキイを指して、『わが師、わが師』と稱んだものださうな。ニイチエを俟たずして現はれた超人說の萌芽は、此作者の作品の隨處に散見されるが、キーリロフに於て最も明確に形式を與へられて居る。が、自分は本文を先まぐつて、此處にそれを紹介することを避けたい。讀者は何れ作者自身の言葉に依つてそれを聞かれることと信ずるからである。なほ『惡靈』の中には殆ど言葉其儘作者の自敍傳に現はれて來るやうな不思議にも個人的な調子が出て居る。例へば、キーリロフがシャトーフに對して永劫調和の瞬間を說く邊

りがそれで、『此の五秒間を體驗するためには、自分の一生涯を與へても厭はない』と言つて居る。シャトーフは、『それは癲癇病者の症候ぢやないか、少くとも今に左樣成るんだよ』と、マホメットが手桶の水の一滴も溢れない間に、馬に乘つて天上界を一周した例を引いて、心配相に注意したが、實にわがフヨードル・ドストイエフスキイは、西曆千八百二十一年自分と同じ年に生れた佛蘭西の自然主義の權威ダスタース・フローベルと共に、二人ながら癲癇病者であつたのだ。

　がドストイエフスキイ自ら一番大きな國民的眞理と信じて居るものを道破し得たのは、『人神』の探究者キーリロフではない却て基督敎徒のシャトーフであり、彼はスタフローギンに對して、『有らゆる人民の有らゆる時代に於ける、有らゆる國民的運動の目的は、只此の神を求める心にあつた。其神は其國民自身の神でなければ成らぬ。唯一の眞の神としての神に對する信仰でなければ成らぬ。神は其の始終を通じて國民全體の綜合的人格である』と叫んで居る。彼は又露西亞の神を信じて居る。露西亞の神がやがて歐羅巴復活の使命を遂げ得ることを信じて居る。そして、ドストイエフスキイ自身はシャトーフと共に固くそれを信じて居たものらしい。

　で、露西亞の神とは何んなものか。それは露西亞の神が實現された曉でなければ、何とも言はれないが、ドストイエフスキイの覩る所に據れば、無限の同情と自己犧牲の廣大な理解とは露西亞の國民的標的である。シャトーフは數年前に自分を捨てゝ去つた妻が隱れ家を求めて歸つて來た時、謙遜に又感謝に充ちてそれを受け容れた。彼は再び新しい生命が自分の中に蘇つたやうな氣がして、妻と胎兒とを、自分の子でない、他人の子とを扶育しようとした。此一場は露西亞人でなけりや、露西亞人の中でも最も露西亞人らしいドストイエフスキイでなけりや、能く描し得るものは有るまい。

　以上擧げた人物の外に、作者はなほ西歐文明の心酔者として、時代後れの文學者カルマーヂノフを描いて居る。此人物は一般にツルゲーネフの烏羽繪として認められて居る。勿論それがストイック風な『煙』の作者に些とだつて似て居ようとは思はれない。寧ろそんな物を描いたといふことは、聖者ドストイエフスキイの興へる印象に一點の暗所を殘したやうにも思はれるが、『惡靈』の作者から觀れば、ツルゲーネフが全然本國との接觸を失つて、露西亞に於ける青年の憧憬に無感覺に成つたやうに見えたのは、又無理もない次第であらう。

　『惡靈』は千八百七十三年、フヨードル・ミハイローギーチ・ドストイエフスキイが五十三歲の時の作。此年以後、彼は永い間の流浪からペテルスブルグに歸つて、比較

的安らかな晩年を送つた。

大正四年七月三日

森田草平

凡例

一、此書はメレシユコーフスキイ監修の獨逸譯とコンスタンス・ガアネットの英吉利譯とを對照重譯したものである。只獨逸譯の方は理義明白、透徹した文章ではあるが、間々省略して大體の意味を取つたところが有る。で、邦譯は大體英吉利譯に據ることにして、餘りに文章のごたごたした怪しげな箇所だけ獨逸譯に據ることにした。

一、卷中挿入の佛蘭西語は原書にも佛西蘭語を用ひたところである。これを一概に邦譯して仕舞ふと、原作者が故らに佛蘭西語を使つた主意が立たなく成つて、意義の不明を來す患れもあるから、そこだけ原文を挿入して、括弧の中に其の譯語を挟んで置くことにした。佛蘭西語の譯は大體友人東新君に就いて一々敎へを受けたもの、但し誤譯のあつた場合には、未熟な譯者の責任と思つて貰ひたい。

一、佛蘭西の譯語の外に、邦人に解しにくい固有名詞などに就いて、二三譯者の註を括弧の中に挿入したところが有る。尤も、作者自ら括弧の中に割註の體裁で書いて居るところも少くない。それ等は一々それ〴〵の場所に據つて、讀者自ら判斷して頂きたい。

一、卷頭の作者肖像は最近セルゲイ・エリセーエフ君が露都から小宮豐隆君の許へ送つて寄起した寫眞から製版したものに係はる。

一、此書は大正三年の初夏から着手して、翌年の四月中旬迄、其間中絶した期間もあるが、約一年を費して譯了したものである。

目次

第一卷

第一章　發端……一
第二章　ハアリイ公子　媒妁……四四
第三章　他人の罪惡……九八
第四章　不具者……一六三
第五章　狡猾な蛇……二二四

第二卷

○第一章　夜……二八五
第二章　決闘……三九五
第三章　皆人待つ……四一四
第四章　祭の前夜……四四六
第五章　ピヨートル●ステパーノヴイーチの多忙……四八〇
第六章　會合……五四八

目次

第七章　イヴン太子……五八五
第八章　家宅捜索……六〇二
第九章　命數の朝……六一九
第三卷
第一章　祭の第一部……六五三
第二章　祭の終り……六九一
第三章　ローマンスの終局……七三三
第四章　最後の決心……七六七
第五章　放浪者……八〇四
第六章　忙しない夜……八五四
第七章　最後の彷ひ……九〇四
第八章　大團圓……九五八

惡靈

第一卷

露國　ドストイェフスキイ著

森田草平譯

第一章　發端

一

近頃迄平穩無事に濟んで、其名も知られない吾々の町の最近の珍らしい事件を物語らうと企てたところが、私の文藝上の技巧が足りないために、據所なくずつと後へ戻つて、多能にして多大の尊敬を博した紳士ステパーン・トロフィモーヰチ・ヴェルホーヱンスキイに關する傳記から始めなければ成らない。で、最初企てた物語は後廻しとして、私は先づ發端としてそれから語る積りである。

早速ながらステパーン・トラフィモーギーチは吾々の中で進歩的志士とも云はゞ云へるやうな一種の役を承はつて居た。それを又彼は非常に好んで演じたもので、それがなけりや彼は存在しないと言つても可い位のもので有つた。かう言つた處で、私は實際彼を尊敬して居るのだから、決して舞臺の役者と同列に見る譯ではない。恐らくそれは彼が若い時代から快い白晝の夢に耽つて、公人として自ら翻れるやうに考へて來た習慣、最つと精確に言へば一般的傾向の結果で有つたらしい。例へば、彼は自己の地位を『迫害されたる人』として、卽ち『流人』として考へることを好んで居た。此の二つの小さな言葉には一種の傳說的光彩が副つて居て、それが無暗に此人の氣に入つたのだ。そして、彼自身の眼に映ずる彼の姿をだん〳〵大きくして、數年の間には甚しく自尊心を滿足するに足るやうな高い臺座の上へ持上げて仕舞つたのだ。前世紀の英吉利の諷刺にガリヴーといふ男が有つて、住民の身丈の高さが三四寸しかない小人國から歸つて來たが、其國に有つては自分を巨人と考へることに慣らされて居た所から、倫敦の町を步いて居る時でも、なほ他人は皆小さく自分は巨人であると考へて、道行く人や馬車を踏み潰しやしないかと云ふ心配から、其處退けとか氣を附けろとか喚くことを禁じ得なかつたと云ふ話が有る。其男はそれが爲に笑はれ罵られ、馭者などは鞭で此の巨人を毆つたとさへ云ふのだ。が、それは果して正當で有らうか。何を爲たつて習慣なら致方がない。習慣はステパーン・トラフィモーギーチをも殆ど同じやうな地位に持つて來たのだ。只、此方は前者よりも一層無邪氣で、相手に腹を立てさせないと言はれるかも知れない。何となれば、彼はすんど立派な人物だからで有る。

加之、彼も今は到る處忘られて仕舞つたが、一時は相應に名を知られたものだ——尤もそれは短い間だつたけれども、眞個一時は前代の有名な指導者どもの星座に屬して、氣の早い連中の口にかゝつては、ベリンスキイやヘルチェンや、其他露亞亞の文學者と一緒に其名を謳はれたものだ。が、ステパーン・トラフィモーギーチの活動は、所謂『いろんな事情の渦卷』のために、殆どそれが始まると同時に止んだ。處が、如何でせう？後に成つて見ると、少くとも左樣いふ關係では、一つも『渦卷』と云ふやうなものもなければ、『事情』と云ふものもなかつたと云ふことが判つた。其後、私は只かう云ふ事を聞いて驚いた。最も信憑すべき筋からですがね。ステパーン・トラフィモーギーチが吾々の州に、吾々の仲間にあるのは、吾々が信じて居るやうに、別段流人としてではない、又全く警察の監視の下に有るのでもないと云ふのだ。想像の力は實にこれ位のもので有る！一生涯の間、彼は眞面目に次のやうな事を信じて居た。或方面に於て、彼は絕えず恐怖の源で有つた、彼の取る一步々々は常に監視され注目された、吾吾の州に於て二十年の間に交代した三人の知事は、辭令を受ける際に、何よりも先づ彼に關する特殊の不安な觀念を官邊から授けられて赴任して來たのだと。何人かゞ有つて、打破り難い論據の下に、彼が何物をも怖がるに及ばないことを證明したとすれば、彼は屹度腹を立てたに相違ない。然もステパーン・トラフィモーギーチは聰明にして多能な人で有つた。或は寧ろ學者と云つても可い。尤も學藝界に於て、彼は別段大した事をした譯ではないけれども……私は更に彼が何にもした事がないことを注意しなければ成らぬ。

四十年代の末に、彼は外國から歸ると直に無給講師として大學の講座を開いた。が、私の信ずる處に據れば、それはアラビヤ人に關した問題で、一二回しか續かなかつたやうだ。同時に彼は獨逸の小都市ハナウの政事上並に商業同盟上の重要なる地位に就いて、或は寧ろ當時に於ては更に其樣な地位に到達しなかつた特殊な不分明な理由に就いて、一論文を公けにした。此論文は、露西亞とは勿論深い關係はないけれども、少くとも彼自身の見る處

に從へば、スラヴ民族主義者の最も敏感なる者の間には一種の注目を惹いた。從つて又一擧にして多數の恐るべき敵を作つたものだ——尤も、これも彼自身の見解に從つたのだけれども。其後、彼は講師としての地位を失つた後で、謂はゞ復讐のために、何んな人物を彼等が失つたかを見せて遣らうとして、嘗てディツケンスを飜譯し、チョーチ・サンドの主義を標榜して居る或進歩的月刊雜誌の上に、或時代に於ける或騎士等の非常に立派な道德心の由來に關する極めて深遠な研究の最初の部分だけを發表した。

兎に角、其中には高遠な、特別に高尙な思想が含まれて居たらしい。其後聞けば、其續きは急いで禁止された。それを載せた雜誌も其爲に多大の苦痛を嘗めたと云ふのだ。當時は何んな事でも有り得たのだから、隨分そんな事も有つたらう。が、此場合に於ては、何うも左樣いふ事は全然なかつた、又著者自身も其論文を完成するには餘りに意情者で有つたと云ふのが事實らしい。彼がアラビヤ人に關する講義を止めたのも、或男に或事情を知らせて遣つた手紙を如何してか或男——多分反對黨の一人——に握られた、其結果或者が彼に說明を求めたからだと云ふのだ。私は其話の事實か否かを知らない。が、同時に彼得斯堡に於て、全露西亞帝國の基礎を危くするやうな、大きな、非國家的な十三人の徒黨が發見されたと云ふのだ。加之、彼等は將にフウリエーの飜譯に着手しようとして居たのださうな。

此時に當つて又運惡くステパーン・トラフィモーギーチの詩が英斯科で官憲の手に沒收された。それは彼が六年以前伯林在學中に書いたもので、其寫本は友人の間にぐる〳〵廻されたものだ。其詩は今私の机の上にも有る。これは私が去年彼自身の手に成つた最近の寫本をステパーン・トラフィモーギーチから自ら署名した上で貰つたものだ。立派な鞣皮の表裝である。決して詩的價値のないものでもなければ、或程度の才能も見られる。が、三十年代の人が常にかう云ふ文體で物を書いたのは不思議だと云ふ外ない。一體何が其中に書いてあるか、此處で紹介しようと思つても私には出來ない。實際、私にはそれが解らないからで有る。まア言つて見れば、ファウストの第二部を想はせるやうな抒情詩的戲曲の體を取つた、一種の比喩譚でも有らうか。第一の場は女聲の合唱に始まり、續いて男聲の合唱、それから一種の無形な力の合唱に移つて、最後に未だ生きては居ないが、早く生命に來ようとして焦慮つて居る靈性の合唱に終る。これ等の合唱は皆極めて曖昧な何物かに就いて、大部分は何人かの呪詛に就いて唄つて居る。が、それには、より高い氣分の色調も出て居る。そして、急に其場は一變して、『生の祭』とでも云ふやうな一種のお祭騷ぎが始まる。其中では蟲も唄へば、龜まで聖晩餐の羅典語を稱へながら舞臺へ出て來る。私の記憶に誤りなくば、金石すら全く生命のない物に就いて何か知ら唄ふのだ。實際、彼等は皆絕えず唄つて居る。時に對話することが有れば、只漠然と互に罵り合ふばかりだ。が、それも又より高い意義を有つて居るので有る。最後に場面が又一變した。荒野が有つて、岩角の中を一人の文明的青年が彷ひながら草の根を採つて汁を吸つて居る。何故そんな草の汁を吸ふかと神仙に訊かれて、彼は自分の文明的生命の過剩を自覺して忘却を求める。そして、それを草の根の汁に見出した。が、彼の眞の願ひは直に理性を失ふにありと答へた。其時又何とも言はれない一人の美少年が鹿毛なる馬に打乘つて遣つて來た。其後から有らゆる種類の國民がぞろ〳〵と隨いて來た。少年は死を代表して、有らゆる國民がそれに憧れて居るのだ。そして、最後に終りの幕に於て、吾等は急にバベルの塔を見せられる。數人の力士が新しい希望の歌を唄ひながら、終に其建立を成就した。終に彼等が頂上の尖塔を完成した時、オリムピヤの主は可謔た風をして遁出すのだ。そして、人間が其地位と玉座とを占領して、直に事物に對する新しい觀察を以て新しい生活を始める。で、當時に有つては、此詩が危險と見做されたのだ。去年私は今ならそれが全

然無害であるといふ理由の下に、ステパーン・トラフィモーギーチに其詩の出版を勸めて見た。が、彼は明かに不滿足の色を見せながら斷つた。それが全然無害であるといふ私の意見は明かに彼を喜ばせなかつた。加之、私は其後二箇月の間引續き彼が私に對して冷淡で有つたのも、それが爲で有らうと信ずるので有る。

で、如何でせう？不意に、恰度私がそれを出版したらと建言した時分に、其詩は外國で革命詩集の中にステパーン・トラフィモーギーチの承諾を經ずして出版された。彼も最初は吃驚して知事の許へ飛んで行つた。そして、彼得斯堡へ向け自己防衞のために長い手紙を書いた。彼はそれを二度私に讀んで聞かせた。が、誰に宛てゝ可いか分らない所から、到頭それは出さずに仕舞つた。實際、彼は一箇月餘りも昂奮狀態に有つた。が、私は信ずるので有る、心の奥底では彼は非常に嬉びられて居たのだと。彼は詩集の一册を病床へまで持つて行つて、晝間はそれを敷蒲團の下へ隱して置いた。彼は何んな事が有つても、女どもに床を上げさせなかつた。同時に彼は何處からか知らないが、又何んな電報か知らないが、兎に角萬事終るとでも云ひさうな電報を毎日待つて居た。勿論そんな電報は來なかつた。それから彼は極端に優しい憤らない人物の證左として、再び又私と仲善しに成つた。

二

私は敢て彼が彼自身の信仰のために苦しんだことがないとは言はない。が、私は只彼が必要な說明さへ與へたりや、なほ所好なだけアラビヤ人の講義を續けて居られたのだと堅く信ずるもので有る。が、彼は餘りに尊大で有つた。彼は彼に特有な大急ぎで以て、彼の一生が『いろんな事情の渦卷』のために永久に失はれたことを證據立てようとして進んで行つた。で、本當の事を言はうなら、彼の經歷に於ける變化の眞の原因は、ワルヴーラ・ペトローヴナ・スタフローギンと云ふ中將閣下の夫人にして、富裕な貴婦人から以前にも申出され、今又新にされた、一種の立派な師友として、大枚な報酬に就いては言はずもあれ、彼女の一人息子の敎育と知的發展の全部とを引受けて貰ひたいと云ふ、穩やかな申出に歸すべきもので有つた。此の申出は最初彼が鰥夫に成つた時、伯林で言出された。最初の妻は吾々の州に生れたやくざな娘で、彼が考へのない靑年時代に結婚したのだ。此女のためには、彼も隨分手古摺つたものらしい、第一には二人の生活を支へて行くだけの金がないために、次には最つと微妙な理由のために。此女は三年間彼と別れて居た後で、五歲に成る子を殘して置いて巴里で死んだ。二人が最初の樂しい曇らざる愛の結晶』とは、嘗て此の悲しげな父が私の前で漏した言葉で有つた。其子は最初から露西亞へ戻されて、或片田舍の從妹どもの手に育てられた。ステパーン・トラフィモーギーチは其儘外國に殘つて居たが、其際ワルヴーラ・ペトローヴナの最初の申出を斷つて、一年の喪が明けない間に、再び伯林生れの寡言な女と結婚して仕舞つた。此處に不思議なのは、別段そんな事をする必要がなかつたことで有る。恐らく結婚とは別に其地位を斷る他の理由が有つたのであらう。彼も當時に於ては有名な大學敎授の地位に憧れて居た。そして、今度は彼自ら鴻翼の飛翔を試みるべく、かねて準備して居た講師の椅子に向つて急いだ。が、それも一たび翼折れた今と成つては、自然の情として、先に躊躇した申出を想出さずには居られなかつた。一年も彼と同棲しなかつた二度目の妻の卒急な死は此事件を解決した。明らさまに言へば、ワルヴーラ・ペトローヴナの情熱的な同情と、若し友情に就いて左樣いふ表現が用ゐられるならば、彼女の憤に測られない古典的な友情とに依つて、萬事がさら〳〵と搬ばれたのだ。彼は此友情の腕に身を投げ掛けた。そして、二十年以上の間彼の地位は定まつて仕舞つた。私は此處に『腕に身を投げ掛ける』と云ふやうな句を使つた。が、何人と雖それから物好な、餘計な結論には飛んで貰ふまい。二人の抱擁は最

も高潔な倫理的意味に於てのみ解せらるべきもので有る。最も精練された微妙な束縛が此の著しい二つの存在を永久に結び着けたので有る。

一つは彼が最初の妻に依つてステパーン・トラフィモーギチに遺された、極めて小さな所有地が、吾々の州の首府の外廓にあるスタフローギン家の莫大な所領スクヴォーレジュニキに隣接して居た處から、此の家庭教師の地位が一層容すく引受けられた。其他大學の仕事の重大な負擔から遙に遠ざかつた書齋の靜寂の中に、彼は專念科學の研究に沒頭することも出來れば、又卓越した研究に依つて露西亞の文學を豐富にすることも出來た。勿論、其研究の結果は世に現はれなかつた。が、一方では、祖國に對する『生きた非難』として、彼が殘餘の生涯の二十年を悉くそれに捧げることも不可能ではないやうに見えた。卽ち有名な詩人の句を藉りて言へば、

『汝は生きたる非難として、
祖國の前に立てり、眞直に。
あゝ、自由なる理想主義者よ。』

勿論、此詩で本來謳はれた人は、それが思召に適ふたりや、縱しや終ひには僞いて來るとしても、一生の間其姿勢を續ける權利を有つて居た。わがステパーン・トラフィモーギチに到つては、正直のところ左樣いふ人達に較べると、只模倣家に過ぎない。加ふるに、彼は最う眞直に立つことに倦んで、少許の間を見ては屢々橫に成つたものだ。が、彼のために辯ずれば、『生きた非難』は僅臥した姿勢の中にもなほ保存されて居た。特に田舍はそれで十分だと云ふから、猶更左樣で有る。彼が俱樂部へ來て、骨牌でも取つて居る時に覗いて見るが可い。彼の全姿勢は『骨牌よ、少時お前と一緒に遊ばせて呉れ！一體、如何してこんな事に成つたのか。誰の責任なのか。誰が俺の精力を打碎いて、骨牌なぞを取るやうにして仕舞つたのだ？あゝ、死んじまへ、露西亞よ』と言つてるやうに見えるではないか。

而も、正直の處、彼は骨牌の遊戲を非常に嗜いて居た。特に晩年に於ては、一つは彼が始終負けてばかり居たためでも有らうが、屢々ヴルヴーラ・ペトローヴナと不愉快な小競合ひを始めた位のもので有る。が、それは又後の事。私は只彼が立派な人格として、時々——卽ち始終ではないが——此遊戲に對する嗜好の酬ひを受けた。そして左樣いふ時には屹度深い憂欝に陷るのを常としたことを棄けて置きたい。其他彼はヴルヴーラ・ペトローヴナと二十年の友交の間に、一年に三四度づゝは屹度——吾々の仲間で稱へた處に從へば——『愛國的悲哀』の狀態に陷るのを常とした。尤もそれは實際不機嫌の發作に襲はれると言つた方が可いかも知れない。が、吾々の尊敬すべきヴルヴーラ・ペトローヴナは特に前者を撰んで居た。近年に成つて、彼の悲哀は單に愛國的であるばかりでなく、時としては酒精的にも成つて來た。が、ヴルヴーラ・ペトローヴナの細心な注意は一生の間彼をそんな可厭しい傾向から防止することに於て成功した。實際、彼には誰かが始終附添つて居る必要が有つた。時として彼は非常に馬鹿な眞似をすることも有るからだ。彼は悲哀の高潮に達した時、野呂間な百姓のやうに笑ひ出すことも有つた。又彼は自分自身に就いてすら巫山戲るやうな調子で饒舌ることが有つた。何が嫌ひだと言つても巫山戲た調子ほどヴルヴーラ・ペトローヴナの嫌ひなものはなかつた。彼は女のミシナス（羅馬の政事家にして文學の保護者、詩人ホレースの友）とでも云ふやうな、古典的儀型の女性で、始終最高の理想に依つてのみ動くことを心掛けて居た。此の高尙な婦人の憐れな友人に對する二十年間の影響は、實際特筆すべきものが有る。私は筆を改めて、彼女に就いて委曲物語るで有らう。

三

此處に一種の友情がある。二人の友は良もすれば、常に互に飛びかゝらうとして居る。斯くの如くにして一生を經ながら、而も互に別れることが出來ない。實際、別れると云ふことは全然不可能なので有る。最初に喧嘩を始めて別れた者が先づ病氣に成つて、若し其別離が事實と成らうものなら、恐らくは死にさへもするのだ。私はステパーン・トラフィモーギチがヴルヴーラ・ペトローヴナと仲善く話して居た後で、不意に長椅子から躍り上つて、拳骨で壁を叩き廻つたのを幾度となく知つて居る。それが只見えや醉興でするのではない。實際文字通りに遣附けるのだ。嘗て彼が壁の漆喰を剝がしたことも有る位文字通りに遣附けるのだ。それぢや、私が如何してそんな委しい事を知つてるかと訊かれるかも知れない。が、私はそれを自分で目擊したと言つたら如何で有らう。ステパーン・トラフィモーギチ自身私の肩に顏を押當てながら、涙の中に、彼の最も祕密な感情を私に話つて聞せたことも一度や二度ではない。こんな場合彼は何んな事でも言はずに置かれるやうな人ではないのだ！が、通例こんな涙に充ちた昂奮の後では、次の日屹度後悔して自己の忘恩を責めるのを常とした。彼は遠てゝ使を寄越したり、又は自分で遣つて來たりして、只ヴルヴーラ・ペトローヴナが『高尙な優しい天使であるのに、自分は其反對だ』と云ふやうなことを私に言つて聞かせたものだ。彼は只私の許へ來て打明けるばかりでなく、又それをヴルヴーラ・ペトローヴナに宛てた能辯な手紙の中に書いて、自分の惡い事を白狀した。例へば、昨日第三者に對して、彼女は只虛榮心を滿足させるために自分を養つて置くのだ、彼女は自分の才能と博學とを妬んで居るのだ、彼女は自分を憎んで居るが、只自分が彼女の許を去つて、其爲に彼女の文學的名聲を傷けることを恐れて、公然其憎惡を口にすること

を憚つて居るのだと告けたとか、其結果自分は自己を卑しむ情に堪へずして、到頭自殺して死なうと迄決心したとか、今は只彼女の最後の言葉を待つて萬事を決定する積りだとか、そんな樣な事をくど〳〵と述べ立てるのだ。其後で、此の無邪氣な五十歲の子供の神經質的破裂が時として何んなヒステリイ的高潮に達したかは、讀者の想像に任せて置きませう。私は嘗て彼等の間に或些細な事柄から起つて、それが續いてる間にだん〳〵毒々しいものと成つた喧嘩の後で、其種の手紙の一つを見せられたことが有つた。私は只最う惘れて仕舞つて、成たけならそんな物は送らないやうに勸めた。

『そりやア出來ない……僕は名譽にかけて……若し此際一切を白狀せずに置いたら、僕は死んで仕舞ふのだ！』と、殆ど氣でも狂つたやうに答へながら、彼は其手紙を送つて遣つた。

此處にヴルヴーラ・ペトローヴナと彼との間に重要な相違が有つた。彼女はこんな場合決してこんな手紙を彼に送らなかつた。いや、何んな手紙でも送らなかつた。これに反して、彼は手紙を書くことが大所好なのだ。同じ家に住んで居る時でさへ彼女に宛て、書いた、日に二度受取つた時でも左樣で有る。彼女はそれを讀んだ後で、種類別をして、注釋まで加へて、特別の抽斗に納つて置いた。加之、彼女は心の中で凝乎とそれを考へて居たものだ。が、彼女達に對して、一日返辭を遣らずに置いた。彼に會つても、そんな事は何にも知らないやうに、精密に言へば、格段な事は何一つ起らなかつたやうに振舞つた。だん〳〵彼女は彼を慣らして行つて、終ひには彼の方でも前日起つた事を口にし得ないやうに、只時々彼女の眼を怖る〳〵見遣る位にした。が、彼女は少しでもそれを忘れて居るのではない。却て男の方では時として餘りに早くそれを忘れて、女の落着いて居るのに勵まされて、其日の中でも

お客なぞが有ると、三籟なぞ出して、一緒に笑つたり戯談を言つたりすることも稀れではなかつた。こんな時何んな怖ろしい顔をして彼女が彼を睨めて居たで有らう。而も彼は少しもそれを知らないのだ！一週間も經つてから、一箇月も經つてから、乃至半歳も後に成つて、始めて如何かした機會に彼はこんな手紙の中の一句を想出すことが有る。それから段々言葉を辿つて行つて、手紙全體を細かな點迄想出した時には、急に恥かしさに火熱りながら、顚倒して、彼の所謂『夏の虎列刺』に罹るのだ。これは通例彼が神經質的昂奮の結果として起る一種の病氣で、又彼の體質の面白い特徴で有つた。

疑ひもなくヴルヴーラ・ペトローヴナは時々彼を憎みもしたらう。が、此處に彼が最後まで洞見することの出來なかつた一事が有つた。それは彼が彼女の息子に成つた、精神的創造と成つた、言ひ得べくんば、一種の發明に成つたと云ふことで有る。彼は彼女の肉の肉と成つた。單に『彼の才能に對する嫉妬心』からばかり彼を支持して居るのではない。が、こんな事を言はれたら、彼女は何んなに自尊心を傷けられることで有らう！而も彼女の胸の中には彼に對する無限の愛が絶えざる憎惡の下に、嫉妬の下に、時としては輕蔑の下にも隱れて居るのだ。彼女は一片の塵と雖も彼の上に落ちることを許さなかつた。彼女は二十餘年の間彼を甘やかして育てゝ來た、彼の詩人として、學者として、公人としての名譽の上に、極めて微かな支障でも有れば數夜續いて眠らないことさへ有つた。彼女は彼を發明した、そして自己の發明の上に信ずる第一の人で有つた。謂はゞ、彼は彼女の眞晝の夢で有つた。其代りに、彼女は又彼から多くを要求した、飽迄彼を支配しようとした、飽迄干渉しようとした。彼女が彼に對して何時迄慣つて居たかと云ふことは、一寸解らない。私はそれに就いて二つの話を知つて居る。

四

或時、奴隷解放の噂が始めて傳はつて、全露西亞が根本から改革されようとして居た頃、ヴルヴーラ・ペトローヴナは彼得斯堡（ペテルスブルグ）から來た一侯爵の訪問を受けた。其侯爵は高貴の間に緣邊も有つて、殊に今度の新しい改革とは密接な關係を持つて居た。ヴルヴーラ・ペトローヴナは所天の逝去以來だん〳〵貴族社會との關係が薄く成つて、終には全然絶えて仕舞つたやうな際だから、特に此訪問を光榮とした。侯爵は彼女と一緒に茶を飮んで一時間餘りを費した。ヴルヴーラ・ペトローヴナはステパーン・トラフィモーギーチを喚んで侯爵に紹介したが、其他には誰も其場に居合せなかつた。侯爵は前から彼の名を聞いて居た、或は聞いて居るやうな風をした。が、お茶の間別段彼に注意を拂はなかつた。ステパーン・トラフィモーギーチが社交上馬鹿な眞似を仕出かさうとは思へなかつた。其態度は極めて閑雅なもので有つた。私は彼が貴族の生れだとも信じないけれども、子供の時分から莫斯科の位置の高い家に育てられて、其結果好い躾けの下に生長した。彼は佛蘭西語も巴里人のやうに話した。斯くの如くにして、侯爵は一目してヴルヴーラ・ペトローヴナがこんな片田舍に住ひながら、何んな種類の人間に取卷かれて居るかを了解しなければ成らぬ筈で有つた。が、事實は左樣思惑通りには行かなかつた。侯爵が斷々乎として大改革の風聞の絶對的に眞理で有ることを證言した時、ステパーン・トラフィモーギーチは思はず知らず『ウラア！』と叫んで、何か喜悅を表すやうな身振迄した。彼の絶叫たるや、別段大きな聲といふ譯でもなく、極めて愼重なもので有つた。想ふに、彼の喜悅は豫め考へて置かれたもので、其身振もお茶の始まる半時間も前に鏡の前でわざ〳〵研究されたものらしい。が、何處か其中に間違つた處が有つたに違ひない。侯爵はにつと薄笑ひを漏しながら、微かな侮蔑

の色を見せて、今度の改革が一般露西亞人の上に齎す喜悅の狀を語つて聞かせた。間もなく彼は分袂を告げて立上つたが、其際ステパーン・トラフィモーギーチにも二本の指を差出すことを忘れなかつた。客間へ戻つた時、ヴルヴーラ・ペトローヴナは最初二三分の間默つて、何か机の上を捜して居るやうに見えた。次に彼女は蒼白い顏を上げて、血走るやうな眼に屹とステパーン・トラフィモーギーチを見遣りながら、囁くやうに叱咤した。

『こればツかりは、私は斷じて宥しませんよ！』

次の日、彼女は何事もなかつたやうな顏をして友達とも話をした。それからも、決して其事を言出さなかつた。が、十三年經つた後、急にそれを想出して、彼を責めた。そして、十三年前と同じ樣に眞蒼に成つた。一生涯の間に、只二度だけ彼女は彼に向つて言つた。

『こればツかりは、私は斷じて宥しませんよ』と。

此の侯爵に關した事件は實は二度目で、最初の事件の方が一層特徴も有れば、又一層多くの影響をステパーン・トラフィモーギーチの運命の上に及ぼしたものだ。私は又敢てそれに就いて語つて置きたい。

それは千八百五十五年の春五月、恰度浮氣な老紳士の陸軍中將スタフローギンが老齡にも拘らず、實戰に參加しようとして、急いでクリミヤに向ふ途中胃病で死んだといふ報知がスクヴォーレジュニキに到着した後間もない頃で有つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは一朝にして寡婦と成つて、最も深い喪服に包まれて居た。が、實際の處、彼女は餘り所天の死を悲しんでは居なかつた。と云ふのは、彼女は氣立の不折合から最う四年間も所天と別居して、毎年幾許づゝの扶持を與へて居たからだ――中將自身は百五十人の奴隷と、俸給と、位置と、緣邊との外に何にも有つて居なかつた。總ての金子とスクヴォーレジュニキの所領とは、富豪の請負人の一人娘なるヴルヴーラ・ペトローヴナに屬して居た――けれども、彼女は事の餘りに急なるに驚愕して、全然孤獨の地位に退いた。勿論ステパーン・トラフィモーギーチは始終彼女の傍に居たけれども。

時は五月の最中、野櫻の花が眞盛りで、夕方の眺めは殊に好かつた。二人は夕方毎に園の中を散歩して、日が暮れるまで四阿に腰掛けながら、互に思想と感情とを心行く迄傾け盡すのを常とした。彼等は詩的な瞬間を味つたのだ。ヴルヴーラ・ペトローヴナは彼女の地位の轉變の影響の下に、平常よりは好く饒舌つた。實際、彼女は友の胸に縋り着いた。そんな事が幾晩も續いた。處で、『こりやア如何かすると此の慰む處のない寡婦さんは自分を當にして居るのぢや有るまいか、所天の喪が濟んだ時は、自分が手を捧げるのを待つて居るのぢや有るまいか』と云ふやうな、妙な考へが不圖ステパーン・トラフィモーギーチの心に泛んだ。誠に皮肉な考へだ。が、皮肉な考へと云ふものは、左樣卑しい心からばかり起るものではない。却て其修養の多面的なるがために、上品な人にもそんな心持は有るものだ。彼は最つと深く相手の心を探らうとした。そして、矢張何うも左樣らしいと考へた。彼は積つて見た、『彼女の財產は莫大なもので有る、併し……』ヴルヴーラ・ペトローヴナは確に美人とは云はれなかつた。彼女は身丈の高い、黃色な、馬面の骨張つた女で有つた。ステパーン・トラフィモーギーチはいよ〳〵[illegible]、疑惑のために惱まされた。彼は餘まり心が決らないので、一度か二度本當に泣いたことが有る。尤も、[illegible]珍しくない。夕方には、卽ち四阿では、彼の顏に氣心の變り易い、何やらにや〳〵した、人に媚びるやうな、同時に人を見下すやうな表情が現はれ始めた。こんな表情は我知らずひよツこり現はれ勝ちなものだ。特に其人が紳士らしければ紳士らしい程、一層好く目立つもので有る。で、これに就いては、他人は如何考へて可いか分らない。が、併しヴルヴーラ・ペトローヴナの心の中では、何うもステパーン・トラフィモーギーチの推測を確實にするや

うなものは、未だ何にも動き始めなかつたと見るのが至當らしい。加之、彼女はスタフローギンの姓を、幾許有名だと云つても、彼の姓に取換へようとは思はないだらう。恐らく、女の方には女性の遊び——極端に女性的な型の女には、極めて自然な女性的憧憬の無意識な表はれ——の外に、別段深い意味はなかつたのかも知れない。が、私が何もそんな事を保證する限りではない。女の心の深さと云ふものは、今日迄未だ解つて居ないからで有る。兎に角、私は先を急ぐのだ。

で、間もなく、彼女も內心に於ては相手の妙な表情の意味を推察したものらしい。こんな事に掛けては、男のほんやりして居るのに對して、女と云ふものは目が疾いからだ。が、夕方の散步は今迄通りに續いた。二人の會話も矢張詩的で面白かつた。處が、或日のこと平常よりも一層活潑な、詩的な會話の後で、夜が來た時、二人はステパーン・トラフィモーギーチの寢る小舍の前の階段の下で、互に厚く手を握り合ひながら別れた。毎年夏に成ると、彼は大きなスクヴォーレジュニキの殿樣めいた館に隣して、庭園の中に立つて居る小舍へ移るのを常とした。彼は今其小舍の中へ這入つて行つて、何やら落着かなさ相に葉卷煙草を取上げて、未だ火も點けずに、窓の前に立つたまよ、照渡る月の周りを滑つて行く羽のやうな白い雲を眺めて居た。其時不意に微かな裾の音がしたかと思ふと、彼は吃驚して振返つた。只四分間前に別れたヴルヴーラ・ペトローヴナが再び彼の前に立つて居た。彼女の黃色い顏は蒼く成つて居た。彼女の唇は堅く閉ぢられて、其隅がびく〳〵と痙攣つて居た。十秒間も、彼女は默つて弛みのない凝視の下に相手の眼を見据ゑて居た。そして、急に口疾に囁いた。

『こればッかりは、私は斷じて宥しませんよ。』

其後十年經つて、ステパーン・トラフィモーギーチは、四邊の扉を閉めてから、囁くやうにして此の憐れな話を私に打明けた。彼はヴルヴーラ・ペトローヴナが何時如何して居なく成つたか、見もしなければ聞きもしなかつた程、其場に化石して仕舞つたさうな。彼女は其後此事に就いては一度も言出さないし、又總ての事が何事もなかつたやうに續いて行つた處から、彼は一生の間それが皆幻覺ではないか、何か病氣の徵候に過ぎないのではないかと云ふ考へに傾いて居た。特に其晚彼が實際病氣に成つて、二週間も枕が上らなかつた處から、左樣思つたものらしい。序ながら四阿の會談も其爲に中止と成つた。

五

が、彼の幻覺に關するおほけな理論にも係らず、彼は一生涯の間每日此事件の續行を、原へ歸ることを待ち望んで居るやうに思はれた。彼にはあんな風にしてそれが終るものとは信ぜられなかつた。で、彼は時々妙な顏をして友達を見詰めて居たに違ひない。

彼女は男のために自ら一種の服裝を案出して遣つた。彼はそれを死ぬ迄着て居た。顎の下まで釦のある、乍併流行仕立の長い黑の上衣を着て、鍔の廣い氈帽——夏は麥藁帽——を被り、緩く結んで垂した白の襟飾を着け、肩の上に髮の毛を垂して、銀の握りの着いた杖を弓突いた姿は、隨分變つた優美なもので有つた。彼の髮は濃い褐色で、近頃少し灰色に成り始めた。鬚は綺麗に剃つて居た。彼は若い時分美男子で有つたと云ふことだ。が、私の眼には今の老齡に於ても隨分目に附く男のやうに思はれた。それに五十三歲では未だ老齡とも云へない。が、彼は志士としての特殊な立場から、若く見えようとは努めなかつた。寧ろ自分の歲の堅實を矜りとして居た。で、前に擧げたやうな服裝をして、丈高く瘠せて髮を垂して居る容子は、殆ど敎會の司敎のやうにも、或は又千八百三十年頃

に出版されたキュコルニツクの詩集の扉に出て居る彼の肖像に似てるやうにも思はれた。此の相似は彼が夏期庭園の中の丁香花の茂みの下の倚架に腰掛けて、兩手を洋杖の頭に載せながら、傍に書物を開いたまゝ、日沒に對して詩的な瞑想に耽つて居る時に、一層著しく見えた。只書物に關しては、彼は近年寧ろ讀書を避けるやうに成つたらしい。が、それはほんの近頃のことだ。ヴルヴーラ・ペトローヴナが山の樣に取寄せる新聞や雜誌を、彼は絶えず讀んで居た。彼は又露西亞文學の發展に決して興味を失はなかつた——尤も其中の作家どもに對しては、常に威嚴のある態度を持して居たけれども。彼は一時我邦及び外國の政治に沒頭したことも有つたが、間もなく絶望の身振で其計畫を拋つた。時として彼は手に難解な科學の書を持ちながら、衣嚢にボル・ド・コツク(佛蘭西の通俗小說)を入れて庭園に出ることも有つた。が、こんな事は詰らないことだ。

序ながら、私はキュコルニツクの肖像に就いて一言して置きたい。此肖像は最初ヴルヴーラ・ペトローヴナが莫斯科の高等女學校に於ける寄宿舍に居た時、彼女の手に入つた。彼女は總ての女學生が教師、特に圖畫や習字の先生を始めとして、其他何でも手當り次第に出會ふものと戀に落ちるやうに、直に其肖像と戀に落ちた。が、此處で面白いのは、そんな女學生の特徵ではない、ヴルヴーラ・ペトローヴナが五十歲に成つても、未だ彼女の一番大切にして居る所有物の中に其肖像畫を保存して居たと云ふ事實で有る。で、恐らく彼女がステパーン・トラフィモーギーチに此肖像畫の詩人に似たやうな服裝を拵へて遣つたのも、恐らく其爲で有つたかも知れない。が、勿論これも亦詰らないことだ。

彼がヴルヴーラ・ペトローヴナの許へ來てから最初の一年間は、いや、最つと正確に言へば、最初の半年間は、ステパーン・トラフィモーギーチもなほ書物を著さうといふ計畫を立てよ、毎日眞面目に其準備をして居た。が、後に成つては、そんな果しのない計畫の中に自ら欺き自ら慰めることさへ忘れて仕舞つたらしい。彼は屢々私に向つて言ひ〳〵した。

『僕は自分で遣れば出來たと思ふ。材料も其處に有る。が、如何したのやら私には出來ない。何にも出來ない。單純に何にも出來ない！』

かう言つて、彼はさもがツかりした樣に頭を垂れるのだ。疑ひなく、これは吾々の眼に科學と藝術とに對する殉教者としての彼の威嚴を增さうとして計畫されたのだ。が、彼自身としてはなほ他に何物かを求めて居たらしい。『彼奴等は皆僕を忘れて仕舞つた。僕は最う何人にも用のない人間なのだ！』と云ふやうな愚痴が時々彼の口から漏れた。こんな佗しい心持は、歲を取るに從つて、だん〳〵强くも成れば、度數も殖えて、五十代の末には牢として拔けない一種の性癖とも成つた。ヴラヴーラ・ペトローヴナも終にそれを拋つて置けないやうに思ひ出した。それに彼女は彼女の友が他人から忘られて無用の人間に成つたなどと云ふ考へには堪へられないのだ。で、彼の心を紛らし、同時に彼の名聲を新にするために、彼女は彼を莫斯科へ連れて行つた。彼女は其處に多くの科學と藝術との世界に時めく知己を有つて居た。が、莫斯科では未だ十分でないやうに思はれた。

當時は特に騷がしい時代で有つた。何か新しいものが、過去の沈滯とは全く似ても似附かぬものが世界に現はれ掛けた。改革の氣は到る處に充ちて、スクヴォーレジュニキですら感じられた。いろんな風聞が吾々の所へも傳はつた。一般に事實は未だ少許しか現はれなかつたが、思想は到る處にびゆう〳〵と鳴り廻つた。それが又素張しい數だから堪らない。眞個頭がこんぐらかつて、一々其主意を噛み分けて居る暇はなかつた。が、ヴルヴーラ・ペトローヴナは彼女の女性的な性格から、飽迄其の眞髓に徹しようとする慾望に驅られて、有らゆる新聞や雜誌を貪り讀ん

だ。本國で禁止されたために外國で印刷された刊行物や、恰度其時分世に出始めた革命の檄文のやうなもの迄求食つて讀んだ——彼女はそんな物を皆手に入れることが出來たのだ。が、そんな事をしても、只益々彼女の頭を混亂させるだけに止まつた。で、今度は方々へ手紙を書き始めた。返事は僅かしか來なかつた。それが又時の經つに伴れてだん〳〵解らなく成つた。彼女は又ステパーン・トラフィモーギーチに向つて、只今此處で『それ等の思想』を說明せよと迫つた。が、此人の說明位ぢや却々滿足されなかつた。

此の一般的革新運動に關するステパーン・トラフィモーギーチの意見といふのが、又極めて散漫なもので有つた。彼の眼には、何事も只自分が忘られた、用のない人間に成つたと云ふ一事に歸着した。が、終ひには彼の名も出るやうに成つた。最初は外國で發刊される雜誌に流謫された殉敎者のそれとして、其後間もなく彼得斯堡の雜誌に以前有名な星座に屬した一明星として、其名を掲げられた。如何いふ理由でか、ラディシュチエフと比較してさへ有つた。それから又、或雜誌では彼が死んだと云ふ報告をして、何れそれに就いて追悼の意味の一論文を掲げようと豫約した。ステパーン・トラフィモーギーチは忽ち意氣揚々として、素晴しく尨大な態度を取出した。同時代の人間に對する侮辱の念は俄に消え失せて、自分も其運動に參加して、一つ自己の力量を見せて遣らうと云ふ夢想を懷くやうに成つた。有らゆる物を信ずるヴルヴーラ・ペトローヴナの信仰は直に復活して、彼女は烈しい渦卷の中に投げ込まれた。一瞬の猶豫もなく彼得斯堡へ行つて、卽座に有らゆる物を發見し、身自ら有らゆる物の中へ這入つて、出來得べくんば、全身全我を擧げて新しい運動に投じようと決心した。いろんな計畫の中に、彼女は是非一つ自分の雜誌を出して、今後は一生をそれに捧ける心算だと公言した。で、斯う云ふ成行を見たステパーン・トラフィモーギーチはいよ〳〵大風に成つて、旅行中もヴルヴーラ・ペトローヴナに對して、殆ど自分が目を懸けて遣つて居るやうな態度を取つた。それを又彼女の方では心に留んで永く忘れなかつた。が、彼女には別に此旅行に依つて貴族社會との關係を再び新にしようと云ふ重要な希望が有つた。で、先づ力の及ぶ限り彼女の存在を社會に認めさせようとして居る一人息子に會ひに行くために有つた。

六

二人は彼得斯堡（ペテルスブルグ）で冬の全季節（ぜんシイズン）を費（つひや）した。が、氣の毒なことには、何も彼ら石鹼の泡の虹の樣に消えて仕舞つた。彼等の夢は散らされ、混亂は一掃される處か、いよ〳〵以てこんぐらかつて判らなく成つた。第一に貴族社會との關係は旨く着かなかつた。或は僅に型ばかりの關係が、それも隨分切ない努力の下に、漸と着いたばかりだ。で、それに氣を苛つた結果、ヴルヴーラ・ペトローヴナは全身全我を擧げて『新しい思想』に投じようとして、先づ夜の接待を始めた。彼女は文學者を招待したが、彼等は山の樣に成つて遣つて來た。後には招待もされないのに自分から遣つて來て、それが皆伴侶を引張つて來た。彼女は曾てこんな文學者を見たことがなかつた。彼等は皆信じられない程傲慢で、而も其傲慢が明ッ放しで、それを見せびらかすことを義務と心得て居るやうに見えた。彼等の或者は——皆が皆といふ譯ではないが——醉拂つてさへ遣つて來た。而もそれに一種の價値を、近頃に成つて始めて發見せられた價値を認めて居るらしいのだ。彼等は皆奇態に何物かに就いて得意げで有つた。皆が皆、最近最も重大な秘密を發見したと云ふやうな顏をして居た。彼等は互に他を寫つて、それに依つて自ら偉なりとした。彼等が實際何を書いたかと云ふことは、一寸發見するに困難で有つた。が、彼等の中には批評家も、小說家も、戲曲家も、

諷刺家も、乃至漫罵家も有つた。ステパーン・トラフィモーヰチは彼等の中でも此運動を指導して居る最高の圈內へ這入つて行つた。其仲間へ入るには、そりや信じられない位高い階段を登つて行かなければ成らなかつた。が、彼等は懇ろに彼を待遇した——勿論、彼等の中の一人と雖、彼に就いて聞いたこともなければ、又何んな人間だと云ふことも知らないのだけれども。此仲間に於ける彼の操縱は極めて成功したもので、彼等の藝術的尊貴にも拘らず、二度迄ヴルヴーラ・ペトローヴナの客間へ連れて來ることが出來た。斯ういふ人達に成ると、流石に眞面目で、愼默で、擧止も嫻やかなもので有つた。其他の連中は明かに彼等を怖れて居た。が、彼等は殆ど割く時間といふものを有つて居なかつたらしい。兎に角、最初の間はステパーン・トラフィモーヰチも成功した。人々は彼を捕まへて、公の文學會へ引張出さうとした。彼は始めて或朗讀會で演壇に立つた。聽衆は殆ど五分間も續いたかと思はれるやうな、熱心な拍手を以て彼を迎へた。彼は九年後にも涙を流して其時の事を想ひ起した。勿論それは感謝の念からと云ふよりも、彼が天性の藝術的敏感に基くものでは有らう。『僕は誓ふ、堵でもする』と、彼は私に向つて——只私だけに向つて、而も祕密に——斷言した。『あの時の聽衆の一人と雖も僕に就いては何にも知らないのだ。』これは又思ひ切つた告白で有る。彼が演壇の上に在つてすら、又あの樣な昂奮した狀態に有りながら、そんなに迄明瞭に自分の地位を理解することが出來たと云ふのは、彼も亦鋭い知力を具へた人に違ひない。彼は二三團體の抗議書——何の抗議だか彼は知らないのだが——に署名することを賴まれた。彼は署名した。ヴルヴーラ・ペトローヴナも或『凌辱事件』に抗議する仲間へ入れられた。彼女も亦署名した。それにも拘らず、是等の新しい人達の多數は、如何いふ理由でか、侮蔑の眼もて、又は露骨な反語で以て彼女に對しなければ成らぬやうに心得て居た。ステパーン・トラフィモーヰチは其後或苦い瞬間に於て、彼女が彼に對して嫉妬心を抱くやうに成つたのは其時からだと私に仄めかした。勿論、彼女も自分が是等の人々とは旨く行かないことを知つて居た。而も彼女は熱心に女性のヒステリイ的な命懸けで彼等に迎接した。甚しいのは、なほ彼等から或物を期待してさへ居た。會合の席では、彼女は多く饒舌らなかつた。それよりも多く人の話に耳を傾けた。彼等は檢閱官の廢止に就いて語つた。聲音學的綴り方に就いて、羅甸文字の代用と露西亞文字の廢止に就いて、一昨日流罪に處せられた何人かに就いて、自由聯盟で結び着けられた幾つかの小國に露西亞を分割することの利益に就いて、陸海軍の廢止に就いて、ドニイペル河まで波蘭の復讐に就いて、百姓の改革に就いて、檄文に就いて、家族に就いて、子供に就いて、僧侶に就いて、女權に就いて、クレヴスキイ家の事情——それに就いては、何人もクレヴスキイ氏を宥し難いやうに言つて居た——に就いて、其他いろ〳〵な事に就いて語つた。これ等の新しい暴民の中には、隨分如何はしい連中も有つたが、又幾多の正直な敬愛するに足る人物も有つた。尤も、それ等の人々と雖、或種の驚くべき性癖を有つて居るには居た。左樣いふ正直な人達の方が不正直な連中よりも、一層了解するに困難で有つた。で、ヴルヴーラ・ペトローヴナが雜誌を創刊すると云ふ噂が傳はると、文學者連は一層多數に押懸けて來た。而も面と向つて彼女が資本家で有ること、並びに勞力の私用者で有ることを非難するのだ。彼等の非難の唐突なことは、殆ど其亂暴なことに劣らなかつた。故スタフローギン中將の友人で同僚なる老將官イヴーン・イヴーノヰーチ・ドロズドフは尊敬すべき人では有るが、非常に頑固で慣りツぽい人物として、又大喰ひで、無政府主義を死ぬ程恐れて居る人物として、此町迄知られて居るが、此人がヴルヴーラ・ペトローヴナの饗應の席上で或立派な青年と衝突した。青年は最初の言葉から『左樣いふ事を言ふやうぢや、成程貴方も將官ですね』と、さも將官と云ふ言葉程侮蔑の意を籠めた言葉はないやうに叫んだ。

イヴーン・イヴーノヰーチは怖ろしく慣つて仕舞つた。『成程俺は將官ぢや、而も中將ぢや、皇帝に仕へた身ぢや。それに貴公は何ぢや、異端の犬ぢやないか。』

・それから怖ろしい修羅場が續いた。次の日、其出來事が新聞に出て、ヴルヴーラ・ペトローヴナが卽座に其將官を敲き出さなかつたと云ふので、其不名譽な行動に對する連名の抗議を提出しようとした。或繪入新聞では、ヴルヴーラ・ペトローヴナとステパーン・トラフィモーヰーチと將官ドロズドフとを三人の反動的徒黨と見做して、惡意を含んだ戲畫を揭載した。又或有名な、特に其當時にあつては有名な詩人の手に成つた狂詩も載せられた。私一個としては、此將官なぞといふ階級の人々が、稍もすれば『俺は皇帝に仕へた身ぢや』なぞと、吾々平民とは違つた一種特別の皇帝でも有つて居るやうに言ふのは惡い癖だと云ふことを一言注意して置きたい。

處で又ステパーン・トラフィモーヰーチも大失敗を演じて、いよ〳〵二人とも永く彼得斯堡には居られないことに成つた。彼は藝術の權威に就いて語ることを禁じ得なかつた。彼等は時の經つに伴れて、だん〳〵高聲に彼を嘲笑し出した。最後の演說で、彼は彼等の心を動かして、彼の所謂『迫害』に對する敬意を博さうと云ふ下心で、志士的雄辯を以て、彼等に深い印象を與へようと試みた。彼は『祖國』なる言葉の無用と不合理とを說くのに反對しようとはしなかつた。又宗教の有毒な影響をも認めた。が、斷乎としてプーシキンが一對の長靴よりも人生に取つて必要で有ることを主張した。可哀相に、彼は演壇に立つたまゝ泣出した程、殘酷に叱聲を放たれた。ヴルヴーラ・ペトローヴナが彼を自宅へ伴れて來た時は、殆ど死んだものゝ樣に成つて居た。そして、『On m'a traité comme un vieux bonnet de coton.（彼奴等は俺を偏狹な俗物のやうに取扱ひ居つた）と、譫言の樣に口走つた。彼女は月桂水を男に含ませながら、夜明まで、『貴方は未だ捨てられはしない、未だ一度は花を咲かせる時代が有りますよ、未だ貴方の價値を認められる時が來ますよ——少くとも他所ではね』と繰返しながら、一晩中附き切りで看護をして居た。

次の朝早く五人の文學者がヴルヴーラ・ペトローヴナを訪問した。其中の三人は全く知らない男で、彼女は是迄一度も見たことさへないのだ。彼等は嚴めしい態度で、自分達は彼女の雜誌の計畫を好く考究して見た結果、それに對する權利を委ねた覺えはないのだ。が、彼等の決議は、雜誌を創刊したら、彼女は直にそれを協同組合の事業として、繼續資金と共に自分達に引渡すべしと云ふに有つた。彼女自身は時代後れのステパーン・トラフィモーヰーチを屹度帶同して、スクヴォーレジュニキに歸るが可い。で、懶惰の心よりして、彼等は彼女に於て所有權を認めることにした。そして、每年純益の六分を送つて遣らうと云ふのだ。此事に就いて、最も感動すべきは、彼等五人の中の四人までが確に金錢上の動機から働いて居るのではない、單に主義のために働かうとして居る點で有つた。

『僕等は眞個途方に暮れて遁出した』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは其後言ひ〳〵した。僕は何が何やら薩張判らなかつた。そして、今でも記憶えて居るが、莫斯科迄の途すがら、車輪の音に和して、絕えず堪らない堪らない〳〵〳〵』と言ひ續けて來た。莫斯科へ着いて、漸つとわれに歸ることが出來た——實際、『僕等も其處ぢや何か違つた事に出會すやうに思つてとが有つた。『君が永い間神聖なものとして懷抱して來た大思想がだね、一朝馬鹿者どもの手に懸つて、街の眞中に引摺り出され、玩弄物にされたとしたら、如何思ふね、何んな氣がすると思ふかね！いや！僕等の時代には左樣ぢやなかつた。』僕等は最と高尙なものゝために努力したのだ。今の者はそんな事など些とも知らない。併し僕等の時代は再び遣つて來るよ、そして、人間を正しい方へ導いて呉れるよ。若し左樣でないとしたら、此世は如何成るん

だね？』

七

彼等が彼得斯堡から歸ると、間もなくヴルヴーラ・ペトローヴナは『補充』のために友達を外國へ遣らうとした。又、實際二人のためにも少時別れて居る必要が有ると、彼女は感じた。ステパーン・トラフィモーギチも外國へ行くのを喜んで居た。

『私も今度は復活するよ』と、彼は叫んだ。『今度こそ著作に着手しますよ。』が、伯林から來た最初の手紙には、最う毎もの癖が出て居た。『私の勇氣は摧けた』と、彼はヴルヴーラ・ペトローヴナに書いて送つた。『私は何一つ忘れることが出來ない！此伯林では、何も彼も再び私に戻つて來た——私の過去が、最初の法悦も、最初の苦痛も——あゝ、彼女は何處に居るか。彼等二人は何處に居るか、二人の天使は何處に居るか。私は決して彼等に値しなかつた。あゝ、我子は何處に居るか、我が一人子よ。最後に私は何處に居るか、鐵のやうに强く、巖のやうに硬かつた過去の私は何處に居るか。今ぢや正直正銘の道化者たる鬚のアンドレーエフですら、peut briser mon existence en deux (私の存在を二つに引裂くことが出來るのだ)』——云々。

ステパーン・トラフィモーギチの息子と云へば、彼は一生の間に二度しか其子を見なかつた。最初は其子が生れた時に、二度目は最近彼得斯堡で——青年は其處で大學へ這入る準備をして居た。此子は前にも言つたやうに、スクヴォーレジュニキから殆ど六百哩も離れた遠い田舍で、叔母の手に育てられた——ヴルヴーラ・ペトローヴナの費用で。アンドレーエフと云ふのは、只此邊の小商人と云ふに過ぎなかつた。が、人物は非常な變り者で、獨學自修の古物學者、露西亞の古器物の聚集に特殊の趣味を有つて、時としては博學と進歩した學說とに於てステパーン・トラフィモーギチを凌がうとしたことも有つた。長い灰色の髮を生やして、銀緣の眼鏡を掛けた、此の偉さうな小商人は、ステパーン・トラフィモーギチに、スクヴォーレジュニキに近い後者の小さな所有地から購つた數町歩の立木に對する四百留布の金子を借りて居た。ヴルヴーラ・ペトローヴナは彼を伯林へ遣つた時、隨分豐富に金子を渡して置いたのだが、ステパーン・トラフィモーギチはなほ出立の前に、恐らくは彼自身の祕密の用途として、特に其の四百留布を受取る積りで居た。で、アンドレーエフが一箇月の間其仕拂ひを延ばして貰ひたいと言つて來た時は、殆ど泣き出し相に見えた。又アンドレーエフの方から言へば、當時ステパーン・トラフィモーギチの特別な入用に應ずるため、先拂ひとして、六箇月も前に第一の拂ひ込みがして有るから、此位な事は言出す權利が有つたのだ。

ヴルヴーラ・ペトローヴナは最初の此手紙を飛び附くやうにして讀んだ。そして、『彼等二人は何處に居るか』といふ絶叫の下に橫線を引いて、番號を附けて、抽斗の中へ仕舞ひ込んだ。彼は言ふ迄もなく二人の死んだ細君のことを言つて居るのだ。彼女が伯林から受取つた第二の手紙は又調子が變つて居た。

『私は二十四時間の中の十二時間も働いて居る。』——『十一時間で可からう』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは吃いた——『私は諸所の圖書館を搜索して、對校したり、謄寫したり、無暗に駈け廻つて居る。私は又諸教授連をも訪した。あの愉快なヴンダソフの一家とも舊交を暖めた。ナデージュダ・ニコラーエヴナは相變らず愛嬌の好、よ。彼女は貴方に宜しく申して呉れと言ひました。彼女の若い所天と三人の姪とは皆伯林に居ます。い人々と共に夜明までも起きて話を續けて居る。謂はど、雅典人のやうな夜を過すのだ。雅典人と

等の微妙な知力と趣味性とを指すに過ぎない。此處には何も彼も高尙である。幾多の音樂も有れも、全人類復活の夢も、永遠の美の理想も有る。私は常にシクスタス法王の聖母に就いて、光と闇とて考へて居る。が、太陽の上にも斑點が有るのでな。あゝ、わが友よ、我が高尙な、忠實な友よ、心の常に貴方と一緒に居る、貴方のもので有る！』斯くて手紙は終るのだ。

『何が何だか判りやアしない！』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは又其手紙を揉みながら呟いた。『夜明までず て雅典人のやうな夜を送つて居るとすりや、一日に十二時間も書見の出來る筈がない。あの人は此手紙を書く時に醉拂つてゞも居たのか。なに、あのヅンダソフの女が私に宜しく申して呉れだつて！が、まア一人で愧しませて置くが可い。』

八

が、彼は永く愧しんで居る譯に行かなかつた。四箇月も經たない間に、彼はスクヴォーレジュニキへ飛んで歸らうとして居た。最後の手紙は故國の友に對する感傷的な愛情の迸出の外に何物もなかつた。そして、實際文字通りに涙に濕つて居た。世には小狗のやうに極端に家を戀しがる人間も有るものだ。二人の友の會見は眞個熱烈なもので有つた。二日の後には、萬事が前々通りに成つた。前よりは一層無趣味にさへ成つた。『僕はね』と、二週間後ステパーン・トラフィモーヰチが内密で私の耳に囁いた。『今度僕に取つて怖ろしいことを發見したんだよ……新しいことでも有るんだがね。僕は普通の食客なんだよ、et rien de plus! mais n'rien de plus! (それッ限りなんだよ。だが、それッ限りで、何でもないんだよ。)』

此後停滯の時期が八年間も續いた。私の肩に捕まつてヒステリイ的に嗚咽する癖は、絕えず間を置いては再發したが、それが爲に些少なりと雖も吾々の繁榮を阻害されるやうなことはなかつた。其間にステパーン・トラフィモーヰチの肥大らなかつたのが不思議な位のものだ。彼の鼻は少許赤く成つた。又彼の態度も何處か重々しく成つた。それだけで有る。彼の周圍には、決して大きなものではないが、だん〳〵友人の一團が造られた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは此一團と何の關係もないのだけれども、而も吾々は彼女を目するに吾々の保護者を以てした。彼女は彼得斯堡で受けた教訓の後、永く吾々の町に落着いた。冬は町の邸に住つて、夏は近隣の所領にある館で送つた。此期間に於ける最後の七年間ほど、彼女が吾々田舍の交際社會に重きを成して、多大の名譽を享受したことは有るまい。今の知事が赴任して來てからは、左樣も行かなく成つた。が、前の知事は名をイヴーン・オーシッポヰーチと稱んで、何時迄も吾々仲間に忘れられないやうな、優しい、好い知事公で有つたが、それがヴルヴーラ・ペトローヴナの近い親戚に當つて、一時は大分彼女の世話にも成つたものらしい。知事の奥樣は彼女の機嫌を損じたと考へるだけでも顫え上つた。同時に、田舍の交際社會が彼女に拂つた尊敬の念は殆ど崇拜と云つても可いやうな點にまで達した。從つて又ステパーン・トラフィモーヰチも好い日に出逢つた。彼は倶樂部の會員として、しこたま骨牌で損をした。そして、到る處敬意を以て遇せられた。後にヴルヴーラ・ペトローヴナが別の家に住ふことを彼に許してから、吾々は前よりも一層多くの自由を享樂した。一週に二度吾々は彼の家に集つて愉快な夜を過した。彼は又惜氣もなく三鞭を振舞つた。酒は例のアンドレーエフの店から取寄せられた。一年に二度勘定書がヴルヴーラ・ペトローヴナの手で仕拂はれた。それが仕拂はれる日には、ステパーン・トラフィモーヰチは殆どお極りの樣に彼の所謂『夏の虎刻剌』に罹つたものだ。

吾々の一團の中でも、最も舊い會員の一人はリープチィンと云つて、此町中に無神論者として名を知られた中年の小役人で有つた。彼は二度目に持參金附きの若い小綺麗な細君と結婚したが、其他に三人も盛りの娘が有つた。彼は此一家を極めて嚴格に抑へて居た。彼は又極端な吝嗇家で、俸給の中から小さな家も購へば、又一つの財産を貯蓄した。始終不平の多い男で役目も碌らなかつた。町でも餘り重きを置かれず、上流の社會へは容れられなかつた。加之、彼は他人の噂や惡口を大ッ平に觸れ廻る男として、何人にも可厭がられて居た。が、吾々は又彼の機才を愛した。獨特な諷刺的毒舌を愛した。ヴルヴーラ・ペトローヴナも餘り此男を喜んでは居なかつたが、男の方で旨く彼女に調子を合せて居た。

最一人シャトーフといふ男が有つた。近年に成つて、漸つと吾々の仲間へ這入つた男で、これも餘りヴルヴーラ・ペトローヴナには好かれて居なかつた。此男は元學生で、何か騷動を起して大學を放逐されたのださうな。子供の時はステパーン・トラフィモーギーチに習つたもので、ヴルヴーラ・ペトローヴナの奴隷、元の側使ひの息子として生れて來た。從つて彼女には隨分恩を受けたものだ。彼女は彼の傲慢と忘恩とを嫌つて居た。特に彼が大學を逐はれてから眞直に彼女の許へ歸つて來なかつたと云ふので、迚も宥し難いもゝ樣に憤つて居た。それだのに、彼は當時彼女が急使で出した手紙にも返辭をしなかつた。そして、或金持の商人の家庭敎師と云ふよりは、寧ろ保姆のやうな地位で子供の面倒を見ながら、一緒に海外へ旅行した。尤も子供には別に保姆が有つた。若い活潑な露西亞の女で、一家が出發する前の晩から家庭の一員と成つた。主として給金が廉いから傭はれたのだ。二箇月後商人は此女が自由思想を抱いて居ると云ふので追出した。シャトーフ自身も女の後を逐うて家出したが、間もなくヂェネヴで其女と結婚した。二人は三週間許り同棲した。が、何等の束縛をも認めない自由の民として——尤も、內實は貧乏のためでも有つたらうが——二人は又別れて仕舞つた。其後彼は永い間歐羅巴の各地を遍歷した。如何して生活したかは誰も知らない。或は街の中で靴磨きをしたとも言はれゝば、或は造船所の門番をしたとも言はれる。到頭、一年前に故鄕へ歸つて來て、老年の伯母と一緒に棲んで居たが、其伯母も一箇月前に葬つた。彼の妹のダーシャも亦ヴルヴーラ・ペトローヴナの手に育てられたが、主人の氣に適つて、今は其家庭でも一段手を置いて使はれて居た。彼は滅多に其妹とも會はなかつた。又二人の間柄も餘り好くはないらしい。彼は吾々仲間に有つても始終澁ツ面をして、決してお饒舌漢ではなかつた。が、時々彼の堅い確信に觸れた場合には、急に苛々して、言葉も粗笨に懸擔ひがなく成つた。

『シャトーフと議論をするんなら、先づあの男を縛つて置いてからにするんだね』と、ステパーン・トラフィモーギーチは好く戲談に言ひ〳〵した。が、彼は此男を好いて居た。

シャトーフは外國に居る間、全然以前の社會主義的信仰を一變した。そして、極端に反對の方角へ突進して行つた。彼は露西亞に通有な理想主義者の一人で、一旦壓力の大きな思想に打たれると、其場で時としては永遠に粉碎されて仕舞ふのだ。彼等には斷じてそれに抵抗するだけの力がない。却てそれに熱烈な信仰を繫くのだ。そして、謂はゞ彼等の上に落ちて、半ば彼等を粉碎した重石の下に呻きながら、其後の一生涯を送るのだ。彼の風采は全然非常に濃い垂れ下つた眉毛と、皺の寄つた額と、何か含羞んでゝも居るやうに頑固に下を向いて居る敵意を持つた眼の表情とを有つて居た。彼の髮の毛は始終もぢや〳〵に縺れて、何を着けても滑らかには成らない程突立ちに成つて居た。彼は二十七か八で有つたらしい。

『あの男のお主婦さんが逋出したのも無理はないね』と、或時ヴルヴーラ・ペトローヴナは凝乎と彼を見詰めて居た後で言出した。彼は極貧にも拘らず、衣服だけは清潔したものを着て居ようとした。が、彼は又此處でもヴルヴーラ・ペトローヴナに訴へることを避けて、商賈の爲にいろんな仕事をして遣りながら、出來るだけ自分で遣つて行かうとした。或時は店で働いた、又或時は運送船の傭書記として、將に出帆しようとして居た。が、解纜の時に成つて運惡く病氣に罹つた。彼が何んな貧乏でも意としないで平氣でそれに堪へ得たと云ふことは、殆ど常人の想像に及ばないものが有つた。彼が病氣に罹つてから、ヴルヴーラ・ペトローヴナは匿名で、祕密に百留布の金子を送つて遣つた。が、彼は其祕密を發見した。一考した後、彼は其金子を持つてヴルヴーラ・ペトローヴナの許へお禮に遣つて來た。彼女は熱心に彼を歡待した。が、此場合にも、彼は彼女の期待を裏切つた。彼はほんやり床の上を見詰めて、何にも言はずに薄笑ひをしながら、五分間も彼女に對して居た。そして、恰度相手の話がはづんで來た時、不意に立上つて、一つ不態なお叩頭をしながら、周章して振向く途端に、彼女の立派な彫刻をした裁縫臺を床の上へ引つ繰反した、何も彼も滅茶々々に碎れた。彼自身も如何して出て來たか知らなかつた。其後リープティンは彼が百留布の金子を貰つた上に、前の壓制な主人の許へお禮に行つたと云ふので、痛く彼を非難した。彼は一人町外れに住んで、誰も會ひに行くことを好ばなかつた。が、ステパーン・トラフィモーヰチの會へは相變らず遣つて來て、新聞や本を借りて讀み〳〵した。

此處に又最一人始終遣つて來る男が有つた。其名をヴィルギンスキイと云つて、此町の役所に勤めて居る書記で有つたが、何處かシャトーフと共通なものを有つて居た。尤も表面だけは何の點を較べて見ても相反して居た。彼は又『所帶持ち』で有つた。三十位の極めて穩やかな男で、主として獨學自修したものとは云へ多大の學識をも具へて居た。彼も亦金持ではなかつた。加之、細君が有つて、其上伯母と細君の妹まで養つて行かねば成らなかつた。彼の細君を始め一家の女達は、隨分生硬なものでは有つたが、兎に角最も新しい主義を抱いて居た。嘗てステパーン・トラフィモーヰチも言つたやうに、『思想が街の眞中へ引摺り出された』場合には、每でも左樣成るのだ。彼等は解らない癖に好く書物を讀んだ。そして、彼得斯堡の新しい片隅から命令一下すれば、直樣何んな物でも船緣の外へ投げ棄てるだけの意氣込みを抱いて居た。ヴィルギンスキイ夫人は此町で產婆をして居た。以前彼得斯堡で永い間看護婦をして居たことが有るのだ。ヴィルギンスキイ自身は稀れなる心の美しい人で、私は一生の間此人程正直で熱烈な人間を見たことがない。

『僕は決して、決して光明ある希望を捨てない積りだ』と、彼は好く眼を輝かしながら私に言つたものだ。此の『光明ある希望』を口にする時、何か幸福な祕密でも語るやうに低聲で言ひ〳〵した。彼は何方かと言へば身丈の高い、思ひ切つて瘠せた、肩巾の狹い、赤茶けた薄い髮の毛の男で有つた。ステパーン・トラフィモーヰチが上から見卸すやうに彼の意見を冷笑しても、彼は溫和しく聽いて居た。時には眞面目に答へもした、それに依つて相手を狼狽させもした。ステパーン・トラフィモーヰチは極めて親切に彼を遇して居た。實際、彼は吾々の總てに對して阿父さんの樣に振舞つて居た。

『君等は皆半分孵化りかけた雛鳥のやうなものだね』と、彼はヴィルギンスキイに向つて戲談を言つた。『尤も君には僕が彼得斯堡の講習科生の仲間で見たやうな、偏狹な所はないやうだがね。シャトーフはあれで戲化るには何物をも犧牲にする男だよ、未だ卵の殼が尻ッ邊にくッ着いては居るがね。』

『僕は如何です』と、リープティンが訊いた。

『君か、君は只何處でも旨く調子を合せて行く俗物に過ぎないんだよ……尤も君一流の遣方でだがね。』

リープティンは慣つて仕舞つた。

彼の細君に就いて斯う云ふ話が有つた。而もそれが不幸にも眞實らしかつた。と云ふのは、細君が彼と結婚してから一年も經たない間に、或日彼に向つて、私は向後貴方を止めてレビャードキンさんに乘換へたと宣言したと云ふ話なのだ。此のレビャードキンと云ふ男は他所から此町へ流れて來たもので、最初は退職大尉だなぞと言つて居たが、眞赤な嘘で、後に成る程何うも素性の怪しい男だと云ふことが判つて來た。彼は只髭を捻つて、酒を飲んで、お話にも成らないやうな馬鹿話を饒舌るより外に能のない男で有つた。全然遠慮といふことを知らない男だから、忽ちヴィルギンスキイの家に腰を据ゑて、他人の費用で生活した。其處で喰つて、寐て、終ひには其家の主人公をも下目に見るやうに成つた。ヴィルギンスキイの細君が牛を馬に乘換へたと宣言した時、主人公は細君にかう答へたといふ噂も有つた。

『奥さん、私は今日迄只貴方を愛して來た。が、今日からは貴方を尊敬しませう』と。併し私は此の昔の羅馬人にでも有りさうな諦めの言葉が實際主人公の口から發せられたか如何かを疑ふ者である。それに反して、或者は又彼が其際大いに泣いたと傳へた。兎に角、彼が其地位を廢められてから二週間後に、一家の者は打揃うて郊外の森へ遊山に出掛けた。友達も大分招待されて行つた。ヴィルギンスキイは何やら昂奮してるやうに上機嫌で、舞踏の仲間入りさへした。が、不意に、前喧嘩も何にもなく、突然大男のレビャードキンの頭髪の毛を兩手に摑んで、後者が好い心持で踊つて居るのを押倒して、泣き饒舌りながら引摺り廻した。大男は只最う飽氣に取られて手出しもしなければ、地面を引摺られながら聲さへ出し得なかつた。が、後に成つては、紳士の體面を傷つけられたものとして、大いに憤つた。ヴィルギンスキイも其夜は一晩中細君の前に膝を屈して宥恕を乞うた。が、其宥恕は、彼がレビャードキンに謝罪することを拒んだために出なかつた。加之、彼の思想の野卑で愚劣なことを世間から非難された。後の非難は彼が細君との會見に於て膝を屈したと云ふ事實に基くものらしい。大尉は間もなく此町から消えて、最近妹を伴れて、全く別の目的で遣つて來たまでは、再び顔を見せなかつた。が、彼の話は後にして置かう。斯ういふ譯だから、此の憐れな若い所天が吾々の仲間へ來て、其處に慰安を求めて居るのも無理はない。が、彼は決して家庭の生活に就いては吾々に話さなかつた。只一度ステパーン・トラフィモーギーチの許から私と一緒に歸りながら、彼の地位に關して極めて遠廻しの暗示を與へたが、直に又私の腕を摑んで熱心に言譯をした。

『ですが、そりやァ何でもないのですよ。ほんの私の事情ですからね。決して公の主義には支障がないのですよ。ええ、決して有りませんとも。』

吾々の仲間には時々飛入の客も有つた。例へばリャムジンといふ猶太人だの、カルツソフといふ退職士官だのが遣つて來た。一人好く物を訊きたがるお爺さんが來よつたが、其人は死んだ。リープティンが嘗てスロンテフスキイといふ追放された波蘭の僧侶を伴れて來たことが有つた。一時は吾々も主義の上から其男を歡待したが、後には止めて仕舞つた。

九

或時町に吾々の一團が虚無主義と色魔と無神論者との温床であると云ふやうな噂が立つた。そして、其風聞がだん〳〵勢を得た。而も吾々の仲間は只罪のない、愉快な、標本的に露西亞人らしい、氣輕な、放縱なお饒舌に耽つ

たばかりなのだ。一つも定まつた目的のない、所謂『高等自由主義』なるものは、只わが露西亜に於てのみ衆え得るので有る。

ステパーン・トラフィモーギーチは總ての機才ある人と同じく聽手を必要とした。其上に彼は主義の宣傳てふ高尚な義務を充しつゝ有ると云ふ意識を必要とした。最後に彼は又一緒に三鞭を飲んで、酒の上で露西亜や、『露西亜魂』や、一般の神や、特に『露西亜の神』やに就いて、或種の氣輕な意見を交換して、誰でも知り又誰でも繰返した、同じ露西亜の馬鹿話を何百遍となく繰返す相手を必要とした。吾々は又町の下らない風聞も嫌ひぢやなかつた。實際それから出發して、極めて嚴肅な高い倫理的結論に到達したことも罕れではなかつた。が、主として、吾々は一般人道に就いて論ずるを常とした。吾々は歐羅巴並びに人類の將來に關して嚴格な思索を費した。又、佛蘭西が皇帝政治の後直に第二流強國の地位に落つべきを豫言して、其事が怖ろしく容易に且迅速に起るべきを堅く信じて居た。吾々は又永い以前から羅馬法王が伊太利に於ける單なる大僧正の役を演ずべきを豫言して、かくして千年の問題も工業と鐵道と凡俗化との吾等の時代に在つては一小問題に過ぎないことを確信して居た。ステパーン・トラフィモーギーチは、稍抽象的に過ぎる嫌ひは有つたが、時々美術に就いても話をした。彼は又好く青年時代の友達のことを話した、それが皆露西亜の進歩に貢獻した偉い名前ばかりで有つた。彼は其人達の話をするに一種の感情と尊敬とを以てした——時に嫉妬の情も交つたけれども。吾々が退屈した時には、猶太人のリャムジン——郵便局の書記で、驚くべき洋琴の上手——が、吾々のために洋琴を彈いて呉れた。そして、其合間に豚だの、雷鳴だの、赤ン坊が生れる時の啼聲だの、其外いろんな物の眞似をした。實際、彼が招待されたのは只これが爲で有つた。で、若し吾々が大いに飲んだ時は——そんな事も時々有つた、度々ぢやないけれども——隨分陽氣に成つて、或時の如きはリャムジンの伴奏でマルセーユの歌を合唱したものだ。尤も、それが本當にマルセーユの歌で有つたか如何かは、私も知らない。彼の記念すべき二月十九日、吾々は勿論熱心に其日を歡迎した。いや、最うずつと前から其日を祝して祝盃を擧げて居た。が、これはシャトーフやヴィルギンスキイが仲間へ加はつた以前の話で、未だステパーン・トラフィモーギーチがヴルヴーラ・ペトローヴナと同じ家に棲んで居る時分のことで有つた。其日の前暫くの間、ステパーン・トラフィモーギーチは當時何人にも知られた詩の句を口の中で呟く癖が着いた。

百姓が斧を研ぐ、斧を研ぐ、

何事が始まるぞ、怖ろしや、怖ろしや。

能くは記憶えないが、こんな樣な文句が有つたらしい。或時ブルヴーラ・ペトローヴナがそれを洩れ聞いた。そして、『馬鹿なことを、馬鹿なことを！』と叫びながら、ぷん〳〵憤つて室を出て行つた。恰度リープティンが其場に居合せたが、意地惡くもステパーン・トラフィモーギーチの耳に囁いた。

『ねえ、元の奴隷どもが此日を祝ふために地主の Messieurs（旦那方）に對して、本當に何か惡い事でも仕出來したら氣の毒なものでせうね。』斯う言つて、彼は人差し指でぐるりと咽喉の周りに輪を畫いた。

『Cher ami（だがね、君）』と、ステパーン・トラフィモーギーチは言つた。『そんな事をしたつて』と、彼も同じ身振を繰返しながら、『吾々の地主には、いや、地主ばかりでない、一般に吾々の何人にも役に立たないよ。吾々は頭を失くした處で、迚も何にも出來やしないよ——此頭といふ奴が一番吾々の理解力を妨げて居るんだけれどもね。』

當時多くの人の間に、特に所謂識者と稱ばれる人々の間に、奴隷解放の日を期して、リープティンの預言したやうな、何か非常な事が起るだらうと云ふ豫測が行はれて居た。わがステパーン・トラフィモーギーチも確にそんな考

へを抱いて居たらしい。其日の二三日前に、彼がヴルヴーラ・ペトローヴナに向つて外國へ行きたいからと許可を願ひ出たのを見ても、左樣と信ずる外ない。が、其日は無事に濟んだ、其後も數日間何事もなかつた。ステパーン・トラフィモーギーチの脣には再び人を見下すやうな微笑が現れて來た。彼は吾々の前で、一般に露西亞人の性格、特に露西亞の百姓の性格に就いて、注意すべき一場の演說さへした。

『要するに吾々は吾々の百姓に對して餘りに遠てゝ居たのだ』と、彼はいろ〳〵傾聽するに足る考へを述べた後で、其結論として言つた。『吾々は彼等を以て一種の流行とした。一派の文學者は新に何か珍奇な物でも發見したやうに彼等を取扱つた。吾々は虱の簇つた頭の上に桂の花環を置いた。露西亞の村は一千年の間に只一人のカマリンスキイを出したばかりだ。彼は若干かの機才を有つた詩人で有つた。始めて大ラーシェル（佛蘭西の女優）を舞臺の上に見た時、彼は狂喜の餘りかう叫んだ。「われはラーシェルを百姓とは取代へない！」と。私は更に一歩を進めて言ひたい。私は一人のラーシェルの爲には全露西亞の百姓を與へても構はない。今は最つと眞面目に正面から物を視るべき時である。決して吾々の國の松脂の香と bouquet de l'impératrice（皇后の花環、香水の名）とを混同すべき時ではない。』

リーブティンは直に贊成した。が、同時に人は進歩的であるためには、矢張自ら僞つて百姓を稱揚しなければ成らぬ。上流社會の貴婦人ですら、『憐れなアントン』を讀んでは涙を流すでないか。彼等の或者は巴里に居てさへ手紙を執事に寄せて、今後は出來るだけ百姓を人道的に取扱へと言つて來る有樣ではないかと云ふやうな話をした。

恰度アントン・ペトローフの風評が吾々の耳に達した頃、不幸にも、吾々の州の面もスクヴォーレジュニキから は十哩も離れない所に或騷擾が起つた。其結果一隊の兵士が大急ぎで派遣された。今度はステパーン・トラフィモーギーチもすツかり顚倒して、吾々まで吃驚させた。彼は俱樂部で最つと軍隊が必要だ、他の州へ電報を打つて喚び寄せろとまで叫んだ。彼は知事の許へ駈けて行つて、自分は今度の事件に何の關係もない、彼等と舊交の有る故を以て自分の名を連累者の中へ加へて呉れな、直に彼得斯堡の當局者へ自分の抗議を上申して貰ひたいと頼んで來た。幸ひにも、此事件は疾く濟んで、何事もなく終つた。が、私は一時ステパーン・トラフィモーギーチの容子を見て驚いて仕舞つた。

三年後、誰も知る如く、國家主義が人の口の端に上るやうに成つた。そして、『輿論』なるものが始めて現れて來た。ステパーン・トラフィモーギーチは大いに笑つた。

『ねえ、諸君』と、彼は私どもに訓へた。『新聞で言ふやうに、吾々の國家主義が「夜明け」だとしても、そりや未だ學校に居るんだよ、何處か獨逸語の彼得學校にね。獨逸の本を開けて、獨逸の課業を學んで居るんだよ。で、若し必要の場合が來れば、獨逸の先生がそれを床の上に跪づかせるんだね。眞個獨逸の先生は偉いものさ。だが、それッ限りだよ。其他には何にも有りやせんさ。何も彼も元々通り行はれて居るんだよ、卽ち神の思召のまに〳〵だね。僕の考へぢや、露西亞には、Pour notre Zainte Russie（我が神聖な露西亞には、）それで澤山だね。それに此の國家主義だの、スラヴ民族主義だのと云ふ奴は、新しかるべく餘りに老いて居るんだよ。まア君、國家主義なんてえものは、俱樂部に於ける紳士の娛樂としての外には、何處にも存在しないさ。眞個退屈凌ぎなんだよ。露西亞ぢや、何でも此の退屈から生れるさ。善いものでも、惡いものでも、皆左樣だね。僕は三萬年でもこれを繰返して見せるよ。吾々は吾々自身の勞働に依つて生活することを知らないのだからね。で、今何か輿論の夜が明けるなぞと云つて騷いで居るのは、あれは不意に天から降つたのぢやないかね。彼奴等が人間は自分自身の意見を有つ前に、

先づ自ら働かなければ成らぬ、自分自身の仕事を有たなければ成らぬ、物に對する自分自身の知識を有たなければ成らぬ、自分自身の經驗を有たなければ成らぬと云ふことを知らない道理だよ。何しろ無より有は生じないからね。人間働きさへすりや自分自身の意見も出來るさ。然るに吾々は決して働かないから、意見も吾々の代りに是迄働いた人達が作つて呉れるんだよ。卽ち何時でも歐羅巴、何時でも獨逸だね――二百年來吾々の先生なる獨逸だね。加ふるに露西亞は吾々に取つて獨逸の助けも籍らず、辛い仕事もせずに闡明するには、餘りに大きな謎だアね。過去二十年の間、僕は警鐘を鳴らして來た。働け〳〵と叫んで來た、僕は其爲に一生を捧げたものだ。又馬鹿だからそれを信じて來たアね。が、今は最うそんな事は信じなく成つた。只鐘だけは一生鳴らして居るよ。恐らく墓へ這入るまで鳴して居るだらう。僕は僕の鎭魂祭の鐘が鳴るまで、其綱を引張つて居る積りだよ。』

嗚呼！私どもは只同意する外なかつた。私どもは私どもの師を讃嘆した、實際非常な熱心を以て讃嘆したものだ！これを要するに、讀者諸君よ、私どもは今日なほ同じ樣に耳に快い、物の判つた、放縱な舊露西亞の無駄話を毎日、毎時間、毎一歩に聞かぬで有らうか。

私どもの師は神を信じて居た。

『如何して此町の人が皆僕を不信者にして仕舞ふのか、僕には解らないね』と、彼は時として言ひ〳〵した。『勿論僕は神を信じて居るよ、mais distinguons.（只少々他人と違つては居るがね。）僕は只僕自身の中に神自身を意識する存在として神を信じて居るのだ。僕は僕の宅のナターシャ（下婢の名）のやうに神を信ずることは出來ない、又自分だけ「安全な側に居る」と信じて居る田舍の紳士のやうに信ずることも出來ない、又吾が愛するシャトーフのやうにも――いや、シャトーフは此處に論ずる限りではない、彼は莫斯科のスラヴォフィル（スラヴ民族主義者）のやうに「主義」を信じて居るのだ。で、基督敎に關しては、それに對して心から敬意を拂つて居るにも拘らず、僕は基督敎徒ぢやない。僕は寧ろ偉大なるギヨェテのやうに、若しくは古代希臘人のやうに、古への異端に近いね。ヂョーヂ・サンドが彼女の傑作の一つで立派に言明したやうに、基督敎が婦人を理解し得なかつたと云ふだけで、最う充分だね。儀式とか斷食とか、其他そんな樣な事に關しては、僕は其の自分と何の關係が有るかを知らない。此町の鐵棒引が何んな噂を立てようとも、僕はジェジュイト派の信者とは成らぬのだ。千八百四十七年に、外國に居たベリンスキイはあの有名な手紙をゴーゴルに送つて、痛く彼が或種の神を信ずることを非難した。Entre nous soit dit,（此處だけの話ぢやが、）僕はゴーゴルが――特に其時代のゴーゴルが――此句を……いや、其手紙の全體を讀んだ瞬間よりも、一層滑稽なものを想像することが出來ない。が、戯談は偖置いて、僕も根柢に於ては一致して居るから、彼等に向つて言ひたい――それが人間で有ると。彼等は人民を愛することを知つて居た、彼等の爲に苦しむことを知つて居た、彼等の爲に總ての物を犧牲にすることを知つて居た。而も彼等は必要の場合には人民から離れることも知つて居た、或種の觀念にばかり拘泥しては居なかつた。ベリンスキイとも有らうものが、幾許人民と一緒に成るんだと云つて、四旬齋の牛酪や豌豆汁の中に救濟が求められようか！……』

が、此時シャトーフが口を挾んだ。

『貴方の仰有る左樣いふ人達は決して人民を愛しなかつた、彼等の爲に苦みもしなかつた。又彼等の爲に何物をも犧牲にしなかつた。彼等は只左樣想像することに依つて自ら快を取つたばかりだ！』と、彼は下を向いたまゝ、絕えず氣忙しげに椅子をがた〳〵云はせながら呟いた。

『彼等が人民を愛しないんだつて！』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは叫喚いた。『あゝ、彼等は何んなに露

西亞を愛したらう！』

『露西亞も人民も愛しないのだ』と、シャトーフも亦眼の色を變へて叫喚いた。『何人でも自ら知らぬ物を愛することは出來ない。彼等は露西亞の人民に就いて何等の概念をも有たない。彼等は只指の叉から露西亞の人民を覗いて見たのだ。貴方も左樣なのだ。特にペリンスキイに於て左樣なのだ。それはゴーゴルに遺つた其手紙でも判る。あの男はクリローフの昔噺の中へ出て來る穿索好きの爺さんの樣に、博物館へ行つても、象を見ないで、只佛蘭西の社會主義者の蝶にばかり氣を取られて居たのだ。彼はそれ以上に出ないのだ。而も恐らく貴方の何人よりも物が解つて居たのですよ。貴方は人民を看過したばかりでなく、彼等に對して侮蔑の態度を取つた。それは只貴方方が佛蘭西の人民の外に、巴里人の外に人民といふものを想像することが出來ないで、露西亞人が彼等の樣ちやないのを恥かしく思つたからぢやないか。これが裸にした眞理ですよ。而も人民を知らない者は神を知らない。彼等自身の人民を理解することが出來なく成つて、人民との關係が疎くした者は、同時に同じ程度に於て彼等の祖先の信仰を失ひ、無神論者又は神に冷淡な者と成るのは必定ですからね。私は眞理を識つて居るんですよ。これが事實なんですよ。それなればこそ、貴方方も吾々も皆獸類のやうな無神論者でなければ、冷淡な、放埒な懦弱者に過ぎないのだ。えゝ、ステパーン・トラフィモーギーチさん、貴方もですよ。私は斷じて貴方を除外例にはしないのだ！いや、私が斯んな事を言つて居るのも、實際貴方の爲なのだ！ちやんと言つて置きますがね。』

かう云ふ一人言を發した後では、お極りの樣にシャトーフは帽子を摑んで、最う萬事が終つた、ステパーン・トラフィモーギーチとの交情も絶えて仕舞つたと心の中に確信しながら、扉口の方へ跼出すのだ。が、後者の方で好い具合に彼を引止めるのだ。

『シャトーフ君、お互に言ふだけの事を言つた後ぢや、成たけ仲直りした方が好くはないかね』と、彼は安樂椅子の上から應揚に手を差出したものだ。

シャトーフは外面極めて粗骨な亂暴者だけれども、內心では又非常に感じ易い、微妙な心を持つて居た。時々他人に對して餘りと思はれるやうな擧動にも出たけれど、それが爲に一番苦しむ者は又彼自身で有つた。で、彼はステパーン・トラフィモーギーチの言葉に對して、口の中で何やら呟きながら、熊の樣に擦足で戻りながら、急ににこりと思ひ掛けない微笑を漏らして、帽子を下に置き、頑固に眼を床に落したまゝ、前と同じ椅子に腰掛けた。勿論酒が持出された。ステパーン・トラフィモーギーチは時宜に適つた口上の下に、例へば過去の偉人の記憶に於て祝盃を擧げた。

第二章　ハアリイ公子　媒妁

一

此世に最一人ヴルヴーラ・ペトローヴナがステパーン・トラフィモーギーチ位大切にしてる人間が有つた。それは外でもない、彼女が一人息子のニコラーイ・フシェヴォロードギーチ・スタフローギンで、ステパーン・トラフィモーギーチが傅はれたのも、此子の教育を引受けるためで有つた。此子は其當時八歳で、浮氣な父親は既にヴルヴーラ・ペトローヴナと別居して居たから、全く母親の心盡しの下に成長した。有樣を言へば、ステパーン・トラフィモーギーチは如何したら自分の教へ子の氣に入るかと云ふ術を心得て居た。其祕訣は眞個彼自ら子供で有ると云ふ事實に存するのだ。其時分は私も彼處に居なかつたし、彼は絕えず眞の友達に對して飢を感じて居た。だから、此の小さな子供が少し大きく成ると、彼は譯もなく仲善しに成つて仕舞つた。兎に角、二人の間には、格別歳の相違もないやうに自然と見え出して來た。彼が十歳か十一歳のこんな子供を夜半に喚び起して、單に其子の前に自分の傷ついた感情を訴へて泣いたり、又は家庭の祕密を打明けたりしたことも一度や二度ではない。而もそれが亂暴な遣方とは氣が附かないので有る。二人は互に抱き合ひながら泣いた。子供は阿母さんが自分を非常に可愛がつて呉れるとは知つて居た。が、それだけ阿母さんのことを思つて居たか如何かは疑はしい。彼女は子供に對して滅多に話もしなければ、そんなに干渉もしなかつた。が、彼は母親の探るやうな眼が絕えず自分に注がれて居るのに、始終苛々しながら氣が附いて居た。と云つて、母親は子供の教育はすツかりステパーン・トラフィモーギーチに委

任して居たのだ。其當時は彼に對する彼女の信仰も未だ搖がなかつたので有る。此子が十六歳で大學豫備門へ這入つた時、脾弱さうな蒼い顏をして、妙に默り込んで夢みるやうな容子をして居るのを見ては——尤も後に成つて、此子は素張らしい體力を具へるやうに成つたが——何人でも此先生が生徒の神經に寧ろ惡い影響を及ぼしたと信ぜずには居られない。が、此の二人の友達が互に抱き合つて、徹宵泣きつゞけて居ると云つても、毎も家庭の面倒事にのみ起因してるものと思つては成らない。ステパーン・トラフィモーギーチは生徒の心の奥の琴線に觸れて、一種の永遠にして神聖な、おほろげな憧憬の情を喚び起すことを知つて居た。一たび此の憧憬の情を味つた覺えの有る、若い選ばれたる魂は、其後一生の間再び幸福に感ずることも出來なければ、又安價な滿足と妥協するやうには成らぬものだ。何れにしても、此教師と生徒を引離すと云ふことは——最う既に稱いけれども——決して惡い事ではない。

始め二年の間、青年は休暇毎に豫備門から自宅へ歸り〳〵した。ヴルヴーラ・ペトローヴナとステパーン・トラフィモーギーチが彼得斯堡に居た時分は、阿母さんの許で開かれる文學會にも時折出て、まじ〳〵會衆を眺めながら聽いて居た。彼は餘り口を利かない、昔の通りに沈默家で內氣で有つた。ステパーン・トラフィモーギーチに對する態度は相變らず親しけで注意深かつた。が、何處か遠慮の影が翳して居た。彼は明かに心を苦しめる高遠な問題や、昔の追憶を避けようとして居た。阿母さんの望みで、學校の課程を終へると、軍隊へ這入つた。間もなく近衞騎兵の最も光榮ある聯隊へ這入る辭令を受けた。が、其の軍服で阿母さんの許へ遣つて來たことはなかつた。又彼得斯堡からの彼の手紙もだん〳〵間遠に成つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは惜氣なくどん〳〵金子を遣つた。奴隷の解放以後、彼女の領地から上る收入はそれ迄とは半額にも足りない程に成つたのだが、永年の間の節儉で積

んだ多額の金子を有つて居た。彼女は自分の息子が彼得斯堡の最上流社會で旨く遣ると云ふことに非常な興味を有つて居た。彼女が失敗した場所で、有福な青年士官は見る〳〵成功して行つた。彼女が夢想だもしなかつた知己を再び新にして、到る處に喜んで迎へられた。

けれども、直ぐ後から妙な噂がヴルヴーラ・ペトローヴナの耳に傳はつた。此青年は突然一種の狂人染みた無頼の生活を始めたと云ふのだ。別段勝負事をするの酒を飲むのと云ふのではない、只街中で人を馬の脚に掛けたり、或貴婦人と通じて居ながらそれを人中で侮辱したりして、野蛮な傍若無人の振舞をすると云ふのだ。で、只快樂のために喧嘩を買ふと云ふやうな、本式の無頼漢に成つたと云ふ噂が一般に立つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは非常に昂奮して心を痛めた。ステパーン・トラフィモーヰチは、これは只餘りに多くの天賦を有つて生れた性格が始めて無暗に沸騰したばかりだの、暴風雨は直きに熄んで仕舞ふだの、恰度沙翁の中に出て來て、フオルスタツフや、ボアンスやクイックリイ夫人と一緒に酒を飲んで騒ぐ公子ハアリイの青年時代に似て居るのだと云つて、彼女を宥めようとした。後年ヴルヴーラ・ペトローヴナはステパーン・トラフィモーヰチに對して、好く『下らない！下らない！』と言つて遣返したものだが、此時ばかりは左樣叫ばなかつた。それ處か、非常に熱心に傾聽して、最つと精確に其理論を說明して呉れと賴んだり、又自分で沙翁全集を持つて來て讀んだりした。が、それは餘まり彼女を慰めなかつた。又別にこれと云ふ著しい類似も見出されなかつた。で、今度は方々へ問合せた手紙の返事を一日千秋の思ひで待つて居た。が、それは永く待つにも及ばなかつた。公子ハアリイは殆ど同時に二つの決闘に關係した、二つとも此方が全然非難さるべきもので、相手方の一人を其場で殺し、一人を不具にして仕舞つた。そして、其結果今や審問を待つて居る處だと云ふ致命的な報知が彼女の許へ届いた。軍法會議は彼を卒伍に貶し、貴族の權利を褫つて、歩兵聯隊に移した。特典で一層重い罰だけは免れたのださうな。

が、千八百六十三年カウカサスの戰爭で、彼は再ひ頭を擡げ出した。十字章を授かり、下士に進んで、瞬く間に士官の地位に昇つた。昇級後、彼は一見何等の原因なくして、突然職を去つた。が、故郷のスクヴォーレジュニキにも歸らなければ、其間に數百本の手紙を出した母親にも皆目書信を止めて仕舞つた。廻り廻つた噂に依ると、彼は彼得斯堡に歸つて來て居る。が、前と同じ交際場裡へは顔を出さない。何うも隱れて居るらしいと云ふことで有つた。彼は妙な仲間へ這入つて、自墮落な安官吏や、兇暴軍人や、高等乞食、醉漢、其他有りと有らゆる彼得斯堡の人層と交際して居るだの、其人達の家族を訪れて、薄暗い細民窟や、有らゆる種類の下等な魔窟で日を暮し夜を明して居るだの、大變落魄れてるだの、襤褸を纏つてるだの、正直彼はそれが所好だのと云ふやうな噂も有つた。彼は母親に金を強請らなかつた。彼は些少ながら自分一個の所有地を有つて居た。嘗て父のスタフローギン大將の所領であつた土地で、幾許かの收入も上がる、噂に依ればサキソニイ生れの獨逸人に貸して有つたのださうな。到頭母親の方から折れて出て、一度自分の傍へ來るやうに賴んで遣つた。で、ハアリイ公子は此町へ姿を現はした。

私が彼を見たのは此時が初めてゞ有つた。

彼は私が考へて居たとは全然違つた風采をした、二十五歳位の非常に美しい若者で有つた。實を云ふと、私は酒と放蕩とに身を持崩した、薄汚ない破落戸を見る積りで居た。處が、彼は私がこれ迄に出會つた中でも一番優雅な貴公子で、極めて着こなしの好い、趣味と修養とに慣らされた人でなけりや見られないやうな風采と擧動とを具へて居た。私ばかりが吃驚したのぢやない、町中の人が驚いて仕舞つた。ニコラーイ・スタフローギンの行跡は既に口から口に傳つて、何人も熟く知つて居た。今や目の當り會つて見れば、此通りの風采だから大概驚かずには居ら

れない。が、猶更驚いたのは、彼に關する風聞が半ば事實として現れたことで有る。

此町の婦人達は皆此の新來の客で夢中に成つた。それが又きッかり二派に別れて、一方は彼を崇拜し、一方は殆ど血に渇した憎しみで彼を過した。が、雙方とも彼のことで狂氣のやうに成つて居た。中には、彼は屹度一生の祕密を胸の中に隱して居るだらうといふ考へに、別して惹附けられる者も有つた。他の者は又彼が人殺しであると云ふことを言立てゝ快を取つた。又彼は非常に好い教育を受けて、實際多大の修養を積んで居るやうにも見受けられた。勿論私達を驚かすにはそんなに偉い知識は要らないので有る。が、少くとも、彼は日常の出來事に對して正確な、時には優越な判斷をも下すことが出來た。彼は元來餘り饒舌らなかつた。故とらしくなく優雅で、驚く程謙遜な、同時に大膽で自信が有つた。此處の洒落者達は皆妬ましがり相に彼を眺めて居た。又、眞個彼のために蹴推されて仕舞つた。彼の容貌も亦私を惹き附けた。頭の毛は際立つて眞黒に、薄色した眼は際立つて薄く落着いて、顏色は際立つて白く和らかで有つた。頬の紅みもはッきりし過ぎて、齒は眞珠、唇は珊瑚の樣に見えた。一口に言へば、美の儀表と云はれるかも知れない。が、同時に、何だか人を寄せ附けないやうな可厭な所が有つた。或者は彼の顏が假面に似て居ると言つた。或者は又彼の異常な體力に就いて噂した。何方かと言へば、彼は身丈の高い方で有つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは自慢ゆに、而も絕えず不安相に彼を眺めて居た。彼は殆ど六箇月間吾々の中で、ほんやり、物靜かに、寧ろ氣難かしげに過した。世間へ顏も出した。そして、土地の風習が要求する總ての義務を相當に落度なく遣つて退けた。又方から彼は知事と親戚に成つて居た。そして、知事から近親として待遇せられた。併し數箇月ならずして、此野獸は爪を出した。

序ながら、一寸言つて置きたい。吾等の親愛なる知事公イヴーン・オーシツポヰーチは寧ろお婆さんのやうな氣の好い爺さんで有つた。彼があれ程役人としての義務を怠つて居ながら、こんなに永く在職して居られると云ふのも、偏へに彼が善い家柄の出で高貴の間に緣邊の有るお陰で有つた。彼が寬裕で待遇の厚い處から、こんな忙しい時代の知事なんかよりも、昔の最つと好い時代の式部長官などに適して居たかも知れない。町では毎も此州を統治して居るものは、彼でなくてヴルヴーラ・ペトローヴナだなどと噂して居た。勿論これは當附けなので、事實ぢやなかつた。實際、近年に成つて、ヴルヴーラ・ペトローヴナは故ら意識して有らゆる權力の地位から退いて居た。州全體から非常な尊敬を受けて居たにも係らず、自家の勢力を自分で定めた極めて狹い範圍に限つて仕舞つた。いろんな高い責任から免れて、忽如として自家の所領を管理し始めた。二三年の間に、以前所領から上つただけの收入を上げるやうにした。以前のロマンティックな考へ——彼得斯堡の旅行や、雜誌發刊の企てなんど——を止めて、金子を貯めることに專念した。彼女はステパーン・トラフィモーヰチさへ遠ざけて、他の家に宿を取ることを許した。それを爲ようと云ふので、彼はいろんな口實の下に長い間彼女を苦しめたものだ。ステパーン・トラフィモーヰチは段々彼女を散文的な女と言ふやうに成つた。尤も、彼はこんな戲談も非常に鄭寧な形式でこそ遣り得たので、それも稀少に餘程好い折を窺つてで有つた。

彼女の周圍の者は私どもを始めとして皆——特にステパーン・トラフィモーヰチは一番強く——彼女の息子が彼得斯堡の社交界に於ける彼が成功の日から始まつて、軍隊で貶黜された時からだん〳〵烈しく成つて來た。而も謂はゞ一種の新しい希望として、渴仰の的として、彼女はあり〳〵と彼を憐れて、息子の前では奴隸のやうに見えた。彼女は口で言ふことの出來ない、何か漠とした不可思議なものを憐れて居るのだ。彼女は彼の中に隱れて居るものを搜し當てることは出來まいかと、折々探るや

うな眼附を息子の方へ忍ばせた……見よ、野獸は俄然其爪を現した。

二

突然、何の機會もなく、此公子はいろ〳〵な人に對して、迚も本當とは思はれないやうな失禮を働いた。一番驚いたのは、そんな暴行が是迄全く聞いたことのない、考へるにも考へられない、世間に有觸れたこととは似ても附かぬ、馬鹿氣切つた惡戲で、それが又腹立紛れでもなければ、意趣返しでもないことで有つた。此町の俱樂部の會員で、皆から尊敬されて居るピヨートル・バブローギーチ・ガガーノフと云ふお爺さんが、何か言ふたびに『俺は君等に鼻で引張廻されやせんぞ　えゝ！』と呶鳴る癖が着いて居た。それだけでは無邪氣な話で、別段惡い事はないが、處が、或日少數の會員――皆それ〳〵身分ある人々――の中で、彼が何か熱した討論に伴れて、此癖を持出した時、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは隅の方に一人誰にも氣附かれずに立つて居たが、突如ピヨートル・バブローギーチの傍へ行つて、不意に二本の指で碇かり彼の鼻を挾まへた。そして、部屋の中を二歩三歩引廻した。彼がガガーノフ氏に對して何等の怨恨をも含んで居る筈はない。勿論許し難いことでは有るが、學校生徒の惡戲位に考へれば考へられぬこともないのだ。それに後から想出して語る人の話に據れば、彼はそんな事をした瞬間に於て、『殆ど氣でも違つたやうに』夢みるやうな顏附をして居たと云ふのだ。が、騷ぎの瞬間に於ては、人は只行爲其者を見て、それが十分な意識の下に、間違ひでも何でもなしに行はれたものと思惟した。又ニコラーイ・フシェヴォロードギーチ自身も明白に、些かの悔いもなければ、周章た容子もなく、彼等に對して心地好さ相に皮肉な笑ひを漏らして居た。此の嘲弄がましい冷淡さが俱樂部の會員に取つては一層惡かつた。一同驚然として彼を取卷いた。

彼はきよと〳〵四邊を見廻しながら、何と言はれても返辭をしないで、自分の周りにわい〳〵騷いで居る人々を物珍らし相に眺めて居た。一瞬間彼の顏は曇つた。それから悔辱された老人の前へつか〳〵と進んで行つて、さも氣のなさ相に早口に言つた。

『ね、勿論貴方は勘辨して下さるでせうね。ほんの出來心で遣つた事なんですからね。』

其辯解の輕々しさは殆ど新に侮辱を加へたと同じで有つた。騷ぎは前よりもえらく成つた。が、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは單に肩を聳かしたばかりで出て行つた。

此事件たるや、其の亂暴な無禮――一見した處では、豫め計つて仕組んだものとしか思へない、從つて吾々の仲間全體に對する極端な侮辱で有るが――それに就いては何にも言はないとしても、實に體裁の惡い話で有る。衆皆も左樣思つた。で、後に殘つた連中は卽座に一致して、小スタフローギンを俱樂部の會員名簿から除くことにした。それから知事に向つて、『直樣彼に託された行政權を使用して――此事件が形式上法廷で審理されるのを待つことなく――此暴漢を首府の外に退去させ、それに依つて、此町の紳士間の平靜を保證して貰ひたい』と懇願して、俱樂部全體の名で上申書を出すことに決めた。憤怒の餘り、『スタフローギン氏を制裁するには法律の名文が有る』と迄附け加へた。これはヴルヴーラ・ペトローヴナの故に知事に當附けたので有る。彼等は皆興に乘じて骨を折つた。生憎な事には、知事は此時町に居なかつた。近頃寡婦に成つた大變に美しい婦人の子供の命名親に成るとて、一寸離れた町へ出掛けたのだ。が、直に戻ると云ふ話で有つた。其間人々は此の尊敬され、且馬鹿にされた紳士に對して、本式の歡迎を遣つた。皆彼を抱擁して接吻した。町中擧つて彼を訪問した。終ひには彼のために持寄りで宴會を開かうと迄言出した。が、彼が強つて辭退したので、それだけは止めに成つた。熟々考へて見ると、此人は

究極鼻を引張られたのだ。別段祝ふにも當らない。

が、それにしても一體如何したのだ？　如何してこんな事が持上つたので有らう？　町中で誰一人此の亂暴な行爲を狂氣に持つて行かなかつたのは異樣で有る。多分正氣の時でもニコラーイ・フシェヴォロードギーチは此位の事仕兼ねないと云ふ預斷が有つたのかも知れない。私一個としては、其後矢繼早に起つた事件が何も彼も一通り明らかにして、各自もそれで納まつて居るにも係らず、今日迄何と說明して可いか解らない。四年經つた後、俱樂部の椿事に就いて、私が物靜かに訊ねた時、彼は顏を蹙めながら、只『あの時は何うも頭の工合が好くなかつたのでした』と答へた。併しまアそんな先の事は話さずに止めて置きませう。

其外、一體に此町の人が此事件を憎惡の眼で睨めたのも又私を驚かせた。彼等は何處までも彼が一擧にして此町の社交界全體を侮辱しようと計企むで居たのだと言ひ張らうとした。彼は此事件の起るまで誰と意見の衝突を來したこともなければ、又誰に失禮な振舞をしたこともないのだ。それだのに今は、衆に彼を崇拜し渴仰した女どもまで、眞先に立つて、男子連よりも猛烈に彼を攻擊して居る。恐らく彼は平常から生意氣なとでも思はれて居たらしい。

ヴルヴーラ・ペトローヴナは驚愕の餘り顚倒して仕舞つた。が、後に成つて、彼女はステパーン・トラフィモーギーチに、自分にはずつと前からそんな蟲の知らせが有つた。で、此の六箇月と云ふもの、毎日『何かそんな樣な事』が起りはせぬかと心配して居たのだと打明けた。阿母さんの身としては、隨分思ひ切つた事を言つたもので有る。『始まつた！』と、彼女は顫えながら心の中で思つたのださうな。俱樂部で其事が有つた明くる朝、彼女は用心しい〳〵心を鎭めて、息子と其問題に近寄つて見た。が、可哀相に、此女は碇かりして居ると云ふものゝ、絕えずぶる〳〵と打顫えて居た。彼女は一晩中眠らなかつたのだ。加之、朝早く助言を求めにステパーン・トラフィモーギーチの小舍へ出掛けた。其處で彼女は誰の前でも嘗て見せたことのない涙を流した。彼女は『ニコラース』が何か言つて呉れるか、何とか事情を話して呉れるかと、頻に待つて居た。阿母さんには毎も丁寧に、恭しくして居たニコラーイは苦い顏をしながら、大變眞面目に、少時阿母さんの言ふことを聞いて居た。が、不意に物も言はないで立上つて、彼女の手に接吻しながら出て行つた。而も其晩、恰も計企んでもしたやうに、彼は又大變な事を仕出かした。それは最初のに比べると、一層罪のないもので有つた。が、世間の思惑が思惑だつたので、猶更騷ぎを大きくした。

吾々の友人なるリープティンは、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチと阿母さんとの會見が濟むと、間もなく訪問して、其夜自分の妻のために誕生日を祝ふ小人數の會へ是非出席して貰ひたいと頼んだ。ヴルヴーラ・ペトローヴナは息子がそんな下等な連中との交際に趣味を有つて居るのを見て、前から胸を痛めて居た。と云つて、それを彼に言ふだけの勇氣もなかつた。彼はリープティンの外に社會の第三流に於て、いや、最つと下等な仲間にも幾人かの知己を擁へた——彼にはこんな友達を擁へる傾向が有るのだ。彼は是迄リープティンといふ人間には會つても、一度も其家を訪ねたことはなかつた。又リープティンが今自分を招待するのは、前日自分があんな眞似をした結果で、彼自身田舍の無賴漢として、俱樂部の連中を過すのはあれで澤山だといふ所信から、旨く遣つたもんだと内々喜んで居るのだと推察した。で、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは莞爾しながら行く約束をした。

大勢の客が集つた。餘り上等なお客でもなかつたが、其代り極めて陽氣で有つた。リープティンは盧桑坊で嫉妬深い處から、年に二回だけお客を襲ふことにして、其場合には惜氣もなく張込んだ。一番お正客のステパーン・ト

ラフィモーギーチは病氣と有つて來られなかつた。お茶が出て、果物と火酒とは豐富に有つた。三つの卓子に骨牌が始まつた。夕飯を待つ間、若い連中は踊に立上つた。ニコラーイ・フシェヴォロードギーチはリープティン夫人――大變に美しい小さな女で、怖ろしく彼に含羞んで居た――を引張出して、一緒に室の中を二度廻つた。それから彼女の傍に腰を卸して、話の中へ引張込んで笑はせて居た。到頭、彼女が笑ふ時如何にも美しいのに氣が附いて、突然滿座の中で女の腰を抱へながら、さも旨さうに、二三度彼女の唇に接吻した。可哀相に、彼女は吃驚して氣を失つた。ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは帽子を取つて、衆皆がわい〳〵騒ぎ出した眞中に、石の樣に突立つて居る亭主の傍へつか〳〵と歩み寄つた。が、亭主の容子を見ると、自分も亦どぎまぎして、早口に『憤るな、憤るな』と呟きながら出て行つた。リープティンは入口迄追掛けて行つて、自分で相手の毛皮の外套を取つて遣つて、そしてお叩頭をしながら、相手の男が階段を降りて行くのを見送つた。が、次の日此の比較的毒に成らない惡戯に續いて、寧ろ氣晴らしに成るやうな後日譚を生じた。其の後日譚から信用を獲て、リープティンは出來るだけそれを利用した。

翌朝十時に、リープティンの宅の下婢だと云ふ自墮落な、がら〳〵した、頬の紅い百姓の三十女がニコラーイ・フシェヴォロードギーチへの使命を齎して、スタフローギン家へ遣つて來た。そして、何處迄も『若旦那樣』にお目に懸りたいと言ひ張つた。彼は惡く頭痛がして居たが、兎も角出て會つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナも強ひて其場に立會ふことにした。

『セルゲイ・ヴシリエーギーチ（リープティンの名）は斯う言ひますだ』と、下婢は口早に言出した。『先づ叮寧にお禮のう申して、御機嫌を伺つて來いだと。それからはア昨日のやうな事の後ぢや、昨夜は好く眠られましたツけかねと。で、今日はお心持は何んな鹽梅ぢや伺つて來いと言ふんだよ。』

ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは微笑した。

『何卒歸つて主人に宜しく言つてお呉れ。それからお前の許の主人は、此町で一番物の解つた人だと、私が左樣言つてたと傳へてお呉れ、可いかい？』

『で、主人は又斯う御返辭をしろと言ひましただ』と、下婢は追掛けるやうにして、猶更早口に言出した。『それはア仰有るまでもなく自分で承知して居ますだ。で、貴方へも同じ事を申上げて來いと言ひましただ。』

『成程！だが、如何して俺の言ふことがあの人に解つたらうね？』

『そりやア俺知りましねえだ。だが、俺が自宅を出て街ン中を歩いて居る時、何やら聲がしたかと思ふと、旦那さ帽子も被らないで俺の後を追掛けて來ただよ。それで何言ふかと思へば、向うで如何かした機みに、「お前の主人は此町中で一番悧巧な人ぢや」と言はれたら、直に言ひ返して來るが可い、忘れちや不可ないよ、「へえ、仰有る迄もなく、それは自分でも好く承知して居ります。で、貴方へも同じ事を申上げます」だと。』

三

漸くの事で知事との會見も遂げられた。吾々の愛する、溫和なイヴーン・オーシッポギーチは漸つと旅行から歸つたばかりで、又漸つと俱樂部のぶん〳〵慣つた訴訟を聽いたばかりだ。彼も如何かしなければ成るまいとは思つたが、偖て當惑した。此の人の好い老人も矢張あの親戚の若者を怖がつて居るらしい。が、兎に角若者を連れて來て、俱樂部と被害者へ十分滿足の行くやうな形式で、若し必要と有れば文字に書いてなりとも謝罪させ、其上で頭

を好くするために、少時此土地を去つて伊太利へでも、或は事實何處でも構はないが外國へ旅行させようと決心した。此際彼がニコラーイ・フシェヴォロードギーチを通した應接室では――從來彼は親戚の特權として、家中何處へでもずん〳〵這入つて行くことを許されて居た――隅の方で、アリヨーシャ・テリャトーニコフと云ふ上品な書記で召使を兼ねた男が忙し相に書狀の封を開いて居た。次の室には、以前知事の同僚で有つた、體格のどつしりした大佐が、一番扉口に近い窓の側に腰を掛けて、此方の室で何んな事が進行して居ようとも知らぬ顏に、一人『民の聲』に讀み耽つて居た。實際、彼は此方へ脊中を向けて居たのだ。イヴーン・オーシッポギーチは遠廻しに、殆ど囁くやうにして、其問題へ近づいた。而も絕えず論旨をごつちやにして居た。ニコラーイ・フシェヴォロードギーチはそれに反して親類らしい實意な處が全然見えなかつた。彼は眞蒼な顏をして、何か心の中に烈しい苦痛を抑へてでも居るやうに、絕えず眉の根を寄せながら聽いて居た。

『ニコラースや、君は親切で氣が大きんだね』と、老人は漸つと言出した。『君は修養の有る人間だ。最上流の社會で育つたのだ。此町でも是迄君の擧措進退は他人の手本に成つて來たんだよ。それが又君の阿母さんには大層な慰藉に成つたのだね。處が、今度は又何うも譯の解らない、危險な事に成つて仕舞つた！私は君の一家の友人として、眞に君を愛して居る老人なり、親類なりとして話をするのだよ。君だつて左樣いふ人の言葉に腹は立てられない譯だ……一體如何してあんな仕來りの法則や習慣に外れた、後先見ずの事をしたのかね。宛然熱病にでも取附かれたやうな彼の仕業は一體如何したと云ふのかね。』

ニコラーイは當惑して悶々しながら聽いて居た。不意に、何か知ら猾い、人を馬鹿にしたやうな光が彼の眼に輝いた。

『何でそんな事をしたか申上げませう』と、彼は澁々口を切つた。そして、四邊を見廻しながら、イヴーン・オーシッポギーチの耳の側へ寄つて行つた。上品なアリヨーシャ・テリャトーニコフは故と二歩許り窓の方へ移つた。大佐は『民の聲』を讀みながら咳嗽をした。あはれなイヴーン・オーシッポギーチは遠てよ、眞正直に耳を傾けた。彼は非常に好奇心を煽られた。其時如何しても信じられぬやうな、が、一方から言へば如何しても見誤られないやうな事が起つた。老人は突然、ニコラーイから何か面白い祕密を明かされる代りに、齒で耳の上部に咬ひ着いて、可成強く嚙まれたのを感じた。彼は身顫ひして、息が塞るやうな氣がした。

『ニコラースや、そりや戲談が過ぎるよ』と、彼は自分のでないやうな聲を出して、器械的に叫んだ。

アリヨーシャと大佐とは未だ其場の樣子が呑み込めなかつた。それに好く見えなかつた。で、二人が一緒に內密話をして居るのだとばかり、終ひ迄想つて居た。が、老人の狼狽した顏は二人を吃驚させた。彼等は直樣助けに行つたものか、それとも待つて居たものか解らないので、眼を圓くしながら互に顏を見合せた。ニコラーイは恐らくそれに氣が附いたので有らう、一層酷く嚙んだ。

『ニコラースや、ニコラースや』と、可憫相に老人は叉呻いた。『あよ……最う戲談は好い加減にして吳れ！』

最う一瞬間もしたら、知事は屹度恐怖の餘り死んで仕舞つたらう。が、怪物も彼に情を垂れて、漸つと耳を離して遣つた。老人の死ぬやうな恐怖は一分間たつぶり續いた。次いで一種の發作に陷つた。半時經たぬ間に、ニコラーイは捕へられて、一時禁錮所に移された。彼は獨房に閉籠められて、特に入口に番人を附けられた。此處置は隨分取急いだもので有つた。が、柔和な知事も今度は非常に憤つて、ヴルヴーラ・ペトローヴナと對抗しても、責任を一身に引受けると言出した。ヴルヴーラ・ペトローヴナはそれを聞くと、大急ぎで知事の許へ駈着けて、神經で顏

の肉をぴく〳〵させながら、即座に彼と一論判しようとした時、手もなく門前拂ひを喰はされたので、世間でも膽を潰した。彼女は自分の感覺を信ずることが出來ないやうな氣がしながら、其儘馬車から降りないで引返した。

漸つと總ての事が明かに成つた。夜明の二時に、それ迄落着いて、眠つてさへ居た囚人が突然騒がしく成つて、拳固で戸を亂々しく叩き出した。異常な力で入口の鐵格子を捩ぎ取つた。當直の役人が一隊の人々と共に駈け附けて、密房の中へ飛び込んで犯人を縛り上げようとした時、彼は腦の熱のために非常に苦しんで居るやうに見えた。彼は母親の許へ伴れて行かれた。

何も彼も一時に明かに成つた。此町の醫者は三人とも、患者は既に三日も前から精神錯亂の狀態に有つた、又見たところ充分な意識も狡い智慧も持つて居るやうだが、常識や意志の力は欲如して居たのだと云ふ、實際目前の事實に依つて支へられた意見を發表した。そんな譯で、リーブティンが何人よりも早く眞實を推量して居たと云ふことに成つた。柔和な、感情の強いイヴーン・オーシッポギーチは全然恥入つて仕舞つた。倶樂部でも皆極りの惡い思ひをしながら、如何してそんな事に氣が附かなかつたかと、今更不思議に思つた。尤も中には懐疑者も有つた。

ニコラーイは二箇月以上も床に就いて居た。莫斯科から知名の醫師を招んで、其意見も徴せられた。町中擧つてヴルヴーラ・ペトローヴナを訪問した。彼女は皆彼等を宥して遣つた。春に成つて、ニコラーイは全く恢復した。伊太利を漫遊して來たらといふ阿母さんの言葉にも、一も二もなく同意した。彼女は更に近隣まはりへ暇乞に歩いて來るやうに、若し又必要が有れば、出來る範圍内に於て謝罪も言うて來るやうに頼んだが、ニコラーイは非常に機嫌よく承知した。彼はピヨートル・パブローギーチ・ガガーノフの家で、大層細かい繕解をして、ガガーノフも其

謝罪ですツかり滿足したと云ふやうな噂が倶樂部へも聞えた。一周りして居る間、ニコラーイは大層眞面目で、寧ろ元氣がなかつた。何人も同情して彼を迎へたらしい。が、何人も一寸迷惑して、彼が伊太利へ行くといふのを喜んだ。イヴーン・オーシッポギーチは眞に涙含みさへした。併しよ〳〵別れを告げる時でも、如何いふ譯か、進んで彼を抱擁して遣るだけの勇氣がなかつた。中には未だ、あの惡漢が只俺達を調戯つたのだ、病氣なんて何處にも有つたのぢやないと思ひ込んでる向きも有るには有つた。彼は又リーブティンに會ひに行つた。

『ねえ、君』と、彼は訊いた。『如何して君には僕が君の事を物の解つた人だと言ふだらうと云ふやうなことが前から解つたのかね。そして、それに對する返辭を女中に含めて置くことが出來たのだい？』

『そりやア貴方』と、リーブティンは笑つた。『貴方が物の解つた方だと云ふことを見拔いたからですよ。だから、私には貴方の仰有ることが前から解つて居たのです。』

『何れにしても、稀らしい暗合だね。處で、何かい、君はあの女中を使に寄越した時、本當に僕のことを物の解つた人間で、狂人ぢやアないと思つたのかね。』

『えゝ、最うずんと物の解つた理智の人だと思ひましたよ。私は只貴方を狂人だと信じてるやうに裝つたのですよ……で、貴方は直に私の意中を察して、女中を通じて私の機才に對する保證を傳へて下すつたのでせう？』

『うむ、其處が少し違つてるよ。僕は其の……實際病氣だつたんだからね』と、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは顔を蹙めながら呟いた。『全體、君は僕が正氣で他人に摑みかゝるもんだと思ふのかい。』

リーブティンはたぢ〳〵とした。そして、何と返辭をして可いか知らなかつた。ニコラーイは眞蒼に成つた。少くとも、リーブティンには左樣見えた。

『兎に角、君は一風變つた物の見方をするよ』と、ニコラーイは續けて言つた。『が、あの女中だけは、僕は知つてるがね、君は確に僕を羞かしめるために寄越したのだよ。』

『私は貴方に決鬪を挑むことは出來ませんでした、迚も。』

『あゝ、そりや出來なからうさ。僕も君が決鬪を嫌ひだとは聞いたやうに思ふよ。』

『なにも佛蘭西語から飜譯することは有りませんからね』と、リーブティンは身體を萎めながら言つた。

『佛蘭西語から　あゝ、君はそれぢや國家主義者だね。』

リーブティンはだん〳〵後退りをして行つた。

『何だ、これは？』と、ニコラーイは机の一番目立つ所に置かれたフウリエーの一卷を見附けながら言つた。『君は本當に社會主義者かい。眞逆左樣ぢや有るまいね。だが、これも佛蘭西語から飜譯した物ぢやないかね』と、彼は指の尖で其書物を敲きながら笑つた。

『いや、それは佛蘭西語から飜譯した物ぢや有りません』と、リーブティンは本當に腹を立てゝ椅子から飛び上りながら言つた。『單に佛蘭西語からぢやアない、一般人類の言語から飜譯したのですよ。敢て言ひますがね、人類の一般的、社會主義的共和國の言語からですよ。單に佛蘭西語からぢやアない。』

『ふむ！馬鹿なことを！そんな言語が有るものか』と、ニコラーイは笑つた。

青年スタフローギンに就いて語るべきことは又後から出て來る。が、此處で一つ言つて置きたいのは、彼が此町に逗留して居る間に受けた印象の中で、特に深く彼の記憶に刻み附けられたのは、此の田舍の小役人の、野鄙で嫉妬深い家庭の暴王の、蠟燭の燃え差しや御馳走の殘肴でも抬つて歩く、同時に熱情を以て未來の『社會主義的調和』の幻影を信じて居る、卑吝な金貸の醜い、殆ど下劣な姿で有つた。彼は夜に成ると、未來の共和國の幻想的な繪畫を法悅の眼もて瞻視しながら、それが近く我が露西亞に於て、我が州に於て實現されることを、自分の存在を信ずるやうに堅く信じて居た。而もそれが彼自身『小さな持家』を買ふために金を貯めた所で、嫁と一緒に持參金を貰つて二度目の結婚をした所で、恐らくは又百哩四方に、彼自身を含めても『未來の一般人類的共和國、社會的調和』の會員たるに足るやうな人物が一人も居ないやうな所で實現されようと云ふのだ。

『何うして斯んな人間が出來たものだらうか』と、ニコラーイは時々此の奇態な共產主義者を想出して、自ら怪しんだ。

四

公子ハッリイは三年に涉つて旅行して居たので、殆ど此町でも忘られた。ステバーン・トラフィモーギーチから聞く處に據ると、彼は歐羅巴中悉く旅行して廻つたさうな。埃及へも行けば、エルサレムも訪問した。それから或科學的探檢隊に加はつて、實際アイスランドへも行つて來た。又一冬は獨逸の大學の講座に出席して暮したさうだ。彼は阿母さんの許へは滅多に手紙を寄越さない、一年に二度か、最つと少いことも有つた。が、ヴルヴーラ・ペトローヴナは前からそれに慣らされて居た。永年の間に出來上つた自分と息子との關係を柔順に受け容れて、一人で何人にも言はず息子のことを心配して居た。ステバーン・トラフィモーギーチとさへ餘り打解けて話をしなく成つたらしい。彼女は何か內密で計畫して居ると見えて、金子のことに掛けては、前よりも一層儉しく成つた。ステバーン・トラフィモーギーチの骨牌で損をするのに對しても、一層つけ〳〵言出した。

此年の四月、終に巴里に居る陸軍中將の未亡人で、ヴルヴーラ・ペトローヴナの幼友達なるプラスコーギヤ・イヴーノヴナ・ドロズドフから一本の書狀が到着した。ヴルヴーラ・ペトローヴナは此女とは八年間顏も見なければ、手紙の往復もしなかつた。其のプラスコーギヤ・イヴーノヴナが手紙を寄越して、ニコラーイ・フシェヴロードギーチは彼等と大層親密に成つて、特に一人娘のリザとは非常な仲好しと成つた。で、彼は今や彼等と伴れ立つて瑞西のベルネイ・モントロオへ行かうとして居る。尤も、彼は目下巴里に滯在中のK伯爵——彼得斯堡に於ける有名な勢力家——の家族とも懇意に成つて、其家では息子と同樣に遇せられ、大抵伯爵の許で暮して居るのだと知らせて來た。其手紙は極簡單なもので、上に擧げた事實の報告の外に何等の推論をも附加してはないけれど、其目的は好く判つて居た。ヴルヴーラ・ペトローヴナは永く考へて居なかつた、卽座に決心して、準備を整へ、一人養ひ子のダーシャ——シャトーフの妹——を連れて、四月の半頃巴里に向つて出發した。其處から又瑞西へ行つた。起えて七月、彼女はダーシャをドロズドフの家に殘して置いて、一人で歸つて來た。八月の末にはドロズドフ一家も此町へ到着する筈だと云ふ報知を齎した。

ドロズドフ家も亦吾々の州の地主で有つたが、中將イヴーン・イヴーノヴギーチ・ドロズドフ——此人もヴルヴーラ・ペトローヴナの友人で、彼女の所天の同僚で有つた——の役向が常に妨げと成つて、未だ一度も其の廣大な所領を訪問する運びに到らなかつた。一年前中將が亡く成つた時、寡婦は夏の下半期の間ベルネイ・モントロオで葡萄療法を實行しようと云ふやうな下心も有つて、娘と一緒に外國へ出掛けた。で、露西亞へ歸つた節には、何かの都合も好い處から吾々の州に落着かうと考へて居た。彼女は此町に數年間窓を釘附けにしたまゝ、空屋に成つて居る大きな邸を持つて居た。此の一家も隨分物持で有つた。プラスコーギヤ・イヴーノヴナは最初の結婚ではツージン夫人と稱ばれて、學校伴侶のヴルヴーラ・ペトローヴナと同じ樣に御用請負人の娘で、當時可成な持參金を貰つた。それに所天のツージンも退職騎兵士官でこそ有れ、是亦相應に財產も有れば才能も有る人で有つた。彼が死んだ時には、七つに成る一人娘のリザにたんまり身代を遺して行つた。で、リザベータ・ニコラーエヴナが二十二歲と成つた今日では、彼女の財產は、二度目の結婚に子供といふものゝ一人もない阿母さんの死後、當然彼女に來る筈の財產を勘定に入れないでも、二十萬留布の額に上つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは彼女の旅行ですッかり滿足して居た。彼女自身の意見に據れば、プラスコーギヤ・イヴーノヴナとも滿足な協商が遂げられたらしい。歸着すると直ぐ、彼女は一切殘らずステパーン・トラフィモーギーチに打明けた。實際、彼女は近年にない程彼に對してお饒舌に成つた。

『萬歲！』と、ステパーン・トラフィモーギーチは歡聲を上げた。そして、指を鳴らした。

彼はすッかり有頂天に成つた。殊に友達の留守の間非常に萎氣切つて居たので、それが目に立つた。出立の際、彼女は彼に對して本當に暇乞ひもしなかつた。恐らく彼がお饒舌するのを心配したのでも有らう、「あの婆さん」に對する計畫に就いては一言も話さなかつた。其頃、彼女は突然彼の莫大な賭博の負債を發見してから、殊に機嫌が惡かつたのだ。が、瑞西を立つ前には、最うそれが直つて、何うも自分は故國に打捨らかした友を餘まり酷くしたやうだ、歸國したら、一つ其の埋合せをして遣らなければ成るまいと思つた。彼女の唐突な、得體の知れぬ出發は、ステパーン・トラフィモーギーチの悸えた心に深酷な印象を與へた。それが又惡い事には、同時に外からも面倒な事が幾つも起つて來た。彼は永い間身に振かゝる莫大な負債に惱まされて居たので、ヴルヴーラ・ペトローヴナの補助を借りなけりや、迚も滿足に返せさうもなかつた。加之、其年の五月には、柔和なイヴーン・オーシッポギー

チの在職年限が切れた。彼は稍面白くない事情の下に廢めさせられたのだ。それから引續いて、未だヴルヴーラ・ペトローヴナが歸らない間に、新知事アンドレイ・アントノーギーチ・フオン・レムブケが赴任して來た。それと共に、ヴルヴーラ・ペトローヴナに對して、從つて又ステパーン・トラフィモーギーチに對しても、此土地の交際社會全體の態度が目に見えて變つて來た。其外、彼は又昔からの癖で、誰かが最う自分のことを危險な人物として新知事に報告したらうと云ふやうな恐怖を抱いて居た。彼は又秋に或つて到着するといふ新知事の夫人とヴルヴーラ・ペトローヴナとは、既に是迄交際場裡で知合にも成つて居るのだが、喧嘩して別れた爲に、今ではフオン・レムブケ夫人の名を聞いただけでも、ヴルヴーラ・ペトローヴナは顫え上るだらうと云ふやうな噂が專ら此町に行はれて居ると、或確かな筋から聽き込んだ。斯ういふ矢先だから、ヴルヴーラ・ペトローヴナの自ら信ずる處有りげな、勝ち誇つた容子や、いろんな噂を耳にしても、馬鹿にして冷淡に構へて居る態度が、ステパーン・トラフィモーギーチの衰頽して居た精神を蘇へらせ、急に彼を元氣附けた。彼は妙に追從笑ひをしながら新知事到着の光景を語り出した。

『勿論貴方は御存じでせうね、Excellente amie（優れた友よ）』と、彼は快活に、又媚びるやうに言葉を引延ばしながら言つた。『一般に露西亞のお役人が如何いふものだと云ふことは、新に燒かれた、新に設定された——ces interminables mots Russes！（これは何うも長たらしい露西亞語ですがね！）——露西亞のお役人が如何いふものだと云ふことは御存じでせうね。併し役人氣質といふものが何んなものだ、如何いふ種類のものだと云ふことは恐らく御存じぢや有りますまい？』

『役人氣質？そんな事は知りませんね。』

『宜しい……Vous savez chez nous（ねえ、我國では）……En un mot（一口に言へば、）まア極下らない無用漢に停車場の切符を賣らして御覽なさい、其の無用漢が直ぐジユピタアにでもされたやうな氣に成つて、貴方が切符を買ひにでも被往しやれば、横柄に上から見卸しますよ。何と言つて可いか……seulement pour vous montrer son pouvoir.（只自分の權威が見せたいからでせうがね。）ま、斯んな處にも露西亞の役人氣質が出て居るのですよ。私は又或露西亞の教會で小使が有名な英吉利人の家族を——こりや又餘まり酷い話ですがね——四旬齋のお勤めが始まる前に、教會の外へ抛り出したといふ話を聞きましたよ。えゝ、文字通りに立派な奥さん方を抛り出したと云ふんですよ。それがね、只正規の時間に來なかつたからと云ふ理由に止まるんだから堪りませんや。そんな事外國人が知りますものか。ね、此處にも役人氣質の熱に浮かされた一例が有るでせう。Et il a montré son pouvoir！（で、小使は彼の權威を示したのです！）』

『最少し端折つて下さいな。ねえ、ステパーン・トラフィモーギーチさん。』

『フオン・レムブケ氏は目下州内を巡視して居るのですがね。一口に言へば、此のアンドレイ・アントノーギーチなる人は、露西西人化した獨逸人で、希臘舊教の信者で、なほ彼のために言へば、四十歳位の年配の極めて綺麗な男だけれど——』

『何だつて綺麗な男だと言ふんです？あの人の眼は羊のやうなんですよ。』

『そ、そりや其通りです。ですが、私は其の御婦人連の意見に從つたのですよ。』

『それから如何したんですよ。ずん〳〵先をお話しなさいツてば！時に、貴方赤い頸帶をして居るのね。最う永いことして居るんですか。』

『今日……今日したばかりです。』

『それからあの、保養の運動をして被坐しやるの？醫者の言ふやうに、毎日四哩の散歩をして被坐しやる？』

『毎日……と云ふ譯では有りません。』

『知つてますよ。瑞西に居る時から、ちやんと左樣だらうと思つて居ましたよ』と、彼女は腹立しげに叫んだ。『さ、四哩位ぢや駄目ですよ、一日に六哩でなくツちや！恐ろしく弱つて居るんですよ、眞個恐ろしく！いゝえ、年齡を取つたばかりぢやない、老けて被坐しやいますよ。最初一目見た時は、本當に吃驚しましたよ。それに此の赤い頸帶は——quelle idée rouge！（一體如何したと云ふのです！）可いから、本當に仰有ることが有るなら、フォン・レムブケの話を續けて下さい。そして、早く切上げて下さいよ。私も疲れて居るんですからね。』

『En un mot,（一口に言へば、）私はあの人が四十で漸と勢力を得出したお役人の一人だと言ひたかつたのですよ。四十に成る迄名も聞えずに愚圖々々して居て、急に細君が出來たお蔭で——それとも何かそんな樣な思ひ切つた手段を取つた所爲かも知らないが——急に乘出した男だと……畢竟、其のあの人は今旅行して居ないのだと……畢竟、其の斯う言ふ積りなんですよ。私が靑年の誘惑者で、田舍の無神論者の溫床だなぞと、誰か最う告口をした者が有りましてね……で、早速探索を始めたんですよ。』

『そりや本當ですか。』

『それに貴方のことに就いても、實際「貴方が州を治めて居たのだ」と聞かされた時、vous avez（如何でせう、）あの人は「以後そんな事は一切成りません」とまで、口に出して言つた相ですよ。』

『そんな事を言つたのですか。』

『「以後そんな事は一切成りません」つて、而もavec cette moue.（橫柄な面をして言つたんだ相ですよ。）あの人の細君も間もなく遣つて來るといふ話だが……彼得斯堡から眞直に來るんだ相ですね。』

『外國から來るんですよ。私もたび〳〵會つて談話をしました。』

『Vraiment?（本當に？）』

『巴里でも、瑞西でも、あの女はドロズドフ家の親戚なんですよ。』

『親戚ですッて？何といふ不思議な暗合でせうね。噂に據ると、あの女は大層な野心家で……それに偉い關係も有ると云ふことですね。』

『何が關係なものか！四十三の歲までは、鐚一文なしの老孃でしたよ。尤も、今ぢやあのフォン・レムブケを引拘けたんですがね。勿論、あの女の目的は男を出世させることでせうよ。二人とも策師ですからね。』

『で、細君の方が二つも歲上だ相ですね。』

『五つですよ。あの女の阿母さんは、私達が莫斯科に居た時分好く自宅へ出入したもんでね。あの女も宅の存命中は後生だから自宅の舞踏會へ招待して呉れッてね、煩さく強請に來たもんですよ。處が、可哀相に、何人もあの女と一緒に踊つて遣手がないでせう。其時分最う二十五でしたよ。それが可笑しいことには、始中終小娘のやうな短かい衣服を着て居てね。』

『や、其容子が眼に見える樣ですね。』

『でね、私が着いた時は、最う隱謀の中へ飛び込んだのですよ。貴方もドロズドフ夫人の手紙は讀んだでせう。あれ程分り切つた手紙はないぢや有りませんか。處が、如何でせう？あの馬鹿のブラスコーギヤが——あの女は昔

から馬鹿なんですよ――何爲に來たと云ふやうな顏をして見せるんだもの、私だつて竦くぢや有りませんか。私は四邊を見廻して見た。すると、あのレムブケの女とあの女の從弟といふのが――それは死んだドロズドフの娚だと云ふことですがね――ちやんと惡計企をして居るんでせう。それですツかり解つた！勿論、私は猶豫しちやア居ない。瞬く間に總ての狀態を一變して、今ぢやブラスコーギヤも又私の方に着いてるんですがね。それにしても、隨分な惡計企ですわね。』

『で、兎に角凱旋して來たのですね。眞個貴方はビスマークですよ。』

『ビスマークでも有りませんが、私には何んな慮僞でも愚劣でも、それが見透されるんですよ。えゝ、レムブケは慮僞で、ブラスコーギヤは愚劣なんです。私もあんなぶよ〳〵した人見たことが有りませんね。加之、脚が腫んでるんですよ。あの女は氣の好いほんつくですよ。眞個、お人好しのほんつく程馬鹿なものは有りませんからね。』

『ですが、ma bonne amie（わが好き友よ、）人の惡い馬鹿の方が一層始末に行きませんよ』と、ステパーン・トラフィモーギチは相手の氣を兼ねながら口を挾んだ。

『そりや左樣かも知れませんね。貴方リザを記憶えて被坐しやるの？』

『Charmante enfant!（可愛らしい子でしたね！）』

『ですが、最う子供ぢや有りません。一人前の女ですよ、而も見識のある女ですよ。あの子は高尙な心を持つた、熱情のある女です。殊に私の氣に入つたのは、あの馬鹿な阿母さんに負けて居ないことでね。例の從弟ぢや一騷ぎ有りましたよ。』

『それに其男はリザベータ・ニコラーエヴナの親戚でも何でもないぢや有りませんか……で、其男が希望でも懸けてるんですか。』

『いえね、其人は若い士官で、靜かな、沈着いた人ですよ。えゝ、私は常に公平で有りたいと思ひますからね。で、想ふに、其人自身としては其惡策に反對して居るらしいのですね。何にも目懸けて居ない樣ですよ。畢竟、皆レムブケ夫人の策略なんですね。其人はニコラースに對して大層敬意を拂つて居るのですよ。が、要するにリザの心持一つですからね。私が立つ時は、あの子もニコラースと大層仲好くして居ましたよ。それにニコラースも十一月には此處へ歸つて來ることに約束してね。ですから、まア今の處氣に懸るのはレムブケ夫人の惡策だけですがね。何分あのブラスコーギヤが眼が見えないのですからね。あの女が不意に私の疑つてることは皆想像だなんて言出すぢや有りませんか。私は面と向つて、貴方は馬鹿だと言つて遣りましたよ。ニコラースが暫らく待つて呉れと賴んだのでなけりや、私はあの女の面の皮を引ン剝かずに歸つて來る處ぢやなかつたのですよ。あの女は又ニコラースを通じてK伯爵に取入らうとして居るんですよ。畢竟、母子の間を割かうとするんですね。併しリザは私達の味方ですからね。時に貴方はカルマーヂノフがあの女の親類だといふことを知つてますか。』

『なに？フオン・レムブケ夫人とですか。』

『えゝ、遠いんですけれどね。』

『カルマーヂノフ、あの小說家の？』

『えゝ、作家ですよ。何でそんなに吃驚なさるの？勿論自分ぢや大家の積りで居るらしいが、其人が今度一緒に來るんですよ。今あの女は彼方で其人のことを騷ぎ散らして居るんですがね。此方へ到着の上は、此土地で文學倶樂部のやうなものを作る積りですとさ。其人は一箇月許り逗留するんだと云ふことですがね、何でも今迄持ち殘し

た地面を賣りたいんだつて。私は瑞西で最う少しで會ふ所でしたよ、成たけ會はないやうにして居ましたがね。尤も向うから會ひに來て吳れる分には差支有りませんがね。以前は好く手紙も吳れたし、自宅へも遣つて來たんですよ。貴方も最つと好い服裝をして居て下さいね、ステバーン・トラフィモーヰチさん。貴方はだん〳〵無精に成つて行きますよ。何て世話が燒けることでせう。今何を讀んで被坐しやるの？』

『私は……其の私は……』

『解りました。毎例の通り友達と、飮むことと、倶樂部と、骨牌と、それに舞神論者の評判で暮して居たのね。其評判が嫌ひですよ。貴方が無神論者と云はれるのは有難く有りませんからね。特に今は左樣ですよ。先には空饒舌に過ぎないと思つたから打捨つて置いたのです。けれども、終ひには言はなくちや成りませんよ。』

『Mais, ma chère (ですが、貴方や)……』

『お聽きなさいツてば！勿論、私も學問に掛けては、貴方と比較に成らないでせうがね、旅行をして居る間、隨分貴方のことを考へて見ましたよ。で、一つの結論に到着したのです。』

『何んな結論ですか。』

『貴方と私とが此世の中で一番賢い人間ではない、私達よりも最つと悧巧な人が幾許も有ると。』

『ふむ、却々鋭い、而も中つて居る。で、吾々より賢い人が此世に有るとすれば、其人達の言ふことが確かで、吾々は間違つて居るかも知れないと言ふんでせうね？ Mais, ma bonne amie, (だが、わが好き友よ、)假に私が間違つて居るとしても、私は私で信仰の自由といふ一般的、人間的な、永遠無上の權利を有つて居る。私は有るが儘の私で有る權利を有つて居る。私は迷信家や僞善者に成る心要がない。それが爲に、私は一生或人々から憎まれても構はないのだ。Et puis, comme on trouve toujours plus de moines que de raison (で、又坊主といふものが何時でも有り過ぎる程有るんですからね。)そして、私は全然それに一致するから……』

『え、貴方何とか言ひましたね？』

『私は on trouve toujours plus de moines que de raison (坊主といふものが何時でも有り過ぎる程有る) と言ひました。そして、私は全然それに……』

『そりや屹度貴方の言葉ぢや有りませんね。何處からか取つて來たんでせう。』

『えゝ、パスカルが言つたのですよ。』

『私の思つた通りだ。何故貴方は他人の樣に短くぴたりと中つたことを言はないのですね？何故毎もあんなに長く引延してばかり居るんですね？今し方お役人氣質に就いて貴方の仰有つたことより、其方が何の位好いか知れませんよ。』

『Ma foi, chère (成程)……何故と言つた處で、第一に私はこれを要するにパスカルぢやない。Et puis (それからですね)……第二に吾々露西亞人といふものは自分の國語では何にも言ひ得ないものです……少くとも、今日迄は何にも言つたことがない。』

『ふむ！何うもそれは眞理ぢや有りませんね。兎に角、左樣いふ文句は備忘錄に取つて置いたら可いでせう。そして、何か言はなくちや成らぬ場合に、それを想出すやうにしたら……あゝ、ステバーン・トラフィモーヰチさん。私は眞面目に、眞個眞面目に貴方にお話することが有るんですよ。』

『Chère, chère amie (何です。え、何ですよ。)』

『今言ふ通りフオン・レムブケの一家やカルマーヂノフなぞが……まア貴方は本當に年齢を取りましたね……本當に私の心配ッたら有りませんよ。私は彼奴等が貴方に對して敬意を拂ふやうにしたいんですよ。眞個、彼奴等は皆寄せても貴方の小指程に當りませんからね。ですが、貴方の身持は如何でせう！貴方は誰ですか、何と見えますか、これで他人樣のお目に懸けられませうか。過去の傳說を身に體して、立派な人物の模範として立つてる處か、貴方は惡い癖ばかり着いて、酒と骨牌がなけりや一日も居られないぢや有りませんか。ボール・ド・コックの駄小說の外には、何にも讀まないし、何にも書かない。他の人は皆書いてるぢや有りませんか。貴方は只無駄口ばかり利いて時間を潰して被坐しやる！貴方の何うしても離れられない、あのリーブティンのやうな詰らない漢と如何して友達に成つたのでせうね？』

『如何してあんな奴を mine（私の）だの inseparable（離れられない）だのと言ふんです？』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは恐る〳〵返答した。

『あの人は今何處に居るんですよ』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは嚴しく訊いた。

『あの男……は貴方に無限の敬意を捧げて居るんですよ。今は阿母が殘して置いた遺產を嗣ぐために、S――州の方へ旅行して居ますがね。』

『あの人は金儲けより外に何にもしない樣ですね。で、シャトーフは如何しました？矢張例の通りでせうね。』

『Irascible, mais bon.（憤りッぽいが、併し善い男ですよ。）』

『あのシャトーフばかりは我慢が出來ませんよ。ひねくれてゝ、自分のことばかり考へて居るんですからね。』

『ダーリャ・パブローヴナは如何しました？』

『ダーシャのこと？何で急にあの子のことを想ひ附いたのです』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは可訝しげに相手を見遣つた。『あの子は健康で居ますよ。ドロズドフさんの許へ置いて來たのですがね。私は瑞西で貴方の息子さんのことも聞きましたよ。餘り好い事ぢや有りませんがね。』

『Oh, c'est un histoire bien bête! Je vous attendais, ma bonne amie, pour vous raconter.（あゝ、そりやア眞個馬鹿な話ですよ。ねえ貴方、私は貴方にお話しようと思つて待つて居ました。）』

『最う澤山！今日はこれだけにして置いて下さい。私も勞れ切つてますからね。又改めて存分お話しませうよ、特に可厭な事をね。貴方は笑ふ時言葉が漏れますね。年齢を取つた證據ですよ。又何て妙な笑ひ方を爲さるやうに成つたのね！……本當に惡い癖ばかり着いて、如何したと云ふんでせうね。カルマ！ヂノフは迚も貴方に會ひに來やしませんよ。それに、此邊の人といふものは、他人の缺點ばかり氣を附けてるんですからね。貴方は今に成つてすッかり襤褸を出したんですよ。ですが、最う澤山々々、私も勞れましたからね。本當に貴方も手加減を爲さるものですよ。』

ステパーン・トラフィモーヰーチは『手加減』をした。そして、騷つく胸を抑へながら出て行つた。

五

實際、私どもの友人には、近來特に尠からぬ惡い癖が着いた。彼は目に見えて急速に老衰した。又無精に成つたと云ふのも事實らしい。彼は酒も餘計に飲み出した。又涙脆く成つて、一層神經質に成つた。が、それにも係らず一方では有らゆる美しいもの、彼の所謂眞に高尙なものに對する熱愛を層一層高めて行つた。彼の顏は不思議な程

end, but, Or.

容易に變り出した。例へば、今無上に嚴肅な表情をして居るかと思ふと、直ぐ又おどけた馬鹿な顏附に成る。彼は孤獨に堪へることが出來ないで、始終娛樂にばかりこびり着いて居た。誰か來て町の噂や無駄話をして呉れや可いとばかり思つて居た。で、暫らく誰も來ないと、彼は元氣なく部屋々々を彷徨き廻つて、唇を窄めながら窓の側へ歩いて行つたり、深い溜息を吐いたり、終ひにめそ〳〵と泣出したりした。彼は始終物の前表を氣にして、何か豫期しないこと、避けられないことが起りはせぬかと、そればかり案じて居た。彼は怪懼して來た。自分の夢に非常な注意を拂ふやうに成つた。

彼は其日も其夜もすツかり欝ぎ込んで居た。で、私を喚びに寄越したが、大皆苛々して居て、長い間饒舌つた。私にいろんな事情を訴へたんだが、別段取留めたことともなかつた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは前から彼が私に何も彼も隱さず打明けることを知つて居た。で、談話をしてる間に、彼が何か或特別の事に就いて惱まされて居る、が、彼自身にもそれが判然しないのだと云ふことが、だん〳〵解つて來た。私達が二人限りで話をすると、彼は定つて長たらしい愚痴を零した。それから少時すると、毎も酒を取寄せた。で、だん〳〵話が陽氣に成るといふ順序で有つた。今度は如何したのか酒がなかつた。そして、彼がそれを取寄せたいのを一生懸命に辛抱してる容子が明と見えた。

『如何してあの女は始終あんなに不機嫌なのだらうね』と、彼は二言目には子供のやうに訴へた。『Tous les hommes de génie et de progrès en Russie étaient, sont, et seront toujours des ivrognes.（元來露西亞の天才又は進んだ人といふものは、皆博奕が所好で酒飲みで有つたし、有るし、これからも有るんですよ。）僕は何もそんな博奕打ちでもなければ、酒飲みでもない。あの女は僕が何にも書かないと云つて非難するんだよ。可厭しな話だねえ！

又僕が何故寐てるかと訊くんだよ。あの女の心算ぢや、僕が「世間に對する模範なり、非難なり」として立つて居る筈だと言ふんだがね。Mais, entre nous soit dit,（併し此處限りの話だがね、）「世間に對する非難」として立つ使命を帶びて生れた人間といふものは、斯うして寐て居るより外に仕方がないぢやないか。それがあの女に解つてるのかね。』

で、此時に成つて、あれ程執拗に彼の心を惱まして居た主なる煩ひが、漸と私にも明白に成つて來た。其晩彼は幾度も姿見の傍へ行つて、凝乎と其前に立つて居た。到頭彼は鏡の前から私の方へ振向いて、妙な失策の語氣を漏しながら、

『Mon cher,（ねえ、君、）僕も最うすツかり駄目に成つたねえ』と言つた。

實際、彼は其時までで、つい其日まで、何んな『新しい思潮』が生れやうが、又ヴルヴーラ・ペトローヴナの思想が何んなに變らうが、一つだけは自ら意を強うする或物を持つて居た。それは外でもない、彼が單に流人としてでもなく、又有名な學者としてでもなく、乍併一個の美しい男として、彼女の女性としての心の上に魔力を持つて居るといふ自信で有つた。二十年來、此の甘い自慢が彼の心に根を張つて居た。恐らく彼の自信の中でも、これが一番別れ難いもので有らう。彼は其晩近々彼の身に振り懸らうとして居る重大な苛責に就いて、何が齎が知らせたのではなからうか。

六

私はこれから此物語が本當に始まらうといふ、あの最う殆ど忘られた椿事の描寫に移らうと思ふ。

到頭、八月の末にドロズドフの一家が遣つて来た。彼等の到着は地方の交際社會に可成なわやめきを齎した。そして、それは恰度彼等の親戚なる新知事の夫人が待ちに待たれた姿を此町に現はした一寸前で有つた。が、これ等の面白い事件に就いては、又後に話すことに爲よう。今は只ヴルヴーラ・ペトローヴナのあれ程待ち勞びれて居たプラスコーギヤ・イヴーノヴナが極めて面倒な問題を齎したと云ふに止めて置く。卽ちニコラーイは此の七月に彼等と別れて、ライン河でK伯爵の一家と出會つてから、其家族と一緒に彼得斯堡に向つて出發したと云ふのだ。——序ながら、伯爵の娘は三人とも恰度嫁入盛りで有るさうな。

『リザベータは彼樣いふ頑固で高慢な女ですから、私が何度訊いても口を開きませんがね』と、プラスコーギヤ・イヴーノヴナは言葉を結んだ。『でも、私の思ふには、あの子とニコラーイ・フシェヴォロードギーチとの間に何か起つたらしいんですよ。理由は私にも解りませんがね。が、其事ぢや、一つダーリャ・パブローヴナに訊いて御覽なすつたら可いでせうよ。私の考へでは、何うもリザの方が腹を立てゝ居る樣ですね。まア嬉しい。私も漸つと貰方のお氣に入を連れて來て——好う御座んすか、確にお渡ししましたよ。あゝ、これで重荷が降りた。』

あの『ぶよ〳〵した』女が顏に癇癪筋を見せながら、こんな毒の有る言葉を浴せ掛けた。彼女は明かにこれ等の言葉を準備して置いて、それが齎す効果に就いても、前以て研究を積んだものらしい。が、ヴルヴーラ・ペトローヴナは感傷的な効果や謎で動かされるやうな女ではない。嚴として、最つと精密な滿足すべき說明を要求した。プラスコーギヤ・イヴーノヴナは直に調子を下げて、終ひには涙と最も熱心な友情の發表とに溶けて行きさへした。一體、此の癇癪持ちの同時に感傷的な婦人は、ステパーン・トラフィモーギチと同じ樣に、始終眞の友情に憧れて居るので、娘のリザベータ・ニコラーエヴナに對する不服も、主として『娘が自分の友達に成つて臭れない』といふ點に有るらしい。

彼女の言葉數の多い說明では、實際リザとニコラーイとの間に喧嘩らしいものが有つたと云ふ外に、何も確かな事は判らなかつた。而も其喧嘩の性質に就いては、プラスコーギヤ・イヴーノヴナは別段取留めた考へを持つて居ないらしい。ダーリャ・パブローヴナに對する答め立に就いても、彼女は結局それを撤回したばかりでなく、『癇癪紛れに言つた』のだから心に懸けて臭れるなと、態々ヴルヴーラ・ペトローヴナに賴んだ位で有つた。で、要するに、何事も曖昧で不明瞭を極めたもので有つた。彼女の言ふ通りだとすれば、喧嘩は『リザの頑固で皮肉な性質』から起つたのだ。『ニコラーイ・フシェヴォロードギーチさんも亦氣が高くつてね、彼樣にあの子を愛して居ながら、矢張あの子の皮肉が恢えて居られないんですよ。結局、雙方で皮肉に成つたのでせう。處で、私達は間もなく或若い方と懇意に成つたのですがね。それが何ですよ、お宅に被坐しやる「大學教授」の甥御さんと云ふことで……』

『甥ぢやない、息子ですよ』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナが訂正した。

昔からプラスコーギヤ・イヴーノヴナはステパーン・トラフィモーギチの名を記憶えることが出來ないで、每も『大學教授、大學教授』とばかり喚んで居た。

『左樣、息子さんですか。そりやア何方でも構ひませんがね。えゝ、普通の若い人で、非常に快活な、行儀作法などに拘はらない、別に取立てゝ言ふ所のない人ですよ。處で、リザが善くない事を致したんですがね。何でもニコラーイ・フシェヴォロードギーチに嫉妬を燒かして遣るやうな了簡で、其人と懇意に成つたのですよ。いえ、それも大して惡い事ではない、娘時分には有り勝ちな、何方かと云へば、それが愛嬌にも成るんですがね。只、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチさんは嫉妬を燒くかと思ひの外、何にも解らないのか、それとも氣に懸けない

のか、知らん顏して自分も其男と懇意に成つたのですよ。左樣すると、リザが憤りましてね。尤も、其人は間もなく他所へ行つて仕舞ひました。が、リザは機會さへ有ればニコラーイ・フシェヴォロードギーチさんに突懸つて行くんですよ。そこへ持つて來て、あの方が時折ダーシャと話をして被坐しやるのを感附いたから堪らない。彼女は全く逆上せ上つて、私迄生きてる空は有りませんでしたよ。ねえ貴方、醫者は私に氣を使つちや不可ないと禁めて居るんですよ。それだのに、あの人達はそんな事には一向お構ひなく、來る日も〳〵喧み合つてばかり居るぢや有りませんか。其間ニコラーイ・フシェヴォロードギーチさんの許へ、伯爵夫人からお手紙が來たでせう。あの方は其日の間に仕度して立つてお仕舞ひに成りましたよ。えゝ、二人とも仲好く別れました。リザも大變元氣よく浮々して、あの方を送り出す時も好く笑ひましたよ。只それが表面だけだつたんですね。あの方が行つてお仕舞ひに成ると、彼女は急に沈んで仕舞つて、全くあの方のことを言はなく成りました。私にもあの方の名さへ言はせないんですよ。ねえ、ヴルヴーラ・ペトローヴナさん、貴方に申上げて置きますがね、何卒リザとお話に成りましても、此問題に成たけ觸れない樣にして下さいましな。只害に成るばかしですからね。でも、貴方が默つて被坐しやれば、彼女は自分から其事を言出しますよ。すれば、最つと委しい事も解りますからね。なに、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチさんがお約束通り此處へ來るのを延ばしさへ爲さらなければ、彼等は又一緒に成るでせうよ。』

『私は直ぐ彼に手紙を遣りますよ。それだけの事なら、別に喧嘩といふ程の事ぢや有りませんね。悉皆何でもない！ダーリャのことも、私は好く知つてますよ。』

『ダーシェンカのことを彼樣に言つたのは濟みませんでしたね。眞個私が惡う御座いました。それにあの人達の會話と云ふのも、極普通の話で、大きな聲でしたよ。でも、其時は眞個顚倒して仕舞ひました。それにリザはあの女とも又前の樣に親しくして居りますよ。』

卽日ヴルヴーラ・ペトローヴナはニコラーイに宛てゝ手紙を書いた。そして、一箇月でも可いから、彼の定めた期日より早く歸つて吳れと賴んで遣つた。が、それにも拘らず、彼女はなほ何か知ら說明されない、暗いものが此事件に含まれて居るやうな氣がした。夕方に成り、夜に成ると、始終其事ばかり思ひ續けた。ブラスコーギヤの言ふことは餘り無邪氣に過ぎ、感傷的に過ぎるやうにも思はれた。『ブラスコーギヤは昔學校時代から毎も感傷的に過ぎたんだものね』と、彼女は考へて見た。『ニコラースは女子供に侮辱された位で逃出すやうな男ぢやない。若し二人が本當に仲違ひをしたのなら、何か外に理由が有るんだ。あの人達はあの士官を此處へ引張つて來た。そして、親戚として自宅に臥起きさせて居る。それにダーリャのことに就いては、ブラスコーギヤは餘り急いでお詫びをしたものだ。屹度あの女は何か私に言ひたくないことを胸に有つて居るに違ひない。』

朝に成つて、ヴルヴーラ・ペトローヴナは少くとも一つの誤解を一時に喰ひ止めて仕舞はうとして、或計畫を案出した。餘り突拍子もないので肝を潰すやうな計畫で有る。それを心に浮べた時、何が彼女の心に有つたか、其奴を決めるのは艱かしい。又私もそれを捲へ上げた、いろんな矛盾した事情に就いて豫め說明しようとは思はない。只起るが儘に事件を正確に記錄する編年史家として、私の立場を限定して置く。從つて幾許信じられないやうな事件が起らうとも、それは私の罪ではない。が、其朝ヴルヴーラ・ペトローヴナの心に、ダーシャに對する疑ひが微塵も殘つて居なかつたと云ふだけは、最一度確めて置きたい。實際、今迄にも疑ひを抱いたことはない——それ程彼女を信用して居たのだ。加之、彼女はニコラースがダーリャに心を惹かされやうなぞとは考へやうにも考へられなかつた。翌朝、ダーリャ・パブローヴナが食卓で茶を注いで居る時、ヴルヴーラ・ペトローヴナは少時の間凝乎

と彼女を見詰めて居た。そして、其前日から恐らく二十度も繰返した『何でもないのだ』を又繰返した。

彼女の氣が附いたのは、只ダーシャが稍勞れて居るらしいこと、平常より物靜かで何處かぼんやりして居ることで有つた。朝のお茶が濟んでから、毎も變らぬ慣例として、二人は針仕事に取懸つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは彼女が外國で受けた印象をすツかり話せと吩咐けた。取分け自然に就いて、住民に就いて、町や、風俗や、美術や商業——何でも彼でも觀察して來たものは悉皆話せと吩咐けた。が、ドロズドフ家に就いては何にも訊かなかつた。彼女が何んな風に遣つて來たかと云ふことも訊かなかつた。ダーシャは裁縫臺を前に、彼女の傍に坐つて縫取りの手傳ひをしながら、半時許り平らな、單調な、何方かと云へば弱々しい聲で話した。

『ダーリャ』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは急に相手の言葉を遮つた。『お前は何か私に特別に話したいことはないのかい。』

『いゝえ、何にも』と、彼女は一寸考へた後で言つた。そして、薄色した眼で、ぢろりとヴルヴーラ・ペトローヴナを見遣つた。

『お前の魂にも、胸にも、良心にもないのだね？』

『何にも有りません』と、ダーシャはむツつりとしたまゝ、靜かに答へた。

『私も左樣思つてるんだよ。ダーシャや、私は決してお前を疑ひはしないんだよ。可いかい。まア其處に坐つてお聽き——私の前に、其椅子の上に、私はお前を確乎と好く見たいんだよ。あゝ、それで可いよ。で、お前に訊くがね、お前は結婚したかアないかい。』

ダーシャは不審相に、と言つて左程驚いた容子もなく、長い間相手の顏を見返した。

『まア默つてお坐で！第一年齡には大分違ひが有るがね、併しそんな事は氣に懸けるがものないと云ふことは、何人よりもお前が一番好く知つてお坐でだらう。お前は恰悧な子だもの、お前の一生に間違ひが有つては成らぬからね。それに、あの人は如何して未だ却々綺麗だよ。畢竟、私の言ふのは、あのお前が平常から尊敬して居たステパーン・トラフィモーギチのことだがね。お前の心持は如何だい？』

ダーシャはなほ一層不審相に相手を見遣つた。今度は只驚いただけではない、見る〳〵顏を曇らめた。

『まア默つて、急かなくとも可いよ！成程お前は私の遺言狀の中にお金子を持つてお坐でだ。が、若しも私が死んだら、幾許お金子が有るにしても、お前は如何成るとお思ひだい？お前は屹度欺されて、お金子を奪られて、終ひには途方に暮れるやうなことに成るよ。併しあの人と結婚して置けば、名の知れた人の奥樣ちやないかね。又一方にあの人を御覽よ。あの人のためにも用意はして有るけれど、私が死んだらあの人は如何成るとお思ひだい？私もお前にあの人を委せて置けば安心だわね。そりやア私もあの人が愚圖で、浮氣で、身勝手だと云ふことは知つて居るよ。だが、お前だつてあの人をそんなに惡くは思つて居ないだらう。第一世の中には最つと〳〵不好ない奴が幾許も有るからね。そんな奴の許へ、私がお前を手離して遣られるとお思ひかい。左樣は思はないだらう、えゝ？如何してお前は默つて居るんだい？』と、彼女は急に苛々しく言葉を切つた。『お前聽いてお坐でかい。如何しても言はないのだい？』

ダーシャは尙且聽いて居た。が、口は開かなかつた。

『あゝ一寸お待ち、あの人はお婆さんだよ。でも、其方が猶更お前に好くはないかね。而もあの人は感情的なお婆さんだから、女に可愛がられツこはないさ。だが、其の手頸ない處が又可愛いものだよ。お前も其處を一つ可愛

がつて上げるんだね。解つたかい。如何だね、解つたのかい。』

ダーシャも今度は點頭いた。

『え、解つてるんだね。又左樣なけりや成らんのさ。あの人だつてお前を愛するよ、愛しなけりや成らんのだからね――成らんのだからね』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは妙に激して、殆ど叫喚くやうな金切聲を出した。『それにあの人は、そんな義務がなくつても、自然にお前を愛するやうに成るよ。私にはちやんと解つて居る。それから最う一つ、私は始終此處に居るよ。安心してお坐で、私は始終此處に居るよ。そりや、あの人のことだからお前の不平も言ふだらうよ、お前の背後で蔭口も利くだらうよ。其邊に居る人を見當り次第にお前の惡口を耳擦りもするだらうよ。始終泣き聲ばかり出して居るだらうよ。で、又一日に二度隣の部屋に居るお前に手紙も書くだらうよ。が、如何したつて、お前がなくつては遣つて行かれないのだからね。そこが大事の處だよ。あの人をお前の思ふ通りにしてお上げ。それが出來なければ、お前は馬鹿だよ。あの人は首を縊りたいつてな事を言ふよ。いえ、左樣言つて脅かすのさ。だが、それを本當にしちや不可ないよ。眞實にしないで、尙且見張つてなきや不可ないよ。何とも言へないからね。如何かすると、あの人は首を縊つて死なぬとも限らないからね。彼樣いふ人には有ることだよ。首を縊るなんて、氣の弱い人のすることさ、意志の力ちやないよ。で、何んな事が有つても、切迫詰つたおん詰り迄は追つて遣らないことだね。これが結婚してからの第一の原則だよ。それから記憶えて置いて貰ひたいのは、あの人は詩人だよ。聽いてお坐でかい、ダーシャ！　纖性より大きな幸福はないんだよ。其上、お前は私にも大した滿足を與へて呉れるんだよ。それが大事なことさ。私が下らない事を饒舌つて居ると思ふんぢやないよ。私は自分で何を言つてるか解つてるんだからね。私は利己主義さ、お前も左樣だらうよ。勿論、

私はお前を無理に如何せうといふ積りはないよ。何方へでも決めるのはお前の自由さ。お前の言ふ通りに成るんだからね。斯うして坐つて居た處で仕樣がないよ。さア返辭をおしでないか。』

『奧樣、私が何うしても結婚しなくちや成らないと云ふことなら、私は何方へでも構ひません』と、ダーシャはきツぱり言つた。

『しなくちや成らない？　お前、それは何を言つてるんだい？』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは嚴しく相手の顏を睨み附けた。

ダーシャは針で刺繍の畫布を刺しながら默つて居た。

『お前は悧巧な子だが、下らない事を言ふね。成程、私はお前を結婚させて上げる積りには成つたが、別にそんな必要が有る譯ぢやアないよ。不圖、そんな氣が翳したばかりさ。それもステパーン・トラフィモーギチさんにさ ね。あの人のためでなけりや、幾許お前が二十歲に成るからと云つて、未だ〳〵お前を嫁に遣ると云ふやうな氣はないんだよ……で、如何だえ？』

『奧樣、私は貴方の思召次第に成ります。』

『ぢや、承知したんだね。まア落着いて、何故お前はそんなにせか〳〵するのだい。未だ言ふことが有るんだよ。私は遺言狀の中に一萬五千留布お前に遣る樣にしといたよ。それを結婚式の日に早速お前に上げることにしよう。其中で八千留布だけあの人にお上け、畢竟、あの人にぢやない、私に呉れるのだがね。あの人は八千留布の借金が有つて、私の手からそれを拂ふんだよ。勿論、お前のお金子でそれが濟せたことは、あの人にも好く承知させて置くんだがね。で、七千留布はお前の手に殘る勘定だよ。それを一文だつてあの人の手に渡しちや不可ない。あの人

の借金なぞ最う〳〵拂はなくても可いんだよ。可いかい？一遍でも拂つたら、それこそ始末に了へないからね。其上、私は始終此處に居るんだよ。お前は從來あの人が受けて居た通りに、食扶持と住家とを別にして、一年に千二百留布の支拂ひを私から受けるんだよ。私は其のお金子を直接お前の手へ渡すことに爲ませうよ。だが、時々はあの人にも幾許かづゝお上げよ。一週に一度はお友達を集せることも許して置くが可い。それ以上度々來るやうなら、構はず追出してお遣りよ。いや、そんな事は私が此處に居るから構はないがね。で、私が死んでも、其年金はあの人の失く成るまで支拂ふやうにして置くよ。可いかい、あの人の死ぬ迄だよ。あの人の年金で、お前のちやアないからね。それから今お前に上げる七千留布の外にだね——それはお前が馬鹿でない限り手を着けずに持つて居なくちや成らんのだがね——其外に、私は遺言狀の中で別に八千留布だけお前に當てゝ置くよ。それ以上には何にも上げられないから能く記憶えて置くが可い。さ、如何だ、承知したのかい。言ふ事が有るなら、最う言つても可いんだよ。』

『奥樣、私は最う先に申上げました。』

『何方でも決めるのはお前の自由なんだよ。お前の所好な樣にするんだからね。』

『では、お訊ね申しますが、奥樣、ステパーン・トラフィモーギチは何とか最う仰有いましたでせうか。』

『いや、あの人は何とも言はないよ、未だ何にも知らないんだよ……だが、あの人も最う直に仰有るよ。』

彼女は直樣飛び上つて、黒い肩掛を引被けた。ダーシャは又少し顔を赧らめた。そして、何やら物問ひたげな眼附で主人を眺めて居た。ヴルヴーラ・ペトローヴナは突然怒りに燃える顔を彼女の方へ向けた。

『馬鹿だね、お前は』と、彼女は鷹のやうに相手の上に乘し懸つた。『恩知らずの馬鹿め！何をお腹の中に有つて

るんだい？私がこれんばかりでもお前を胡麻化して、無理に納得させたやうに想はれるのかい。今に御覽！あの方は膝を突いてお前にお頼みなさるよ。そして、果報死にに死ぬ位だよ。物事は左樣いふやうに行くのさ。私だつてお前を苦しめる積りはないのだよ。それとも、お前はあの方が其の八千留布を目懸けてお前と結婚なさるとでもお想ひかい、私が遽てゝお前を賣らうとしてるとでもお想ひかい。馬鹿、馬鹿！お前達は皆恩知らずの馬鹿だよ。早く蝙蝠傘を取つてお呉れ！』

かう言つて、彼女は濡れた煉瓦の敷石傳ひにステパーン・トラフィモーギチの許へ飛んで行つた。

七

彼女がダーシャを苦しめる積りでないのは事實で有つた。それ處か、今や彼女の恩人として働いてると考へて居た。で、肩掛を被けながら、ちらと自分の養ひ子の當惑げな、疑ひ深い眼を見附けた時は、極應揚な、又正當な憤りが彼女の胸の上に燃え立つた。彼女は子供の時分からずつと此娘を心から可愛がつて來た。プラスコーヰヤ・イヴァーノヴナがダーリャ・パブローヴナを彼女のお氣に入りと言つたのは無理もない。ずつと以前からヴルヴーラ・ペトローヴナは、ダーシャの性向はあの兄とは似て居ない、彼女は靜かで、溫和やかで、犧牲の精神にも富んで居る、又彼女は目立つて敬度の念と、並々ならぬ謙遜と、理性の力と、特に感謝の情とを具へて居ると、左樣心に定めて居た。其時迄、ダーシャは何處から見ても彼女の期待を無理からぬものと思はせた。

『此子の一生に間違ひは有らせない』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは此娘がたんだ十二歳の時に言つた。何でも彼女を惹附けた夢想とか、新しい計畫とか、高尙だと感じさせた思想とか云ふものには、執拗く、又激しく打込

んで行くのが持前なので、彼女は直に自分の娘と同じ樣にダーシャを教育して遣らうと決心した。彼女は早速此娘のために或金額を積み立てゝ置いた。又、クリツグス孃といふ保姆をも招いて遣つた。其女は彼女が十六歳に成る迄衆皆と一緒に居たが、急に或理由で解雇された。それからいろんな先生が遣つて來た。中には眞正の佛蘭西人も居て、ダーシャに佛語を教へたが、其男は殆ど追出すやうにして解雇された。一人身柄の好い寡婦さんだといふ貧乏な女が、彼女に洋琴を教へた。が、主な家庭教師はステパーン・トラフィモーギチで有つた。實際、彼が最初にダーシャを見出したのだ。彼はヴルヴーラ・ペトローヴナが彼女のことを考へ始めない間から、此の物靜かな女の子を教へて居た。繰返して言ふ、子供達が彼を好くのは殆ど不思議だと云つても可い。リザベータ・ニコラエヴナ・ツージンも八歳から十一歳まで彼の教へを受けた。勿論彼はそんなお稽古をして遣つても、別に報酬といふものを取らなかつた。が、彼は此の可愛らしい子を戀するやうに成つた。そして、天地の創造や、地球や、人類の歷史に就いて、一種の詩を彼女に話して遣りく〳〵した。原始時代の人類に關する彼の講義は『千一夜物語』よりも面白かつた。こんな話を聞いて有頂天に成つたリザは、好く自宅でステパーン・トラフィモーギチの可笑しな身振をして見せた。彼はそれを聞いて、或時知れないやうに窃と彼女の樣子を際見して居た。リザは面喰つて、彼の腕に飛び附いたまゝ涙を流した。ステパーン・トラフィモーギチも亦嬉し泣きに泣いた。が、リザは間もなく往つて仕舞つた。そして、ダーシャだけが後に殘つた。ダーシャが他の先生に就くやうに成ると、ステパーン・トラフィモーギチは自分の稽古を止めて、だんく〳〵彼女のことを氣に懸けなく成つた。こんな狀態で永い間續いた。が、彼女が十七に成つた時、彼は突然彼女の美に打たれた。それはヴルヴーラ・ペトローヴナの食卓で起つたのだ。彼はダーシャに話を仕掛けたが、其返辭が氣に入つたと云ふので、到頭露西亞文學史に就いて眞面目に講義をして遣らうと言出した。ヴルヴーラ・ペトローヴナも贊成して、大いに其の卓越した想ひ附を讃めた。ダーシャも喜んだ。ステパーン・トラフィモーギチは特に其講義のために準備に取懸つた。で、到頭遣出した。それも極舊い時代から始めた。最初の講義は面白をかしく濟んだ。ヴルヴーラ・ペトローヴナも其場に居合せた。ステパーン・トラフィモーギチがいよく〳〵講義を終つて、次の時間には『公子イゴールの遠征物語』に就いて話をする積りだと生徒に告げた時、ヴルヴーラ・ペトローヴナは不意に立上つて、此講義はこれで中止すると宣言した。ステパーン・トラフィモーギチはどきりとした。が、何とも言はなかつた。ダーシャは眞靑に成つた。兎に角、其計畫はそれ限りに成つた。これはヴルヴーラ・ペトローヴナが今度思ひも寄らない緣組を想ひ着いた三年前のことで有つた。

あはれなステパーン・トラフィモーギチはそんな事とは夢にも知らず、只一人坐つて居た。例の物悲しげな思想に耽りながら、誰か友達が訪ねて來はせぬかと、長い間窓の外を眺めて居た。が、誰も來さうになかつた。戸外はしと〳〵と雨が降つて居た。だん〳〵寒く成つて來るので、煖爐を焚かせたいやうな氣がした。彼は溜息を吐いた。不圖怖ろしい幻影が彼の眼を掠めた。ヴルヴーラ・ペトローヴナがこんな天氣に、こんな思ひも懸けぬ時に遣つて來るなんて！　而も徒歩で！　彼は仰天して上衣を引被けることさへ忘れた。そして、赤い綿入の寢間着を着たまゝ出迎へた。

『Ma bonne amie,（あゝ被入しやい！）』と、彼はまご〳〵しながら低聲で叫んだ。

『貴方お一人ですか。恰度宜う御座んす。貴方のお友達には我慢が出來ませんからね。まア何て烟草の煙でせう！　それに未だ朝のお茶も濟まないんですね。最う彼此十二時ですよ、だらしのない。これが貴方の無上の祝福なのね。塵埃の中に樂しみを求めて被坐しやる。床の紙片は何ですか。ナスターシャ、ナスターシャ！　一體ナスターシ

ヤは如何したんです？窓をお明けなさいな。窓の扉も、入口も何も彼も明放してお仕舞ひなさい。で、應接間へ行きませうよ。大切の事で來たんですよ。あゝ、お前は一生に一度しか掃除をしないんだね。』

『本當にあの人達は臺なしに穢すんだよ』と、ナスターシャは腹立しげに泣聲を出した。

『あゝ、好く掃くんだよ。一日に十五偏でも可いから掃くんだよ。まア見すぼらしい客間ね』と、二人が其室へ這入つた時、ヴルヴーラ・ペトローヴナは言つた。『扉を好く閉めて下さい。あの女が聞いてるかも知れませんからね。何うもこれは貼り代へなきや駄目ですね。私は模樣のついた壁紙を寄越しませんでしたか、何故あれを撰らないんです？まア坐つてお聽きなさい。何卒坐つて下さいよ。え、何處へ行くんです？何處へ行くんですよ？』

『今直き行きます』と、ステパーン・トラフィモーギーチは次の間から叫んだ。『さ、參りました。』

『あゝ、上衣を取代へて被坐したのね』と、彼女は調戯ふやうに右視左視した。『えゝ、其方が私達の問題に相當して居ますよ。さ、坐つて下さい、お願ひですから。』

彼女は唐突に、而も否應言はさぬやうに、一度に何も彼も話した。彼が焦眉の急に迫つて居る八千留布の金子に就いても暗示した、持參金に就いても詳細に話した。ステパーン・トラフィモーギーチは眼をぱちくりさせながらぶる〳〵顫えて居た。終ひ迄聞くには聞いたが、未だはツきりそれが呑み込めなかつた。何か口を利かうとしても聲が咽喉に痞へて出ない。只彼に解つて居たのは、何事も彼女の言ふ通りにする外ない、抵抗したり拒絶したりするのは此場合無用だ、彼は最早斷々乎として結婚した男であるといふ一事で有つた。

『Mais, ma bonne amie！（だが貴方）……これで三度目ですよ……此の年齢に成つて……あんな子供に』と、彼は漸つと言出した。『Mais, c'est une enfant！（だが、あれはほんの子供ですよ。）』

『二十歳に成る子供ですツて、まア可厭だ。何卒そんなに眼を剝かないで下さい。此處は舞臺ぢやア有りませんよ。えゝ、貴方は悧巧で學問の有る方でせうが、人生に就いては何にも御存じないのですからね。毎も貴方には世話をして貰ふ乳母が入用なんですよ。私が死んだら、貴方は如何成りますか。彼女は貴方に持つて來いの乳母ですよ。謙遜で、確乎して居る、道理も解つて居ます。それに私は此處に居ますよ、私も直には死にませんよ。彼女は誂へ向きの世話女房で、天使のやうに溫順しい子ですよ。こんな旨い考へは瑞西で附きました。えゝ、私の言ふことが解つてますかい』と、彼女は不意にむら〳〵として來たやうに叫喚いた。『こんな汚ない家でも、彼女が來れば清潔と整頓して呉れますよ。何も彼も鏡の樣に光り出しますよ。えゝ、如何したんですツて？貴方は私がこんな好い話を持込んで來ながら、一々効能を擧げて、へえつく匐つてお願ひすると思つてるんですか。まア貴方がへえつく匐ふ筈ですよ。隨分腹のない、意氣地なしだわね。』

『併し……私は老人ですよ。』

『年齢が五十三なら如何したと言ふんです？五十は人生の半ばですよ、終局ぢや有りませんよ。貴方は綺麗な男ですもの、御自分でも知つて被坐しやるでせう。又彼女が貴方を何んなに尊敬してるかと云ふことは、貴方も御存じの筈です。私が死んだら彼女は如何成るでせう？が、貴方の許へ嫁附けて置けば、彼女も安心でせう。私も安心します。貴方は名の知れた立派な方で、優しい心も持つて被坐しやる。又年金も有る。私はそれを自分の負擔だと思つてるんですよ。貴方は彼女を救つてお遣んなさるのですよ。少くとも、彼女に榮譽を與へて遣るんぢや有りませんか。貴方は彼女の一生を形造つて遣るんですよ、彼女の心情を啓發して遣るんですよ、彼女の思想を導いて遣

るんですよ。其間には貴方の著作も出て、世間でわい〳〵貴方のことを言ふやうに成るんでせう。』

『私も實はね』と、彼は直にヴルヴーラ・ペトローヴナの口車に乘せられながら呟いた。『私も其の「西班牙の歷史物語」といふ述作に取懸らうと思つて居た處なんですよ。』

『それ御覽なさい。其處を言つてるんですよ。』

『ですが……彼女は？　最う彼女に仰有つたのですか。』

『彼女のことで氣を揉まなくとも可いんですよ。何もそんなに聞きたがる必要は有りません。勿論、御自分で彼女にお頼みに成らなきや不可せんがね。好う御座んすか。併し心配することは有りませんよ。私が此處に居るんですからね。それに貴方は彼女を愛して被坐しやるんでせう。』

ステパーン・トラフィモーギチは眼が眩みさうな氣かした。壁がぐる〳〵廻り出した。此處に一つ何うしても辛抱し切れないやうな怖ろしい考へが有つた。

『Excellente amie（ねえ貴方）』と、彼の聲は急に顫え出した。『私は貴方が他の……女に私を與れて遣らうなぞと決心されようとは、是迄夢にも思はなかつたのですがね。』

『貴方は女の子ぢや有りませんよ。他人に與れて遣るなぞと云ふのは、そりやア女の子のことですよ。貴方は嫁をお取りに成るんぢや有りませんか』と、ヴルヴーラ・ペトローヴナは忌々し相に口を尖らした。

『Oui, j'ai pris un mot pour un autre. Mais c'est égal.（ええ、私は言葉の意味を取り違へた。が、そりやア何方でも同じ事だ）』と、彼は絶望したやうに相手を見詰めた。

『私にも c'est égal（それが同じ事だ）と云ふことは解つてるんですよ』と、彼女は齒を咬ひ縛りながら蔑視むやうに呟いた。『え、如何したんです！　こりやア氣絶するのだ。ナスターシャや、ナスターシャや、水を持つて來るんだよ。』

が、水を持つて來る迄もなく、彼は正氣に還つた。ヴルヴーラ・ペトローヴナは蝙蝠傘を取上げた。

『最うお話しても無駄の樣ですね。』

『Oui, oui, je suis incapable（ええ、迚も今は）……』

『が、明日迄休んで被坐しやれば癒るでせうよ。自宅に被坐しやいな。何か起つたら知らして下さい、夜間でも可う御座んすからね。手紙を寄越しちや不可ません、私は讀まないんですよ。明日の今頃又一人で返辭を聞きに來ますからね。滿足な御返辭が何へるだらうと思つてますよ。何人も此處へ寄せないやうにね、又汚なくしないやうに願ひますよ。此處は他人樣を案內されるやうな所ぢや有りませんからね。ナスターシャ・ナスターシャ！』

整日、勿論彼は承知した。實際、他に如何爲ようもなかつた。が、其處には又特殊の理由が有つた。

二　八

ステパーン・トラフィモーギチの所有地と云ふのは、昔の勘定で云へば五十人位（奴隸の數）の廣さで有つたが、これは元來彼の所有ではない、彼が最初の細君の所有で、從つて今は彼の息子のピョートル・ステパーノヴィチ・ヴェルホーエンスキイに屬して居た。ステパーン・トラフィモーギチは只其の保管人に過ぎないので、年々一千留布宛きちんと子供の方へ送つて居た。と云ふのは、ヴルヴーラ・ペトローヴナがそれだけの金額を送つて居たので、彼には一留布と雖も自由に爲せなかつた。が、一方に於て、彼は其土地から上る收入を——實際は五百留

布位しかなかつたが――悉皆自分の懷中へ入れた。加之、彼は一番好い所を善くない商賈に貸出したり、ヴルヴーラ・ペトロトヴナの知らぬ間に、其土地の主な値打に成つて居る立樹を賣つたりして、すツかり土地を臺なしにして仕舞つた。彼は久しい以前からちびり〳〵立樹を賣出した。それは少くとも八千留布位の値打は有つたが、彼は五千留布で賣拂つて仕舞つた。時々倶樂部で大きな金子を取られて、それをヴルヴーラ・ペトロトヴナの耳に入れまいとするから、そんな事に成つたのだ。が、後でそれと知れた時には、彼女は齒を咬ひ縛つて口惜しがつた。處で、今度彼の息子が、不意に、幾許でも可いから其土地を賣りたいと言出した。で、いづれ自分も後から行くが、至急賣却の手續きが取つて貰ひたいと父親に依頼して來た。ステパーン・トラフィモトギーチは固より上品な人だから、此際息子に對して――今迄其爲に一度も心を勞したことのない息子に對して、急に良心の疚しさを感じたのは爭はれない。元來其土地は一萬三千か四千留布の價値は有つたのだが、今では只の五千留布でも出し手が有るか如何か怪しかつた。ステパーン・トラフィモーギーチは云ふ迄もなく保管人の條件として立樹を賣つても差支へないのだ。又年々送つて遣つた千留布といふ莫大な收入を勘定に入れても、自分の處置に對する辯解は幾許でも立つ譯だ。が、ステパーン・トラフィモーギーチは前にも言ふ通り上品な人だから、心の中に早くも一寸人の想ひ着かぬやうな空想を描き出した。それはペトルーシャが歸つて來たら、今迄送つた金高に就いては何にも言はないで、一萬五千留布といふ最高の金額を彼の前に並べて、暖かに、涙を以て息子を抱擁しながら、二人の間の勘定を總て打切らうと云ふのだ。彼はヴルヴーラ・ペトロヴナの前に用心深く遠廻しに此空想をひろげて見せた。これが二人の間の友情に、二人の『理想』に格段の氣高い調子を添へるだらうとも仄めかした。左樣すれば、前代の兩親といふものが、又一般に前代の人々が、彼の新しい輕佻な社會主義染みた現代の青年に較べて、如何に利に淡く心の寬いもので有るかを思ひ知らせて遣ることにも成るのだと言つた。彼は更にいろ〳〵な事を言つた。が、ヴルヴーラ・ペトローヴナは頑として默つて居た。最後に彼女は自分が其土地を買ふ積りだ、當前なら四千留布も出せば買へるんだけれど、最高値段の六七千留布も出しませうと、何の卒氣もなく告げた。立樹と共に消え去つた八千留布に就いては、何とも言はなかつた。

此會話は緣談が持上つた一箇月程前に有つた。ステパーン・トラフィモーギーチは顚倒して思案に暮れた。從來の例から云へば、そんな事を言つても息子は終に遣つて來ないかも知れない。他人には左樣も思はれた。が、ステパーン・トラフィモーギーチは父としてそんな希望を繫ぐことを飽迄排斥した。兎に角、ペトルーシャに就いては是迄いろんな噂が傳はつて居た。第一に、彼は六年前に大學を卒業してからも、仕事が見附からないで、彼得斯堡にぶら〳〵して居た。と、不意に、彼は匿名の檄文を出すことに與つて、自分も其事件に連累に成つたといふ報道が傳はつた。それから彼は外國へ飛び出して、瑞西のゼネヴに現はれた。想ふに、彼は旨く遁れたものらしい。

『驚いたね』と、ステパーン・トラフィモーギーチは酷く狼狽しながら言出した。『ペトルーシャ、c'est une si pauvre tête!（あれは本當に馬鹿なんですよ。）あれは心の氣高い、悧巧な、物の判つた奴でした。僕も彼得斯堡で會つた時は、今日の青年と比較して大きに滿足したもんですがね。併し c'est un pauvre sire, tout de même.（ありやア如何したつて馬鹿殿樣ですよ。）君も知つてる通り、矢張生煑えと感傷主義から來るんだからね。彼等は社會主義の現實的なところよりも、寧ろ感情的な理想的方面に魅せられて居るんだよ。宗教なんだよ。詩なんだよ……勿論他人の古物なんだがね。で、そんな事をして呉れて、僕は一體如何成るんだい！僕は此處にも多くの敵が有れば、彼處には猶更多くの敵が有るんだからね。皆それを親爺の影響にして仕舞ふだらうよ。あゝあ！ペトルーシャが革命家に

成る！誰がそんな事を豫想出來るものかね。』

が、間もなく、ペトルーシャは瑞西から確かな名宛を報じて、毎もの樣に金子を送つて呉れと言つて來た。して見ると　本當に追放されたものではないらしい。それに今度は四年間の漂泊の後、急に本國へ歸る積りに成つて、間もなく到着すると言つて來た。して見ると、別段彼に對して嫌疑も懸つて居ないらしい。加ふるに、何人か彼を最貧にして保護する者が有るらしいのだ。彼は今南露西亞から手紙を寄越した。其處で彼は私事では有るが、或重要な事件に關はつて居るらしかつた。萬事が上々吉で有つた。只、彼の父親は其土地に對する相當の價格を埋めるために、最う七八千留布の金子を何處で調達したものか。若し自分の空想して居たやうな光景の代りに、親子の間に訴訟でも起つたら如何しよう？別にこれと言つて取留めた事はないが、何うも彼の息子は些少の利益でも打捨つて置かない人間のやうな氣がして居た。『僕は何うも左樣思ふね』と、ステパーン・トラフィモーギーチは皆て私に囁いた。『何うもひどい社會主義者といふものは、同時に個人としては極めて鄙吝なものだよ。實際、社會主義が一層極端で有れば有る程、一層慾が深いと言つても可い位だよ。如何したんだらう？これも矢張感傷主義から來るのかね。』私はステパーン・トラフィモーギーチの言葉が眞理で有るか如何かを知らない。只私はペトルーシャが何處からか立樹の賣却其他に就いて聞き込んで居る。それを又父親の方でも承知して居ると云ふだけのことを知つて居た。私は又ペトルーシャから父に宛てた手紙を讀んだことが有る。彼は極めて稀有に、一年に一度か、或は最つと稀有にしか手紙を書かなかつた。只最近には差迫つた訪問のことを知らせるために追ひ掛け〳〵二本寄越した。彼の手紙は皆短かく、卒氣なく、只指圖ばかりで出來上つて居た。それに此の父子は彼得斯堡で會つて以來、互に『お前、お前』と云ふやうな碎けた言葉を使ひ出したので、ペトルーシャの手紙は昔風の地主が其土地の監督を任せて置く

奴隷の許へ町から寄越し〳〵する通信に著しく似通つて居た。で、今や此の紛糾を解決する八千留布の金子がヴルヴーラ・ペトローヴナの提議に依つて彼の手に入ることに成つた。と、同時に彼女は、他からは如何しても這入り樣がないことをはツきりと彼に意識させた。勿論、ステパーン・トラフィモーギーチは承諾した。

彼は彼女が去ると直に、私の許へ使を寄越した。私が往つた時には、大分昂奮して居た。例に依つて涙を流しながら、いろんな事を饒舌つた。絕えず自家撞着を敢てした。又時には古臭い洒落を交ぜて、一人で面白がつた。それから彼は輕微な『夏の虎列刺』に襲はれた——何も彼も型の通りに進行した。それから彼は二十年前に死んだ獨逸生れの細君の寫眞を取出して來て、物哀れに『私を宥して呉れるか』と口說き出した。實際、彼は幾許か心を取亂して居たらしい。其後で吾々は一緒に少許り酒を飲んだ。彼は直きにすや〳〵と寢附いた。

次の朝、彼は洒落た風に襟飾を結んで、丁寧にフロックコートを着けた。そして、何度も鏡の前に立つて見た。それから半巾に香水を撒り掛けた。が、窓からヴルヴーラ・ペトローヴナの姿を見るや否や、遽てゝ枕の下に押隱して、他の半巾を取出した。

で、彼の承諾を得た時、ヴルヴーラ・ペトローヴナは『上等！』と賞讃した。『貴方も到頭理性の聲を聽くやうに成りましたね。是迄貴方は一身上の事だと、却々それに耳を假しませんでしたからね。でも、急ぐことはないんですよ』と、彼女は相手の白い頸帶の結び目に目を着けながら附け足した。『直きに貴方の誕生日が來ますね。私はあの娘を連れて來ますよ。其晩にお茶を出して下さいね。でも、お酒や他の飮料は止めにしませうね。えゝ、それは私が用意しますよ。それからお友達も招待なさい。ですが、其の撰擇は二人でしませうよ。で、必要が有るなら、其前日に彼女とお話しなさい。でも、其席ではツきり披露しますまいね。只一寸仄めかして置くだけにしませう

よ。それから結婚式は二週間後にね、それも別に大騒ぎをしない範圍でね……結婚が濟んだら、二人で何處かへ被往しても可いんですよ。例へば莫斯科へでもね。大抵私も一緒に參りませうよ。一番肝心なことは、それ迄内密にして置くんですよ。』

ステパーン・トラフィモーギーチは只惘れた。そんな事は迚も出來ない、花嫁とも好く話をして見なければと、口籠りながら言つて見た。が、ヴルヴーラ・ペトローヴナは直にむら〳〵として喰つて懸つた。

『何のために？第一そんな事をしたら皆駄目に成るんだから、心配しなくとも宜う御座んすよ。私が自分で彼女に言ひ含めて置きます。貴方が言はなくとも可いんですよ。何だつて必要な事は私から言つて置きますから、貴方が口を出す必要はないんですよ。何故？何んな事を？貴方は來ても不可ないし、手紙も書いちや不可ません。何卒姿も聲も聞かせないやうにして下さい。私も默つて居ますからね。』

彼女は絶對に理由を說明することを拒んだ。そして、見るから氣も顚倒したやうに、あたふたと出て行つた。ステパーン・トラフィモーギーチの氣乘りをし過ぎて居るのが、彼女の心持を損ねたものらしい。あはれや、彼は全く自分の立場を摑むことが出來なかつた。未だ他の觀察點から此問題を眺めて見るだけの氣は附かないのだ。それ處か、一種の勝ち誇つたやうな意氣揚々たる調子が、彼の容子に現れて來た。彼は反り返つた。

『いや、其方が結構だ』と、彼は私の前に突立つて、大手を振りながら叫んだ。『聞いたかね。あの女は結局此方で斷らせるやうに仕向けるんだよ。僕だつて最う我慢がし切れないよ……實際又斷りたいのだからね。』其處に靜

乎として被坐しやい、彼女の許へ被往しやる必要は有りません』だとさ……要するに、僕は如何して結婚しなけりや成らんのだい？只あの女がそんな奇的烈な思案を想ひ着いたからぢやないか。だが、僕も眞面目な人間だ、女の輕卒な氣紛れに服從する義務はないんだ！僕は自分の子に對して義務が有る……又自分自身に對しても！僕は犧牲を拂つて居るんだ。あの女にそれが解つて居るかね。僕は想ふに此人生に倦いて、そんな事は如何でも可いと思つたから承知したんだらうよ。が、先方で僕を憤らせるやうな事をすりや、最う如何でも好くはない。僕は斷つて遣るよ。Il est fini, le ridicule.（結局、物笑ひだね。）倶樂部ぢや何と言ふだらう？あのリーブティンの野郎が……何と、何と言ふだらう？『皆駄目に成つて仕舞ひますよ』だつて——何と云ふ言草だね。それで何も彼も解つてるよ。實際……そんな事を言はれて、何と返辭したら可いものかね。Je suis un forçat, un Badinguet（あゝ、僕は囚人だよ、脫獄人だよ、）進退谷まつた人間だよ……』

が、同時に、何處か浮々して、剽げた、氣紛れな喜色が、こんな愚痴つぽい繰言の間にも仄見えた。晩には、吾は又大いに飮んだ。

第三章　他人の罪惡

一

一週間ばかり經つと、形勢が更に入組んで來た。

序ながら、私も一番打解けた仲の善い友達として、殆ど彼の傍を離れなかつたから、隨分不愉快な一週間を送つた。一番彼の心を苦しめたものは羞恥の感で有つたらしい。尤も、二人は室内に閉籠つたまゝ、何人にも會はなかつた。が、彼は私に迄恥入つて居た。私に深く打明ければ打明けるだけ一層私に對しても面伏せに感ずるらしい。最う町中で何人でも知つてるやうに取越し苦勞をして、倶樂部どころか、友達の仲間へも顔を出すのを恐れて居た。例の攝生のための散歩にも、全く日が暮れて其邊が暗く成らぬ間は、何んな事が有つても出掛けなかつた。

一週間經つた。が、彼は未だ本當に結婚するのだか如何だか知らなかつた。隨分手を盡しても實際の事は判らなかつた。未だ未來の花嫁の顔も見なければ、彼女が自分の嫁に成るのか如何かも知らない。實際、これが眞面目な話か如何かも知らないのだ。ヴルヴーラ・ペトローヴナは何かの理由で全然彼に面會を斷つて仕舞つた。最初遣つた手紙の一つに返事をして――彼は勿論非常に多くの手紙を送つた――今は忙しいから、暫くの間凡ての通信を控へて貰ひたいと明らさまに言つて來た。なほ貴方にはお話したい大切な事が山の緣に有るから、最少し暇な時を待つて居る。いづれ其時が來れば、何時お目に懸れるか知らせると有つた。そして、貴方の手紙は何うせ身勝手な愚痴に過ぎないから、封の儘お返しすると言つて來た。私は其手紙を自分で讀んだ――讀まなけりや、彼が承知しないのだ。

が、こんな情なさも、事情がはツきりせぬのも、彼の主なる心勞と較べては何でもなかつた。其心勞は絶間なく極端に彼を惱ました。彼はそれが爲に痩せて元氣がなく成つた。何んな事よりも一番多くそれを恥ぢて、私にさへ言ふことを敢てしなかつた。それ處か、彼は時々嘘を言つた。子供のやうに、私の前で胡麻化した。それで居ながら、毎日の樣に私の許へ使を寄越した。空氣か水のやうに、一時間と雖も私なしには居られないらしい。が、徃つて見ると――何にも言はない。

こんな態度は寧ろ私の自尊心を傷けた。云ふ迄もなく、私はずつと前から内々彼の其の大きな祕密を推量して居た。何も彼も見拔いて居た。が、一方では、そんな祕密を打明けた處で、格別彼の名譽に成る譯でもないといふ考へが有る處へ、かう云ふ奏え切らない態度に出られると、私も未だ若かつたから、彼の感情の粗大と狐疑の見苦しさとに、むら〳〵と腹を立つた。熱心の餘り――尤も、私が彼の信任者で有ることに勞れたと云ふことも白狀しなければ成らぬが――隨分彼を面責した。世には白狀し難いことも有るものだと知つて居ながら、彼の口からそれを白狀するやうに迫つたことさへ有つた。彼も亦私を見拔いて居た。と云ふのは、私が彼を見拔いて、彼に對して慣つて居ると云ふことを明らかに認めて居た。そして、私が彼に對して慣つて居ると云ふので、又私に對して慣つて居た。想ふに、私が苛々するのは詰らない馬鹿な話かも知れない。が、二人の友達が匆も一緒にばかり居ると云ふのは、眞の友情に取つて、時として害にしか成らないものだ。で、二人の談話は又一般的な、別段祕す必要のない事ばかり繰返されるやうに成つた。

『あゝ、あの時分はあの女も丸で違つて居たよ』と、彼は時としてヴルヴーラ・ペトローヴナのことを斯んな風に

言出した。『昔、僕等が一緒に話を仕合つた頃は、彼樣ぢやなかつたよ。其時分はあの女も話が出來た。えゝ君、其時分はあの女も思想を有つて居たよ、獨創の思想を！今は萬事が變つて仕舞つた。あの女の言ふことは皆古臭いお饒舌ばかりだ。あの女は過去を輕蔑するがね……今のあの女は宛然商賣屋のお主婦さんか出納掛りの樣ぢやないか。あの女も心が荒んで來てね、每も不機嫌だよ。』

『今の樣にあの方の言ふ通りに成つて被坐して、如何して不機嫌ですかい』と、私は答へた。

彼は妙に微笑を漏しながら私を見返した。

『ねえ君、僕が言ふことを諾かなかつたら、何の位機嫌を損ねるか分らないよ。そりやア怖しいものだね。まア言ふ通りに成つてるから、あの位で納まつてるがね。』

彼はこんな事を言つて喜んで居た。其晩又二人で一瓶明けた。が、それは只一時のことで、次の日は前よりも一層陰氣に成つた。

併し私が彼に一番困つたのは、ドロズドフ家の人達が着いた時、昔の昵懇を新にするために、是非ともしなければならぬ訪問を何うしても彼が爲ようとしないことで有つた。聞けば、先方でも彼の噂をして、それを望んで居るらしいのに、矢張行く氣に成れない。それが又每日彼の心を苦しめた。彼はリザベータ・ニコラーエヴナのことを夢中に成つて話した。私には薩張譯が解らなかつた。尤も、彼は彼女の中に嘗て自分が愛して居た子供を想出したには違ひない。が、其外に、彼は或知られない理由の下に、彼女と會つて話をすれば、卽座に自分の現在の不遇に對する慰安を見出せる、いや、最つと重大な疑惑に對する解決をも與へられるものと想像して居た。彼はリザベータ・ニコラーエヴナを素晴しい人物でも有るかの樣に期待して居た。而も彼は每日々々彼女に會ひに行かうと思ひながら、未だ會ひに行かなかつた。殊に具合の惡いのは、私が無性に彼女の許へ行きたかつた、彼女と知合に成りたかつた、而もそれがステパーン・トラフィモーギーチに據らなければ、如何することも出來ないので有つた。私は每朝通りがよりに、彼女が乘馬衣を着て駿馬に跨りながら、故ドロズドフ大將の甥で彼女の從弟だといふ美しい士官と一緒に遣つて來るのを見掛けた。此の邂逅が私に何時になく深い印象を與へたものだ。尤も、私の耽溺は長く續かなかつた。間もなく自分で自分の夢の不可能を認めたけれども、一時は本當に思ひ込んだのだから、私があはれな友達の齒痒い程愚圖々々して居るのに對して、何んなに辛く當つたかは大抵想像されよう。

私達の仲間の者は、ステパーン・トラフィモーギーチが此處暫らく何人にもお目に懸れない、何卒訪ねて來ないやうにして呉れと、最初から皆斷られて居た。私はそんな事しない方が可からうと勸めたけれど、彼は强て私に左樣言つて廻つて來て呉れと言ひ張つた。仕方がないから、私は一軒々々廻つて、ヴルヴーラ・ペトローヴナが『吾吾の老人』に——私達の仲間ではステパーン・トラフィモーギーチのことを斯う言ひ慣はせて居た——數年間往復した信書を整理するやうに吩咐けた。彼は今一室に閉籠つて其仕事にかゝつて居る、私もそれを手傳つて居るのだと觸れて歩いた。リープティンの許だけは未だ行く暇がなかつた。私はだん〳〵後へ延ばして居た——正直を言ふと、私は彼の詩へ行くのを怖れて居た。彼は私の言葉を一言も信じまい。其底には何か祕密が有る、それを自分一人に隱して居るんだと屹度想像するに違ひない。で、私が歸るや否や、直に探索に懸つて町中觸れ廻すことは、初めからちやんと判つて居るのだ。私が一人で斯んな事を想像しながら街の上を步いて居る時、ひよツこり彼に邂逅した。だん〳〵話合つて見ると、彼は私が前に話した友達から聞いて、最うすツかり承知して居た。が、不思議なことには、彼は例に依つてステパーン・トラフィモーギーチの事を根掘り葉掘り聞きたがるかと思ひの外、私が最

つと前に彼の許へ行かなかつたと云ふので辯解しに懸ると、彼はそれを遮つて、直に他の話題に移つた。實際、彼は私に話すことを澤山貯め込んで居た。彼は非常に昂奮して居た。聽手として私を捕まへたのが嬉しかつたのだ。彼はいろんな町の噂を始めた。新知事公の夫人に關しては、彼女が齎したといふ『新理想』に就いて語つた。又其の反對派が既に倶樂部で出來上つて、皆がわい〳〵騷いで居る、それが面白くて堪らないとも言つた。彼は物の十五分も饒舌り續けたが、私もつひ面白さに引摺られて聽いて居た。私は此男が可厭だつたけれど、話上手で相手を傾聽させるだけの手腕は認めて遣らなければ成らぬ。殊に何かを憤つて居る際に左樣だつた。私の考へでは、彼は生れ附いての探偵なのだ。何んな時でも、彼は町の最近の風聞や詰らない出來事を知つて居た、殊に不愉快な話を知つて居た。自分とは何の關係もない事を能くまア彼樣に氣を揉まれたものだと、私には只不思議に思はれた。彼の性格の主な特徴は嫉妬心で有るらしい。私が其朝リープティンに會つて、いろんな話をしたことをステパーン・トラフィモーギーチに告げた時、彼は此方で吃驚する程昂奮して、私に詰め寄せた。

『リープティンは知つて居るか、知らないか。』

私は幾許あの男でもそんなに早く嗅ぎ出せるものでない、又何人からもそれを聞き出す筈がないと、一々それを證據立てようとした。が、ステパーン・トラフィモーギーチは却々そんな事ぢや動かされなかつた。

『うむ、まア君は信ずるとも信じなくとも可いが』と、彼は不意に結論を下した。『あの男は僕等の話を委しい事まで聞いて知つて居るよ。そればかりぢやアない。何か其外に、何か未だ僕等の知らない事まで——何時迄經つても知らないか、それとも最う間に合はなく成つた時に、引回さうと思つても引回せなく成つた時に、漸つと知れるやうな事まで知つて居るんだよ。』

私は默つて居た。が、其言葉は多くのものを私に暗示した。それから全五日間と云ふもの、私どもはリープティンに就いて一言も言出さなかつた。ステパーン・トラフィモーギーチが私の前でそんな事を言出したのを後悔して居るのが、私には能く判つて居た。

二

ステパーン・トラフィモーギーチが婚約を承知してから七日目だか、八日目だかの朝十一時頃、私は毎もの通り心配げな友達の許へ急いで行かうとして、途中で偉い事を仕出かした。

私はリープティンの所謂『大文學者』のカルマーヂノフに出會つた。私は子供の時から此人の作物を讀んで居た。彼の作は前の時代に屬するもので有るが、一部分は現代の人にも知られて居た。私はそれに讀み耽つた、それが私の少年、青年時代を通じた大きな娯樂で有つた。其後彼の作物に對する私の熱心は稍減じて來た。彼が近頃書いて居るやうな或目的を有つた作には、詩の自然の流露に充ちた以前の作物程注意を拂はなく成つた。最近出版された物なぞは絶對に好まなかつた。一般に云ふと——私がそんな問題に意見を發表することを敢てするとすれば——それ等中位の才能を有つて生れた作家といふものは、一生の中には時として天才と迄持囃されることも有るが、一旦此世を去つた時は急に跡方もなく忘れ去られるものだ。いや、最つと酷いのは、生きて居る間に左樣成るのも有る。新しい時代が頭を擡げて、彼等の榮えた時代に取つて代るや否や、殆ど信じられない程短い期間に世の中から忘られて仕舞ふのだ。眞個、吾々の間には舞臺面の變化よりも速やかな新陳代謝が有る。勿論、これはブーシキンや、ゴーゴルや、モリエールやヴォルテーユと云ふやうな、本當に自家の云ふ言葉を有つた偉人に就いて言ふのではな

い。年齢尚若くして、通例自家の言葉を言ひ盡しながら、而も自分でそれを覺らないと云ふやうな、あはれな中流の才能を有つた作家に就いて言ふので有る。長い間深遠な思想を抱いて、一代の民心の上に嚴肅な影響を及ぼした やうに言ひ囃された作家が、一朝にして其の根本的思想の貧弱と無味とを曝露し、何人も然く迅速に彼が凋落した ことを傷まないやうに成つた例證は決して少くない。が、老大家はそれに氣が附かない、氣が附かないばかりでな く、大に憤つて居る。彼等の自尊心は、特に凋殘の域に近づくに及んで、殆ど驚嘆に値するものが有る。一體、彼 等は自分自身を何だと思つて居るので有らう！　カルマーヂノフに就いては、世間では彼が貴族社會又は勢力の有る 人々との關繋を彼自身の魂よりも大切に思つて居ると云ふやうな評判が有つた。又彼は人に會ふと叮嚀で、心情 を叶露して人を魅する、特に其人が彼に取つて何かの役に立つか、又は豫め推稱でもして置いて會ひに行つた場 合に於て左樣で有る。が、遇然其處へ公爵が伯爵夫人でなくとも彼の平生畏れて居るやうな人物が遣つて來ると、 彼は其人が視界の外へ遁れ去る暇さへ與へないで、木の端か蠅でも有るやうに、最も馬鹿にしたやうな態度で、其 人の存在を忘れるのを神聖な義務とでも心得て居るらしいと云ふやうな評判も有つた。彼は眞面目にそれを最も優 れた、貴族的な時樣だと考へて居た。噂に據れば、彼は育ちも好く作法も十分に心得て居ながら、文學といふもの に一番興味を有たない交際社會に在つてさへ、作家としての虛榮心を隱し切れない程苛々して居るといふことで有 る。誰でも彼の前に知らぬ顏して彼を驚かさうものなら、彼は狂人の樣に憤惱して、必ず復讐せずには置かない。

一年前に、私は或雜誌で衒氣たツぷりな詩想と心理とを加味して書かれた彼の作品を讀んだ。彼は英吉利の海岸で破船した汽船のことを叙して居た。目の當り其の難破船を見たと云ふので、溺れかけた人々の救はれる樣子や、死體の海岸へ打上げられる有樣を細かに書いたものだ。が、此の長たらしい贅言の多い叙事は、單に自己を見せび らかすために書かれたものらしい。行と行との間に、こんな事が書いて有るやうに見えた。『私の上に注意を寒中せよ。そんな場合に私が如何して居たかを見よ。海や、暴風雨や、巖や、破船の裂片がお前方に何で有らう？　私は力ある筆で十分にそれを描寫して置いた。何故そんな死んだ腕に死んだ兒を抱へて居る溺死した女なぞを見て居るのか。それよりも私を見るが可い。私がそんな光景を見るに堪へないで、面を背向けた樣子を見るが可い。私は此處に其光景に背を向けて立つて居る。餘りの怖ろしさに何うしても振返つて見る氣に成れないのだ。私は眼を屢瞬いた——それは面白いぢやないか。』私がステパーン・トラフィモーギーチにカルマーヂノフの短文に對する意見を述べた時、彼は全然私の說に同意した。

最近カルマーヂノフが此の近隣へ來るといふ風說が傳はつた時、私は無論熱心に彼を見たいと思つた、出來るこ となら彼と知己に成りたいとも思つた。私はステパーン・トラフィモーギーチを通じて、それが出來るものと考へ て居た。二人は嘗て友達で有つたからで有る。處が、今不意に四ツ角で彼と邂逅した。私は直に彼だなと思つた。 二三日前彼が知事の夫人と一緒に馬車を驅つて居た時、誰かど私に教へて呉れたのだ。彼は身丈の低い、巖疊らしい老人で——五十五歲を超えては居なかつたが——何方かと云へば小さな赫ら顏と、絹帽子の下からはみ出して、小さな赤い耳の周りに纏り着いた灰色の濃い捲毛とを有つて居た。彼の垢脫けのした小さな顏は、薄く長い陰險さうな唇や、稍肉の厚い鼻や、慧敏さうな眼を加へても、決して美しいものではなかつた。彼は恰度此の季節に北伊太利や瑞西で着られるやうな一種の覆肩を何だか穢苦し相に着て居た。が、兎に角飾扣鈕とか、襟飾とか、細い黒絹紐の着いた鼈甲の眼鏡とか、刻印つきの指環とか云ふやうな、細かな裝飾の上では、極々點の打ち處のない服裝をした人達の着けて居るやうなものを着けて居た。あれでは屹度夏に成ると、傍に眞珠貝の扣鈕を着けた輕いブ

ルーチラ皮の短靴を穿くに違ひない。私が出逢つた時、彼は町の角に立つて、ぢろ〳〵自分の周圍を眺めて居た。私が興味ありげにそれを見て居るのに氣が附くと、彼は金切聲では有るが、甘ツたるい調子で私に問ひ掛けた。

『一寸伺ひますが、ビーコフ街への近道は何方でせうか。』

『ビーコフ街ですか。あゝ、此方です、直ぐ其處です』と、私は非常に昂奮しながら叫んだ。『此の通りを眞直に、二つ目の角を左にお曲りなさい。』

『いや、有難う。』

ちよツ忌々しい！私は何うも極りが悪くて萎縮んで仕舞つたらしい。彼は直にそれを見て取つた、何も彼も見て取つたのだ。卽ち私が彼の何人であるかを知つて居る、私が彼の作物を讀んで居る、子供の時から彼を尊敬して居る、それで私が極りを惡がつて、畏縮りながら彼を見て居たんだと云ふことを見て取つたのだ。彼は莞爾した、再び點頭いた、そして私の指圖した方角へ歩いて行つた。私は如何して彼に隨いて行く氣に成つたか知らない。一體如何して彼と並んで十歩も駈出したのか、自分でも解らない。彼は急に又立停つた。

『えゝ、一番近い馬車の立場は何處ですか。最一度教へて下さいませんか』と、彼は又大聲を出して喚んだ。

それは怖ろしい聲であつた！怖ろしい聲！

『馬車の立場ですか。一番近い立場は……本山の傍です、彼處には每も馬車が居ますよ。』かう言つて、私は殆ど馬車を喚びに駈出し相にした。それが又彼の私に待設けた處でも有つたらしい、勿論、直に私は自分を制して立停つた。が、彼は私の擧動に氣が附いて、同じやうな氣味の惡い微笑を漏しながら私を見守つて居た。其時私の一生忘れられないことが起つた。

彼は突然左の手に持つて居た小さな囊を落した。實際は囊ぢやなくて、まア小さな箱だつた、と云ふよりは、一種の蝦蟇口かも知れない。最つと適切に言ふと、小さな信玄袋だ。昔風な婦人持ちの信玄袋のやうだつた。が、實際は何だか能く判らなかつた。只、私が飛んでそれを拾ひにかゝつたことだけは能く知つて居る。

私が實際それを拾はなかつたことも確かな事實である。が、最初それを拾はうとしたには違ひない。私はそれを隱すことが出來なかつた。で、馬鹿のやうに眞赤に成つた。眼敏い彼は其樣子から演繹することの出來る總てを見て取つた。

『や、お構ひなく、私が拾ひますから』と、彼は愛相よく言つた。畢竟、私がいよ〳〵拾はない積りだなと見て取ると、彼は私の先廻りをするやうに、それを拾ひ上げて、最一度首を振つた。そして、私が呆然として見て居る間に行つて仕舞つた。これぢやア私が拾ひ上げて遣つたのも同じ事で有つた。五分間ばかりと云ふもの、私は未來永劫消えない恥を掻いたやうな氣がして居た。が、ステバーン・トラフィモーギチの許へ着くと、突然からゝと笑ひ出した。私には此の出會が莫伽に面白く思はれた。で、直樣ステバーン・トラフィモーギチに其話をして、其場の光景を仕方に迄して見せて、彼を悔しませて遣らうと決心した。

三

が、此日は彼の容子が餘まり變つて居たので、私も吃驚した。私が這入つて行くや否や、彼は突然私に攝みかゝつた。で、少許讓まつて、私の話を聽き出してからも、何やら取亂した容子で、最初の間は確に私の言葉が耳へ這入らなかつたらしい。が、カルマーヂノフの名を言出すと、彼は忽ち激怒を發した。

『あの男のことを言ふな。あの男の名を口にするな』と、彼は殆ど氣でも狂つたやうに叫んだ。『さ、これを御覽な！これを讀んで御覽な！』

彼は抽斗を開けて、一面に煙筆の走り書で蔽はれた三枚の紙片を卓子の上に置いた。三枚ともヴルヴーラ・ペトローヴナから來たもので有る。最初の手紙は一昨日の日附で、次のは昨日、最後のは其日一時間程前に來たものらしい。中味は極詰らないもので有つた。皆カルマーヂノフに關したことばかりで、ヴルヴーラ・ペトローヴナの浮誇な騷々しい不安と、彼が如何かして彼女を訪問することを忘れやしまいかと云ふ、彼女の恐怖を曝露して居た。此處に二日前の日附の最初の手紙を棄ける。

『あの人が今日貴方の許へ訪ねて來て臭れても、何卒私のことは一言も、これん許りも言つて下さいますな。私のことは話さないで下さい、私の名を言はないで下さい。——V・S・』

前の日の手紙は、

『今朝、あの人が貴方の許へ訪ねて來ても、お會ひに成らない方が一番見識が有ると思ひます。私は左樣考へて居ります。貴方は如何お考へか知りませんが——V・S・』

今日の最後の手紙は、

『貴方は屹度毎もの通り塵層と煙草の烟の中に包まれて被坐しやるでせうね。マーリャとフォームシュカを差上けます。半時間經たない間に、二人が貴方の周りを清洒させて臭れますよ。ですが、邪魔をしては不可ません。掃除が濟む迄は臺所へ行つて被坐しやい。ボカーラの絨毯と陶器の花瓶とを持たせて上げます。何日からかそれを差上けようと思つて居たのです。暫くの間ですが、又テニエーの畫も上げて置きます。花瓶は窓の中に置いて、テニエーはギヨェテの肖像の下に掛けてお置きなさい。彼處が一番目立ちます。朝の間は彼處が明るう御座いますからね。あの人が到頭遣つて來たら出來るだけ叮嚀に迎へて、一寸した話をするやうに爲さい、知的の問題をね。で、つひ此頃會つた人の樣に振舞つて被坐しやいね。私のことは一言も言はないでね。事に據ると、夕方一寸立寄りまです。——V・S・』

二伸、若し今日來なければ、あの人は到底來ませんよ。』

私は讀んだ。そして、こんな些細な事で、彼がこんなに昂奮して居るのに驚かされた。不審相に彼を見遣りながら、不圖、私が手紙を讀んでる間に、彼が毎も着けて居る白い頸飾を赤いのに取代へたのが眼に留つた。帽子と洋杖とは卓子の上に載せて有つた。彼は眞蒼な顏をして、手は明々と顫えて居た。

『僕は何もあの女の心配なんざ氣に掛けちや居ないさ』と、彼は私の不審さうな顏に答へて暴々しく叫んだ。『Il m'en fiche !（僕は最う知らない！）あの女はカルマーヂノフのために大騷ぎするだけの暇が有りながら、僕が何本手紙を出しても返辭をしないんだ。昨日あの女が封じた儘で返して寄越した手紙が此處に有るよ。卓子の上の本の下に、「L'Homme qui rit（笑ふ人、ユーゴーの小說）」の下に有るよ。あの女がニコラーイのことで寢せる程氣を揉んだとて、僕には何でもないんだ。Je m'en fiche, et je proclame ma liberté ! Au diable le Karmazinov ! Au diable la Lembke（僕は最う知らない、僕は僕の自由を宣言するよ。カルマーヂノフも糞も有るものか！）僕は花瓶を押入へ隱して仕舞つた、テニエーも抽斗の箱の中へ入れて仕舞つた。で、卽刻會ひに來いと言つて遣つたよ。えゝ、君！僕は主張して遣つたよ。今し方鉛筆で走り書した紙片を封もせずにナスターシャに持たせて遣つたよ。で、待つてる處だ。僕はロづからダーリャ・パブローヴナと話さなくちや成らない。神の面前でだ

よ。少くとも君の面前でだよ。Vous me seconderez, n'est-ce pas, comme ami et témoin.（君は僕の友人として、又目撃者として、僕の介添に成つて呉れるね。え、え、左様ぢやないか。）僕は顔を赧らめたくない、嘘を吐きたくない、祕密を持ちたくない、此事件ぢや眞個祕密を持ちたくないよ。彼女等も僕の前で何も彼も打明けて、明ら様に、正直に白状して見るが可い。左様すりや……左様すりや僕は、如何に僕が寛大で有るかを見せ附けて、一世を驚かして遣るよ。……僕は無頼漢かね。ねえ君、僕は無頼漢かね……』と、私が彼を無頼漢と思つてでも居るやうに怖ろしい眼をして私を睨み附けながら、急に口を噤んだ。

私は彼に一口水を飲ませた。私は是迄彼がこんな風に成つたのを見たことがない。彼は饒舌つて居る間、始終室の一隅から一隅へ走り續けて居た。が、突然物々しい態度で私の前に突立つた。

『君は左様思つてるのかい』と、彼はヒステリイ性の威張り様で以て、私を見上げ見下しながら再び遣出した。

『僕が、此のステパーン・ヴェルホーヱンスキイが、一旦名譽と獨立の精神がそれを要求する時、袋を――乞食の袋を此の弱い肩にして、門の外へ出て行つたまゝ、永久に消え失せるだけの道義の力を僕自身の中に見出し得ないと思ふのかい。ステパーン・ヴェルホーヱンスキイが道義の力に依つて、專制主義に反抗して立つたのは、何もこれが始めてぢやアない。縱しんばそれが狂氣染みた女の專制で有るにもせよ、此世に存在する最も殘酷な、侮辱的な專制ぢやないか。ねえ君、君が笑つて居る處を見ると、最う忘れて仕舞つたんだね。あゝ、君は僕が商人の家の家庭教師をしてでも一生を終るだけの、又は溝の中で餓死するだけの道義の力さへ有つて居るとは信じないんだね。返辭をし玉へ。直に返辭をし玉へ。君はそれを信ずるか、それとも信じないのか。』

併し私はわざと默つて居た。左様だとも言へないし、左様でないと言つて、彼の心を傷つけるでも有るまいと云ふやうな風をして見せた。實際、彼の此の神經質な昂奮狀態の中には、私を腹立たせるやうな或物が有つた。尤も個人的にステパーン・トラフィモーギーチが何う斯うと云ふのではない、が、それに就いては又後に説明しよう。

彼は眞個蒼白に成つた。

『成程、君は僕が煩さいだらうね。そして、恐らく……最う二度とは此處へ來ない積りだらうね。』彼は毎も異常な破裂に先立つ蒼白い平靜の調子で以て言つた。私はぎよつとして飛び上つた。其瞬間にナスターシャが這入つて來た。そして、物も言はずにステパーン・トラフィモーギーチに何か鉛筆で走り書した一片の紙片を渡した。彼は一目それを見ると、私の前へ抛つて寄越した。紙の上には、ヴルヴーラ・ペトローヴナの手で三つの言葉が書いて有つた。

『自宅に被坐しやい！』

ステパーン・トラフィモーギーチは默つて帽子と洋杖を摑んで、急いで出て行かうとした。私も器械的に隨いて行つた。不意に人聲と忙しい足音とが廊下に聞えた。彼は雷にでも打たれたやうに、靜乎と立ち竦んだ。

『リープティンだ。僕は最う駄目だ』と、彼は私の腕を摑みながら囁いた。

同時にリープティンが室の中へ這入つて來た。

四

リープティンのために如何して彼が駄目に成るか、私には解らなかつた。實際、私は其言葉に重きを置かなかつた。私はそれを彼の神經に歸した。而も彼の恐怖は大したもので、私は好く彼を見張つて居ようと決心した。

リーブティンの這入つて來た容子を見ると、此際特に豫ての禁止を無視して這入つて來るだけの權利を持つて居るやうに、私どもにも思はれた。彼は近頃此町へ遣つて來たと思しい一人の紳士を一緒に連れて來た。私の化石した友達がほんやり見詰めて居るのに對して、彼は直樣大聲に喚び掛けた。

『お客樣を連れて來ました、眞個珍らしい客ですよ、敢て貴方の隱栖を驚かした次第です。キーリロフさんと云つて、有名な土木技師です。加之、此方は貴方の息子さん——左樣です、あのビヨートル・ステパーノヰーチさんと極親しくしてお坐なんですよ。あの方の言傳も持つて來られたのです。今恰度着かれたばかりで——』

『言傳は貴方のおまけです』と、客は打切棒に言つた。『言傳なんて何にも有りません。併しヴェルホーエンスキイ君を知つて居るのは事實です。今から十日程前にX州で別れました。』

ステパーン・トラフィモーヰーチは器械的に其男に手を差出して、坐るやうに手附で挨拶した。彼は私を見て、又リーブティンを見遣つた。それから急に氣が附いたやうに、自分も腰を卸した。手には未だ帽子も洋杖も持つたまゝ、氣が附かずに居た。

『をや、貴方は御自分で出掛けられる處ですね。私は又仕事が忙しいので何處へも出られんと聞いて居たが——』

『左樣です。だがね、……そりやア本當だが……僕は散歩に出ようとしたんだよ。僕は……』ステパーン・トラフィモーヰーチは言句に詰つて顏を赧くした。そして、帽子と洋杖とを長椅子の上へ投げ遣つた。

其間、私は目拔く客を檢査した。彼は二十七八歳の若者で、服裝も品好く、蒼白いと云ふよりは寧ろ土色した顏と、黑い、光のない眼を持つた、身體つきの好い、瘠形の男で有つた。彼は始終考へに沈んでぼんやりして居るやうに見えた。何だか妙な具合に言葉を運んで、突かゝるやうな物の言方をした。で、少し長い文句を言はうとすると、直ぐ混亂して仕舞つた。リーブティンは最うすツかりステパーン・トラフィモーヰーチの狼狽して居るのを見て取つて、內々それを嬉しがつて居た。彼は室の眞中へ柳造りの椅子を引張つて來て、向側の長椅子に陣取つた客からも、主人からも、殆ど同じ位な距離に成るやうな所に腰掛けた。彼の銳い眼は室の一方の隅から他の隅へ何やら探るやうに走つた。

『私が……私がペトルーシャに會つてからも隨分に成りますよ。貴方は外國でお會ひでしたか。』ステパーン・トラフィモーヰーチはお客に對して、漸つとこれだけ呟いた。

『外國でも、此方でも。』

『アレキセイ・ニーリイチ君は四年も外國に居た揚句、今此處へ着いたばかりです』と、リーブティンは言葉を挾んだ。『此方は自分の專門を一層深く究めるために旅行してお坐なのですが、今回は此處の鐵道の鐵橋を建設するに就いて仕事を見附けに來られたので、目下先方の返辭を待つて居られるのです。此方は又ビヨートル・ステパーノヰーチ君を通じて、ドロズドフ家やリザベータ・ニコラーエヴナさんともお知合です。』

アレキセイ・ニーリイチは暗い顏附をしながら、見苦しい程自烈體さうに聽いて居た。彼は何か憤懣に堪へないらしい。

『此方は又ニコラーイ・フシェヴォロードヰーチさんも御存じです。』

『ニコラーイ・フシェヴォロードヰーチ君を御存じですか』と、ステパーン・トラフィモーヰーチは訊いた。

『あの人も知つてます。』

『私が……私がペトルーシャに會つてからも隨分に成りますよ。それに何うも……私は彼兒の父だと云ふ權

利はない様に思ひます……Ce sait lo mot.（旨く言へたものだ。）私は……貴方は如何して彼兒とお會ひでしたか。』

『私は……えゝ、あの人も直き遣つて來るでせう』と、キーリロフは再び質問されるのが煩さい様に遽てゝ返辭をした。

『彼兒が來る！到頭私も……ねえ、私が彼兒に會つてからも隨分に成りますよ』と、ステバーン・トラフィモーギーチは何うしても此句が口に着いて離れないらしい。『今や私はあの憐れな兒を待つて居る……あの兒に對しちや私は濟まないことばかりだ！と云ふのは、斯ういふ譯ですよ。私が彼得斯堡であの兒に會つた時……一口に言へば、有つて無しに考へて居たんですね。Quelque chose dans ce genre.（まア そんな様な風でしたよ。）彼兒は御存じの通り神經質な、感情的な……極憶病な兒でした。夜間就寢む前に祈禱をするにも、床に脆づいて、枕の上に十字を切るのが常でした、そりやア夜の間に死なない爲だと云ふんですよ……Je me souviens.（私も記憶えて居ます。）Enfin（要するに）高遠な感情でも何でもない、卽ちより根本的な感情が有るでもなければ、未來の觀念の萠芽と云ふ譯でもない……c'était comme un petit filoh.（まア言つて見れば、小さな痴人でしたよ。）併し私は何だか辻褄の合はないことを言つてた様ですね、御免下さい……で、貴方は私の許へ……』

『あの人が枕に十字を切つたと云ふのは、貴方は眞面目に仰有るのですか』と、土木技師は不意に目に立つやうな興味を持つて訊いた。

『えゝ、毎も左樣でしたが……』

『宜しい。それだけ伺へば澤山です。何卒先をお話し下さい。』

ステバーン・トラフィモーギーチは不審相に相手の顏を眺めた。

『わざ〳〵お訪ね下すつて、本當に有難う存じます。ですが、白狀しますと、私は目下……のやうな狀態に居ませんので……處で、一寸伺ひますが、貴方は何方に逗留して被坐しやるでせうか。』

『バガヤーヴレンスキイ街のフィリポフの家に泊つて居ます。』

『あゝ、それぢやシャトーフ君の居る家ですね』と、私はわれ知らず口を挿んだ。

『左樣だ、其家です』と、リーブティンは叫んだ。『只シャトーフ君は上に、屋根裏に泊つて居るが、此方は下のレビャードキンの許にお坐です。えゝ、シャトーフ君も御存じですが、シャトーフ君の細君も御存じなのです。外國であの女と大層親しくして被坐した相で。』

『Comment!（これは如何だ！）貴方は實際 ce 『pauvre ami（あの憐れな友達）とあの婦人との不幸な結婚に就いて、何か御存じで被坐しやるか』と、ステバーン・トラフィモーギーチは急に勢ひ込んで訊ねた。『貴方はあの婦人を親しく知つて居るといふ最初の人ですよ。で、若し……』

『何だ下らない！』と、技師は眞赤に成りながら相手の言葉を遮ぎつた。『リーブティン君、如何して君はそんな餘計な事を言ふんだい！私はシャトーフの細君に會つたことはない、只一度遠目に見掛けたことが有るだけです……シャトーフ君は知つて居ますさ。本當に君は餘計な事ばかり言ふんだね。』

彼は突立つて帽子を摑んだが、再びそれを下に置いて、又前の樣に最一度下に坐りながら、喧嘩でもするやうに、憤りツぽい黑眼をステバーン・トラフィモーギーチに向けた。

私はこんな不思議な懊れ方を如何にも理解することが出來なかつた。

『御免下さい』と、ステバーン・トラフィモーギーチは鄭寧に言つた。『成程、これは餘程込み入つた問題で御座い

ますね。』

『いや、些とも込み入つた問題では御座いません……眞個失禮な話ですよ。それに私が「下らない」と言つたのは、貴方に對してぢやアない、リーブティン君に對してですよ。此男が餘計な事を言ひますからね。私はシャトーフ君なら知つてるが、細君のことは毫末も知りません……えゝ、毫末も知りませんとも。』

『解りました、解りました。いや、私が若し強ひて言つたとすれば、それは只あの憐れな友達を、notre insensible ami（あの激昂し易い友達）を愛して居るからですよ。私に言はせると、あの男は元から有つて居た、何うも若過ぎるには若過ぎたが、併し健全な思想を餘りに急激に變更しましたよ。で、此頃あの男は notre Sainte Russie（吾が神聖な露西亞）に就いて變な事ばかり言つてますが、私は以前からあの男の憤怒を——かう言ふ外に、私には言ひ樣がない——家庭の事情、特に不幸な結婚に歸して居ました。自分の手の指一本々々のやうに憐れな露西亞を知つて、露西亞の人民のために全生涯を捧げて居る私は、あの男が露西亞の人民を知らないことを貴方に斷言することが出來る。なに一層甚しいのは……』

『私も露西亞の人民を知らない、又それを研究して居る閑も有りません』と、技師は再び相手の言葉を遮つた。左樣言ひながら、長椅子の上に彼方此方身體を扭向けた。ステパーン・トラフィモーギチは話の腰を折られてきよとんとして居た。

『いや、此方は人民を研究して居られるのですよ』と、リーブティンは口を挿んだ。『此方は既に其研究を始めて、露西亞に自殺の增加する原因に關して、非常に興味ある論文を書いて居られるのです。況く言へば、社會に於ける自殺の增減を支配する原因に關してですね。其結果此方は驚くべき結論に到着されたのです。』

技師は恐ろしく昂奮して來た。

『君はそんな事を言ふ權利を有つて居ないのだ』と、彼は忌々し相に呟いた。『私は論文なぞ書いちやア居ない。そんな馬鹿な事はしない積りだ。只一寸した機みに、打解けて君に訴ねたのだよ。論文なぞ何處にも有りやアしない。僕は出版なぞしませんよ、君がそんな事を言ふ權利はないのだ……』

リーブティンは見るから好い氣に成つて居た。

『これは失敬した。君の文學上の作品を論文と言つたのは、僕の誤謬かも知れないからね。なに、此人は只觀察ばかりを聚めて居るのでさ。が、問題の中心には、最つと適切に言へば、其の倫理的方面には些とも觸れて居ないのですよ。實際、此人は道德其者を全然否定して、究極の善のために一般的破壞を獨さうといふ最新の主義を抱いて居るのです。此人は歐羅巴にかける健全な理性の設立のためには、此上一億以上の人の首を斬らなければ成らぬと要求するのです。最後の平和會議で要求された以上ですね。此點に於て、アレキセイ・ニーリイチは何人よりも極端ですよ。』

技師は眞蒼な顏をして人を輕蔑するやうな微笑を含みながら聽いて居た。三十秒許りは何人も默つて居た。

『とんと馬鹿けた話ですね、リーブティン君』と、キーリロフは漸と言出した。一種の威嚴が具はつて居た。『僕が何かの機みにそんな事を言つたとすれば、そして、君が今再びそれを言出すのだとすれば、君の勝手だよ。併し君にはそんな權利はない、僕は何人にも言つたことがないからね。僕はお饒舌を卑しむ……僕の確信は僕にだけ解つて居るんだよ。一旦物事が決定した時には、僕は議論なぞするに堪へない。議論なぞ爲ようとは思はない……』

『成程、御道理ですね』と、ステパーン・トラフィモーギーチは言はずに居られなかつた。

『私は辯解して置きますが、私は此處に居る何誰に對しても憤つて居るのでない』と、客は一層熱しながら口疾に語りつゞけた。『私は此の四年間殆ど他人に會ひませんでした。四年間といふもの物も言はなければ、何人に會はうとも思はなかつた。私の目的は私以外の何人にも關係のないことですからね。リープティンはそれを知つて笑つて居ます。私は承知して居るが、氣に懸けない。私は滅多に腹を立てない、只此人の押附けがましいのに迷惑して居るばかりだ。で、私が貴方に私の思想を說明しないのは』と、彼は何か思ひ切つた眼附で私どもを見較べながら、不意に話を結んだ。『決して貴方が政府へ密告するのを怖れて居るからぢやない。そんな事ぢや決してない。何卒そんな風な下らない事は想像しないで下さい。』

これに對して何人も答へなかつた。私どもは互に顏を見合せた。リープティンさへ冷笑ひすることを忘れた。

『皆さん、誠に失禮ですが』と、ステパーン・トラフィモーギーチは思ひ切つて長椅子から立上つた。『私は何うも具合が惡くて取亂して居ます。何卒御免下さい。』

『いや、私どもは最う失禮いたします』と、キーリロフは帽子を摑んで立上つた。『好く仰有つて下すつた。何うも私は忘れッぽくて困ります。』

彼は立上つて、人の好ささうな風で手を差伸べながら、ステパーン・トラフィモーギーチの傍へ行つた。

『お加減が惡くて不可ませんね。又私が來たのでもしや——』

『何卒貴方も此處で旨く成功して下さい』と、ステパーン・トラフィモーギーチは遽てずに心から握手しながら返辭をした。『貴方が仰有る通り、そんなに永く外國に滯在して、御自分の目的のために人民から懸離れ、露西亞を忘れて被坐したら、貴方は屹度骨の髓まで露西亞人なる私どもを見て不思議にお思ひに成るだらうし、又私どもが貴方を見ても同樣に感じるだらうと云ふことは私にも解りますよ。Mais cela viendra.（が、そんな事は一時的の現象ですよ。）只此處に一つ何うしても解らないのは、貴方が私どもの橋を建設しようとしながら、同時に一般的破壞の主義を懷抱して被坐しやると云ふことですね。』

『なに？何と仰有る？あゝ何だ』と、キーリロフは度膽を抜かれて叫んだ。そして、不意に極明ッ放しな、人の好ささうな洪笑に落ちた。一瞬間、彼の顏は眞個子供らしい表情を取つた。私はそれが特に彼に似合ふやうな氣がした。リープティンはステパーン・トラフィモーギーチの氣の利いた言草を嬉しがつて、頻に手を擦つた。私は如何してステパーン・トラフィモーギーチが彼樣にリープティンを怖がつたのか、リープティンの足音を聞いた時、如何して『俺は最う駄目だ』なぞと言つたのかと、絶えず不思議に思つて居た。

五

私どもは皆入口の所に立つて居た。主人側とお客側とは急いで最後の鄭寧な挨拶を取交しながら、それでお互に滿足して別れようといふ瞬間で有つた。

『今日此人の不機嫌な理由は』と、リープティンは室を出ようとした時、さも偶然らしく、不意に言葉を漏した。『今し方レビャードキン大尉とあの男の妹のことに就いて一寸紛紜が有つたからですよ。レビャードキン大尉はあの狂人の妹をですよ。本物のコサック纏で毎朝、毎晩引ぱたくのですね。だからアレキセイ・ニーリイチ君は其場に居合さないやうに、あの構への中の他の木小舍へ引移つたのです。

ですよ。ぢや、左様なら。』

『妹を？　あの病人を？　鞭で？』と、ステパーン・トラフィモーギーチは自分が突然鞭で打たれでもしたやうに叫び出した。『何んな妹ですか。レビャードキンとは誰のことですか。』

『レビャードキンと云ふのは退職大尉ですよ。以前は自分でも中尉だと言つてましたがね』と、リープティンは再び立戻つて答へた。

『階級なぞ如何でも宜しい。何んな妹ですか。あゝツ！　君はレビャードキンと言つたね。此町にも元レビャードキンと云ふ男が有つたが……』

『其男ですよ。ヴィルギンスキイの家に居つた「吾々の」レビャードキンですよ。想出されましたかい。』

『併しあの男は暨札を使つて捕まへられたと云ふぢやないかね。』

『うむ、だが今は歸つて来ましたよ。最う此處へ来てから三週間にも成りませうか。餘程奇態な境遇の下に居ますよ。』

『併し彼奴は卑劣な漢だよ。』

『吾々の仲間に一人も卑劣漢がないやうなことを仰有いますね』と、リープティンは相手の魂まで見抜くやうな、狡猾さうな眼附をしながら、急に歯を鳴らした。

『如何したんだ！　僕は何もそんな積りで言つたんぢやないよ……加之、僕は其事に就いちや全く君と意見を同じうして居るのだよ、特に君とだよ。で、それから如何したと云ふのだ？　君は何やら言はうとしたんだね？　うむ、確に君は何物かを意味して居たんだよ。』

『なに、皆詰らないことでさ……あの時分大尉は、何處から見ても、永久に此町から去つて仕舞ひましたね。が、暨札のためぢやアない、何うもあの男に隠れて居たらしい妹を捜しに行つたのですよ。で、今やあの男は其妹を連れて来た。それ限りの話ですよ。如何して貴方はそんなに驚いて居るのですね？　私は只あの男が酔拂つて饒舌るのを聞いただけですよ。あの男も素醒の時にはそんな事は言ひませんや。それに彼奴は隨分慣りッぽい男でね、まア例へて見れば、軍隊的耽美家とでも言ひますかな、只趣味が下等なばかりですよ。で、其妹といふのは狂人の上に跛ですがね。何うも何人かに誘拐されたらしいんですよ。レビャードキン君は自分の體面を傷けられた報償として、數年間其誘拐者から補助金を受けて居たらしい、少くとも私の聞いた處ぢや左様だ。尤も醉漢の言ふことだから判りませんがね。彼奴の法螺かも知れませんよ。加之、そんな事は最つと靡く出來ることですからね。だが、彼奴が一角の金子を持つて居るだけは確かですよ。十日前に跳足で歩いてた者が、今ぢや手に數百留布を持つてるんですからね。あの妹は毎日一種の發作に罹るのですがね、女が喚くと、彼奴は鞭でそれを取鎭めるのですよ。女には斯うして少許此方を怖がらせて置く必要が有ると云ふのでね。私に解らないのは、如何してシャトーフが此男の上に住んで居られるかと云ふことですよ。アレキセイ・ニーリイチは只三日の間彼奴等と一緒に居たばかりです。彼奴等とは彼得斯堡からの知合だ相でしてね。が、今は最う其紛紅が可厭さに他の小舎へ引移りました。』

『そりやア悉皆本當ですか』と、ステパーン・トラフィモーギーチは技師に向つて訊いた。

『リープティン君、君は實に好く饒舌るね』と、技師は腹立しけに呟いた。

『神祕だ！　祕密だ！　一體何處からこんな神祕や祕密が吾々の仲間へ飛び出して来たのだらう』と、ステパーン・トラフィモーギーチは叫ばずに居られなかつた。

技師は顔を蹙めて眞靑に成りながら、肩を聳かして室から出て行つた。

『アレキセイ・ニーリイチ君は其男の手から鞭を引奪つて、へし折つて、窓の外へ捨てゝ仕舞つた。それから激しい喧嘩に成つたのですよ』と、リーブティンは附足した。

『何だつてそんなにべちやくちや饒舌るんだ、下らない。何の爲だ！』と、アレキセイ・ニーリイチは再び振向いた。

『何だつて又そんなに謙遜して、人の心の寬大な衝動を隱すんだい、卽ち君の心だよ。僕は自分のことを言つて るんぢやないからね。』

『何を下らない……第一要らないことだ。レビャードキンは空虛な、無益な野郎だ……加之、有害な。如何して君は左樣いろんな事を饒舌るんだね？僕は行くよ。』

『やれ〳〵お仕舞ひだ』と、リーブティンは晴れ〳〵と微笑みながら叫んだ。『ステパーン・トラフィモーギーチさん、私は未だ貴方に話して愼しませて上けたいことが有るんですがね。實際、私は貴方に話をするために來たんですがね。まア可いは、此次に爲ませうよ。アレキセイ・ニーリイチ君が彼樣に急いで居ますからね。ぢや、左樣なら。なに、話ツてえのはヴルヴーラ・ペトローヴナに關した事なんですがね。あの女は一昨日わざ〳〵使を寄越して、私を面白がらせて吳れましたよ。眞個悔えられなかつた。左樣なら。』

が、今度はステパーン・トラフィモーギーチが如何しても彼を離さなかつた。彼はリーブティンの肩を摑んで力任せに室の中へ押戻しながら、椅子に掛けさせた。リーブティンは眞個惘れ返つた。

『一體如何したんです』と、彼は椅子に坐つたまゝ、用心深くステパーン・トラフィモーギーチを見遣りながら

切出した。『あの女は急に私を喚びに寄越して、「打解けて」一個人としての私の意見を訊いたのですよ。ニコライ・フシェヴォロードギーチは狂氣か、それとも正氣かつてね。驚くぢや有りませんかい。』

『君は如何かして居る』と、ステパーン・トラフィモーギーチは突然われを忘れたやうに呟いた。『リーブティン君、君は確に覺えが有る筈だ。何か君は左樣いふ種類の人を侮辱するやうな事を言ひに來たに違ひない……何か最つと惡い事を！』

私は電光のやうに、リーブティンが吾々の事件に關して吾々以上の事を知つて居るばかりでなく、吾々が如何しても知り得ない事まで何か知つて居るだらうといふ、彼の推測を想出した。

『誓つて、ステパーン・トラフィモーギーチさん、誓つて』と、リーブティンは非常に仰天したらしく呟いた。『私は誓つて……』

『お默りなさい、それよりも眞實の話を爲さい！　あゝキーリロフさん、お願ひですから、何卒最一度戻つて、此場に立合つて下さい。切にお願ひ致します。何卒坐つて下さい。で、リーブティン君、早く始めて吳れたまへ、簡單に、辯解なぞしないで。』

『私もそんなに貴方を顚倒させると知つてさへ居たら、決して言出す處ぢやなかつたのでした。で、勿論貴方はヴルヴーラ・ペトローヴナさんから聞いて、全然承知して被坐しやるでせうね？』

『君は決してそんな事考へては居ないのだ。それよりもお始めなさい、私が命ずるからお始めなさい。』

『何卒御自身も掛けてだけ下さらないか。貴方の樣にそんなに昂奮して私の前を駈け廻られては、私も靜乎として居られない。筋道の立つた話も出來ませんよ。』

ステパーン・トラフィモーギチは自ら抑制して、安樂椅子に重々しく腰掛けた。技師は氣輕かし相に床を見詰めて居た。リープティンは心から面白相に彼等を見廻した。

『何處から始めませうね！……私も轉倒して仕舞ひましたよ。』

六

『一昨日、あの女が不意に下男を私の許へ寄越してね、「十二時にお出下さるやうに」と言ふのさ。斯んな事が有ることですかい。私は仕事を拋り出して、きッかり昨日の十二時に呼鈴を鳴らしたものさ。客間へ通された。一分も待つと——あの女が遣つて來た。私に腰を掛けさせて、自分も向側に坐つた。私は腰を卸すには卸したが、何う狐に誑まれてるやうな氣がして仕樣がない。是迄あの女が私に對した態度は、貴方も御存じの通りですからね。で、前置も何にもなく藪から棒に切出された、例の通りにね。「四年前にニコラーイ・フシェヴォロードギーチが病氣に罹つて、何だか妙な事を遣出したので、一時町中が大騷ぎをしたことは記憶えて被坐しやるでせうね」と言ふのさ。「其中には直接貴方に關係した事も有りましたね。ニコラーイ・フシェヴォロードギーチの病氣が癒ると、私が勸めて貴方の許へ遣つたでせう。あゝ前に幾度も貴方とお話したと云ふことも知つてますよ。何卒打明けて私に……」と、此處であの女は少許躊躇しましたよ。「其時貴方は彼兒に就いて如何お考へでしたか……大體貴方の彼兒に對するお考へは如何でしたか……あの時彼兒に對して何んなお考へをお持ちに成つたか、何卒打明けて眞直に仰有つて下さい。」

『此處であの女はすツかり混亂して、至一分間程口を噤んで居ましたよ。そして、不意に眞靜に成つた。私も膽を潰しましたね。其間あの女は又遣出した——別に傷はし相ッてんぢやない、左樣言つたんぢや、あの女に嵌りませんや——が、至極重々しい調子でね。

『「何卒私の言ふことを判然誤解しないやうに聽いて頂きたい。私は貴方を機轉が利いて、好く眼の屆く、精密な觀察の出來る方だと思へばこそ、斯うして態々お迎へ申した次第です」とさ。何と云ふお世辭でせうね。で、「斯うして貴方にお願ひして居るのは彼兒の母親だと云ふことは承知して居て下さるでせうね」と言ふぢやないか。「ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは是迄いろんな不幸に出逢つて、運命の幾變轉を經て來ました。で、そんなこんなが彼兒の精神狀態に影響したかも知れません。何も狂人だと云ふのぢや有りませんがね」と言ふのさ。「そりやア論外です！」と、威張つて、斷々乎として言ひましたよ。「が、何か變つた妙な事が、考への變調が、一種特別な物の觀方をする傾向が有つたかも知れませんね」と、これもあの女の云つた言葉其儘ですよ。ねえステパーン・トラフィモーギチさん、私はヴルヴーラ・ペトローヴナさんが緊張に物を言ふことが出來るのにすッかり感心して仕舞ひましたよ。あの女は何うも素晴しい知力を有つた女だ！「兎に角彼兒が每も落着かないで、妙な衝動を感じる傾向の有るのは、私も氣が附いて居ました。ですが、私は母親です、貴方は公平な傍觀者ですからね。從つて貴方の聰明を以てすれば、一層公平な意見を形造ることも出來るぢや有りませんか。私は切にお願ひ致します——あの女は實際左樣言ひましたよ——何卒眞實の處を遠慮なく仰有つて下さい。で、私が斯うして貴方に祕密にお話をしたのだと云ふことを決して忘れないとお約束して下さるなら、これだけは記憶えて居て下さい、私は今後機會さへあれば何時でも貴方に對して感謝の意を表する積りですよ」と、斯うぢや有りませんか。何と驚いたでせう！』

『實際、君は……僕を驚かせるよ』と、ステパーン・トラフィモーギチは吃りながら言つた。『眞個、眞實に

出來ない位だね。』

『左樣だ、見たまへ、見たまへ』と、リープティンはステパーン・トラフィモーギーチの言ふことなぞてんで耳に掛けないやうに叫んだ。『私のやうな者の前に、あの女が平常の威嚴を屈してさ、おまけにそれを祕密にして呉れと賴む迄折れて出た處を見れば、餘程焦躁と不安が有るに違ひないのだね。貴方は如何思ふね！　何かあの女はニコラーイ・フシェヴォロードギーチに就いて思ひ掛けない事を聞き込んだのぢや有りませんかね。』

『僕は何にも知らないよ……あの女にも此の五六日會はないからね。だが……だが、僕は君に言つて置かなくちや成らんよ』と、ステパーン・トラフィモーギーチは未だ自分の思想を纏めることが出來ないやうに口籠つた。『だが、僕は君に言つて置かなくちや成らんよ。リープティン君、若しそれが祕密に君に打明けられたものだとすれば、それに君は此處で衆皆の前で饒舌つてるぢやないか。』

『眞個、祕密に打明けられたのですよ。若し私が何人にでも……併し此處で言ふのは別だよ……構はんぢや有りませんか。吾々は他人ですかい、アレキセイ・ニーリイチ君にしてもさ。』

『僕は其仲間入りはしないよ。そりや此の三人は祕密も守るだらうが、四人目の君には安心出來ないからね。僕は何事に就いても君には信用を置かないよ。』

『何だつて、そりやア何を言ふのかい。私は一生感謝すると約束されて居るんだよ、其點から見ても、私に一番深く利害關係が有るぢやないか。で、私の言ひたいのは、此事と關聯して一つ妙な話が有るんですよ。單に妙なと云ふよりは、寧ろ心理的な話なんたがね。私は昨日の夕、未だワルヴァーラ・ペトローヴナとの會見の影響が去らない間に——あの爲に私が何れだけ深い印象を受けたかは、貴方方の想像に任せませう——私はアレキセイ・ニーリイチに幅重な質問を掛けた。「君は外國でニコラーイ・フシェヴォロードギーチに會はれたさうだ。又以前彼得斯堡でも懇意だつたと云ふが、あの人の才能を如何お考へですかい」と、私が訊いた。すると、此人は例の皮肉な物の言方で、微妙な知力と健全な判斷力を有つた人だと答へた。私は又「では、君は數年間交際してる間に、何か思想の變調とか、一種特別な物の觀方をするとか、卽ち狂人の徵候を認められはしなかつたか」と訊いた。畢竟、私はワルヴァーラ・ペトローヴナの言葉を其儘繰返したんだね。で、如何でせう、アレキセイ・ニーリイチ君は急に考へ込んで、今現に遣つてるやうに顏を蹙めたが、「左樣だね、時には何處か變な事も有つたやうだね」と言ふぢや有りませんか。アレキセイ・ニーリイチ君にさへ變に見えたとすれば、實際何か有るんですよ、有るに違ひないのだね。』

『そりや眞實ですか』と、ステパーン・トラフィモーギーチはアレキセイ・ニーリイチの方へ向直つて訊いた。

『私はそれに就いて何れとも言ひたく有りませんね』と、アレキセイ・ニーリイチは急に頭を擡げて、何やら閃くやうな眼附で彼を見返しながら答へた。『リープティン君、君は如何してそんな事を言ふのか伺ひたいものだね。君にはそんな中へ僕を引摺り込む權利はないよ。僕は些とも僕の全體の意見を吐かなかつた。そりや、彼得斯堡で知つて居るには居たけれど、ずつと以前のことだし、其後も會ふには會つたが、殆ど二コラーイ・スタフローギンを知らないと言つても可い位だからね。お願ひだから、僕だけは打捨つて置いて貰ひたい……こんな事は宛然他人を誹謗するやうなものだからね。』

『あゝ、又鐵棒引きの蔭口野郎が』と、リープティンは壓迫された無辜の民を裝ひながら兩手を擴げた。『何故寧そ探偵と言はないのかね。アレキセイ・ニーリイチ君、君の樣に成たけ渦中に投じない樣にして、傍から批評して居るのは、君に取つちや都合は好からうさ。だか、貴方は左樣は思はないでせう、ステパーン・トラフィモーギー

チさん――例へば彼のレビャードキン大尉ですがね、彼奴は馬鹿ですよ……實際馬鹿と云ふのが馬鹿々々しい位ですがね、彼奴がニコラーイ・フシェヴォロードギーチの才智に感服して居るにも係らず、あの人に依つて自分が名譽を毀損されたと考へてるぢや有りませんか。「あの男には驚いた。眞個狡い蛇のやうな野郎だ」と、彼奴が言ふんですよ。私は又言つて遣りました。未だあの女との會見の印象が去らない間で、アレキセイ・ニーリイチと談話をした後でしたがね。「大尉、君はあの蛇を狂人だと思ふか、それとも眞人間だと思ふかい」と。如何でせう、あの男は背後から突かれでもしたやうに飛び上りましたよ。「左樣だ、左樣だ……」と、彼奴が言ふんですね。「だが、少しも影響しないよ。」併し何に影響しないのか、それは言ひませんでした。左樣だ、それから彼奴は酷く考へ込んで、酔ひが醒めて仕舞ふ程、長い間考へて居ました。私達はフィリポフの料理店に居たのですよ。で、三十分も經つと、彼奴は不意に握拳で一つ食卓を敲して、「左樣だ、彼奴は狂人かも知れない。併しあれには影響しないさ」と言ふぢや有りませんか。彼奴は未だ何に影響しないのか言はないのですよ。勿論私は只談話の筋だけ話して居るんですがね、でも意味は判るでせう。えゝ、町中の何人にでも訊いて御覽なさい。衆皆言ひますよ、「あの人は狂人だ。あの人は悧巧なんだが、それでも尚且狂人だ」と。』

ステパーン・トラフィモーギーチは頸垂れたまゝ聽いて居た。そして、一生懸命に考へて居た。『で、如何してレビャードキンが知つてるのかね。』

『貴方一つアレキセイ・ニーリイチに訊いて御覽なさい、今の先私を探偵と呼んだ人に。私は探偵だが、何にも知りませんよ。併しアレキセイ・ニーリイチは一から十迄此の紛紜を知つて居る、知つて居ながら口を噤んで居るんですよ。』

『私は何にも知らない、何にもと言つても可い位だ』と、技師は再び苛々しながら言つた。『君はレビャードキンから手掛りを引出さうとして、酒に酔はせた。又僕に何か言はせようとして、此處へ連れて來た。だから探偵だと言ふんだよ。』

『私は未だ彼奴に酒を飲ませたことはない、又彼奴の祕密なんぞ錢を使つて聞くだけのものは有りませんよ。尤も私には左樣だが、君には何れだけ値打が有るか知りませんがね。それに彼奴は十二日前にや私に十五哥貸して呉れと言つた程ですが、今ぢや金子をばら撒いて歩きますよ。彼奴が私に三纏を奢つたので、私が彼奴に奢つたのぢやァない。併し君は好い事を教へて呉れた、今度機會が有つたら彼奴に酒を飲ませて、何か聞き出して遣りませうよ……君の下らない祕密も大抵判るだらうからね』と、リーブティンは憎さけに言ひ返した。

ステパーン・トラフィモーギーチは俛氣に取られて、ほんやり二人の顔を眺めて居た。二人は他人の前をも憚らず、互に惡口を言ひ合つた。私は不圖リーブティンが第三者を通じて此男を會話の中へ引込むために、わざ〳〵アレキセイ・ニーリイチを此處へ連れて來たのぢやないかと云ふやうな氣がした。それが何時でも彼の衞策で有る。

『アレキセイ・ニーリイチ君は本當に好くニコラーイ・フシェヴォロードギーチを知つて居るんだ』と、彼は激したやうな調子で續けた。『で、貴方の質問ですがね、レビャードキン大尉は六年前にあの人と懇意に成つたのだから、私どもの中では一番先ですよ。畢竟ニコラーイ・フシェヴォロードギーチが始めて此町へ遣つて來ようと思ひ立つた前の所謂暗黑時代に知合に成つたのですよ。當時、吾々の公子は變竹林な奴ばかり周圍に集めて居たものと見えますね。此處に御座る紳士と懇意に成つたのも其時分らしいのですよ。』

『おい、氣を附け玉へ、リーブティン君。君に注意して遣るがね、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは直き

自身で此町へ遣つて來るんだよ。あの男も自己を防衛する法は知つて居るんだよ。』

『私に注意する！私はあの人が最も靈妙な、修養した叡知を具へた人間だと觸れ出した先鋒だよ。其點では、昨日もヴルヴーラ・ペトローヴナに好く念を押して來たがね。私はあの女に言ひました、「何うも私の請合ひ兼ねるのは、あの人の性格だ」と。レビャードキンも昨日同じ事を言つて居た、「あの人の性格からいろんな危害が僕の身に振かゝつて來た」と。あゝ、ステバーン・トラフィモーヂチさん、貴方も私のことを誹謗だの、探偵だのと仰有るのは好う御座いますがね、同時に貴方はそれに依つて私からいろんな事を聞き出して、大に好奇心を滿足させたと云ふことを忘れぬ樣にして下さい。で、昨日ヴルヴーラ・ペトローヴナは眞直に要點へ突込んで來てね、「貴方は此事件に個人的利害關係を有つてお坐でだ、それだから私も貴方にお願ひするのです」と言ふんだよ。眞個、其通りだ！何も私が公衆の前で大將から受けた個人的侮辱を押愼えた動機なぞ調べる必要はない。私は只茶話にしたいばかりでなく、此事件に興味を有つ理由が有ると思ひますよ。あの人は今日貴方と握手しながら、明日は何の理由もないのに、一寸そんな氣が向けば、單に氣紛れから生眞面目な公衆の前で頰桁を引敲いて、貴方の好意に報いますよ。殊に怖ろしいのは、かう云ふ連中は女に掛けては目がないのですからね。眞個蝶々か雄雞のやうなものですよ。昔のキユピッドの樣に小さな羽の生えた紳士か、女殺しのペトコーリヤ人の樣ですよ。ステバーン・トラフィモーヂチさん、貴方は折紙附の獨身者だから、そんな風に大將の最負をして、私を鐵棒引だなぞと言つて居られますがね。一度若い、美しい細君を貰つて御覽なさい——貴方も未だ其通りお若いのですからね——そしたら、貴方も屹度吾々の公子の前に門を突して、家の中に木欄を拵へますよ。で、若しあの毎日鞭で打たれて居るレビャードキンの妹にしてもだね、あれが跛で氣が狂つてさへ居なかつたら、疾に大將の犧牲に成つて居るだらうよ。いや、レビャードキン大尉に言はせると、彼奴が「一家の面目」を毀損されたのも大將のお蔭だと云ふんだよ。只、何うもあの人の上品な趣味とは矛盾してるやうに思はれるんだがね。と云つて、別段それが妨げに成る譯では有るまい。何んな漿果でも氣さへ向けば一寸摘んで見るだけの値打は有るからね。貴方は誹謗だと仰有るがね、私が饒舌るんぢやアない、町中がそれで鳴つて居るんですよ。私は只默つて聽いて居て、成程左樣だと思ふばかりだ。それは禁じられて居ないからね。』

『町中がそれで鳴つて居る！何で鳴つて居るのだ？』

『畢竟レビャードキン大尉が町中へ聞えるやうに我鳴つて居るんですよ、市場が鳴つてるのと同じぢや有りませんか。私が非難される覺えはないね。私は只仲間と一緒にそれに興味を有つて居るばかりだ。要するに、私も此土地の仲間の一人だらうからね。』彼は無邪氣な微笑を泛べながら私どもを見廻した。『で、此處に一事件が起つたのですよ。まア考へて御覽なさい。噂に聞けば、大將は或眞面目な若い婦人、私も存じて居る愼しやかな孤兒ですがね、其婦人に托して、瑞西からレビャードキン大尉に三百留布を送つて來た相ですよ。で、少許經つて、レビャードキンは或眞面目な、信用の置ける紳士から——誰だといふことは言ひたく有りませんがね——實は三百留布でない、一千留布送られたのだ、それは正眞正銘の話だと聞かされた！だもんで、最うレビャードキンは其の若い婦人に自分の金子を「七百留布胡魔化された」と我鳴り出したんですよ。そればかりでない、警察へ訴へようともして居ます。兎に角、そんな事を言つて脅かして、町中我鳴つて歩いて居るんですね。』

『こりや怪しからん、君は實に怪しからんよ』と、技師は不意に椅子から飛び上りながら叫んだ。

『だつて、君がレビャードキンにニコラーイ・フシェヴォロードヰーチから送つたのは三百留布ちやない、一千

留布だと言傳を持つて来た當人ぢやないか。大尉は醉拂つてる時に自分で左樣言つたよ。』

『そりやァ……そりやァ實に不都合な誤解だ。何人かが間違へたんだね、それが原因に成つて……いや、何でもないんだよ、君は實に下劣だよ。』

『僕も何でもない事だと信じたいのだ。此話ぢや隨分心配して居るんだよ。だつて、考へて見玉へ、相當に眞面目な評判の娘が、第一に七百留布の紛失で嫌疑を受け、次にはニコラーイ・フシェヴォロードギーチとの關係を明るみへ出されるんぢやないか。大將には性質の好い娘を汚したり、又僕の場合のやうに、他人の妻を辱しめる位何でもないのだからね。あの人は心の寛裕な人と出會へば、其人の眞面目な名の下に他人の罪を無理押附けに厳はせるんだよ。私は其處を辛抱して来たんだ。畢竟自分の事を言つてるんだがね。』

『氣を附け玉へ、リープティン君』と、ステパーン・トラフィモーギーチは眞蒼に成つて安樂椅子から立上つた。

『眞實にしちや不可ない、眞實にしちや。誰かが間違へたんだ。レビャードキンは醉拂つて居たんですよ』と、技師は一寸名狀し難いやうな昂奮狀態に陷りながら叫んだ。『今に悉皆判りますよ、私には說明が出來ないけれど……兎に角下劣だ……最う堪らない、堪らない！』

彼は室の中から駈出した。

『如何したのだ！　僕も一緒に行くよ』と、リープティンは吃驚して叫んだ。そして飛び上りながらアレキセイ・ニーリイチの後を追掛けた。

七

ステパーン・トラフィモーギーチは少時考へ込んだまゝ立つて居たが、私を見ても私が眼に映らぬらしい。其儘帽子と洋杖とを取つて、靜かに室の外へ出て行つた。私は又以前の樣に其後から跟いて行つた。二人が門の外へ出た時、彼は私が跟いて来るのに氣が附いて言つた。

『あゝ左樣だ、君一つ立會人に成つて呉れ玉へ……de l'accident.（過然にね。）Vous m'accompagnerez, n'est-ce pas?（ね、僕と一緒に行つて呉れるだらうね？）』

『ステパーン・トラフィモーギーチさん、貴方は再び彼處へ行かうと云ふんぢやないでせうね？　何んな事に成るか考へて御覽なさい！』

あはれな取亂した微笑、恥辱と絶望との微笑を泛べながら、同時に一種妙な恍惚狀態に這入つて、彼は一瞬間立停つたまゝ、私に囁いた。

『僕も「他人の罪惡」を蔽ふために結婚することは出來ないよ！』

私は左樣来るだらうと豫期して居た。到頭、一週間も好い加減に胡魔化して、私に躾して置いた最後の文句が大平に切出された。私は實際腹が立つた。

『で、貴方は、ステパーン・トラフィモーギーチさん、貴方は些との間でも……そんな卑しい下劣な考へを抱くことが出來たんですね。貴方の樣に善良な、純潔な人で有りながら、リープティンの來ら迄は……』

彼は私を見詰めたまゝ返辭をしなかつた。其儘同じ方角へ歩いて行つた。私は一人取殘されようとは思はなかつた。私は私で自分の意見がヴルヴーラ・ペトローヴナに述べたかつた。私は若し彼が女らしい弱點からリープティンの言葉を其儘信じたと云ふのなら、斯んなに彼を責めはしない。が、今に成つて見ると、彼は明かにずつと前か

ら自分でそれを感附いて居たのだ。そして、リーブティンは只彼の疑惑を確めて、炎に油を注いだに過ぎない。彼は最初の日から、何の根據――リーブティンの言葉ですら――もない時から、あの娘を疑ふに躊躇しなかつた。彼はヴルヴーラ・ペトローヴナの壓制な振舞ひを、相當な人物にあの娘を嫁附けて、それに依つて大切なニコラースの貴族的な過失を蔽うて遣らうと周章てゝ居るのだと解して居た。私はそれに對して彼が罰して遣りたかつた。

『Oh, Dieu, qui est si grand et si bon!（おゝ、偉大にして善良なる神樣よ。）誰が私を慰めて呉れるでせう！』彼は百歩許り進んだ後、又立停つて絶叫した。

『眞直に自宅へお歸りなさい、私が何も彼も明白にして上げますよ』と、私は無理矢理に彼を家の方へ向はせながら叫んだ。

『矢張左樣だ！ステパーン・トラフィモーギチさんぢやアないの？貴方！』と、生々した、愉快さうな聲が、私どもの背後から音樂のやうに響いて來た。

私どもは何にも見なかつた。が、不意に馬上の貴婦人が私どもの傍へ現はれた――リザベータ・ニコラーエヴナが毎も變らぬ伴侶と一緒に。彼女は手綱を引絞つた。

『此處へ被入しやいよ』と、彼女は聲高に、愉快げに私どもを喚び掛けた。『此人と別れてから最う十二年に成るのよ。私は此人をおほえて居る。それだのに此人は……貴方は本當に私をおほえて被坐しやらないの？』

ステパーン・トラフィモーギチは差出された手を堅く握つて、恭々しげにそれを接吻した。彼は祈禱でもして居るやうに彼女を眺めた。そして、一語も發し得なかつた。

『あゝ、私をおほえて居て、喜んで居るんだよ。マヴーリキイ・ニコラーエヴヰチさん、此人は私を見て喜んで居るんだよ。何だつて貴方は此の二週間私に會ひに來て下さらなかつたの？叔母さんは貴方が御病氣だからお邪魔しちやア不可ないッて言つて聞かせるのよ。でも、私叔母さんが嘘言つてのを知つてるわ。最うぢり〳〵して貴方を散々罵り通して居たのよ。だつて、貴方が先づ被入して下さる筈だと、ちやんと心に極めて居たんだもの。だから、お使も何も上げなかつたんだわ。まア貴方は些ともお變りがないのね。』彼女は鞍から屈んで、まじ〳〵と彼を眺め遣つた。『何うも可笑しい位變らないのね。あゝ左樣ね、小皺が出來た。眼の周りや頰の上に澤山出來たのね。それから白髮が――でも、眼は些とも變らないのね。で、私は變りましたか。何だつて物を仰有らないの？』

其瞬間、私は彼女が十一で彼得斯堡へ連れて行かれた時、殆ど病氣に成り掛けたことや、病中ステパーン・トラフィモーギチのことばかり言つて泣きつゞけたことなぞを想出した。

『貴方……私……』と、彼は嬉しさの餘り切れ〳〵の聲で漸と言出した。『私は只今「誰が慰めて呉れるだらう」と叫んで居た所でした。すると、貴方の聲が聞えたんですよ。私は何だか奇蹟のやうな氣がする、ça tient presque à croire.（私は信仰を始めさうだ。）』

『En Dieu! En Dieu qui est là-haut et qui est si grand et si bon!?（神樣に依つて！　天に在します、偉大にして善良なる神樣に依つて？）ねえ貴方、私は皆貴方のお講義を諳記して居るでせう。マヴーリキイ・ニコラーエヴヰチさん、其の時分此人は en Dieu qui est si grand et si bon.（偉大にして善良なる神樣に就いて、）豪い信仰を說いて聞かせたものですよ。ね、貴方はコロムブスが亞米利加を發見した話をして下さつたが、記憶えて被坐して、衆皆が「嘘！

陸！」ッて叫んだッてえのを？　乳母のアリヨーナ・フロローヴナがね、あの後で夜に成つてから私は馬鹿にはしやいで、寐ながら「陸！陸！」と叫喚き續けたつて言ひましたよ。それからあのハムレット王子のお話をして下さつたが、記憶えてらして？それから又貴方は憐れな移民が歐羅巴から亞米利加へ移されたお話をして下さつたのね。でも、それは眞實ぢや有りませんでした。私は後で移民が搬ばれた話を發見しましたよ。でも、此人は其時分本當に美しい嘘ッぱちばかり話して下さつたのよ、マヴーリキイ・ニコラーエギーチさん！　嘘ッぱちでも其方が眞實の話より好かつたわ。まア如何して貴方はそんなにマヴーリキイ・ニコラーエギーチの顏を御覽に成るの？此人は地球上に於ける一番好い、一番綺麗な人ですよ。貴方も私が所好なやうに、此人を所好に成つて下さらなければ不可ませんよ。Il fait tout ce que je veux.（此人は私の頼むことなら何でもして呉れるのだ。）でも、ステバーン・トラフィモーギーチさん、貴方はそんなにして街の眞中で誰が自分を慰めて呉れるだらうなぞと喚んで被坐しやるからには、又不幸に違ひないでせう？不幸？左樣なの？左樣なの？』

『今は幸福です……』

『叔母さんが貴方に不好ないの？』と、彼女は相手に耳を籍さないで言ひ續けた。『あの女は毎もあの通りよ、意地惡で、曲つてよ、それでも矢張大切の叔母さんよ。あのお庭で、貴方が私の腕に身を投げ掛けて、私も貴方を慰めながら一緒に泣いたことを記憶えて被坐して——マヴーリキイ・ニコラーエギーチに心配は要りませんよ。此人は貴方のことなら何でもすツかり知つてますわ、最う随分以前からよ。何時迄も此人の肩に凭つて泣いて被坐しても、貴方の言ひ儘に立つてますよ……帽子を脱つて、些との間それをすツかりお脱りなさいよ、頭を擧けて、脊延びをして頂戴よ。私達がお別れに接吻したやうに、貴方の額に接吻したいんですもの。あの窓から若い女の人が私達を感心して見て居るのが見えて？さア最つと近く、近くよ。まア此の頭の白く成つたこと！』

で、鞍坪の上に屈みながら、彼女は老人の額の上に接吻した。

『さア貴方のお家へ行きませう！私何處だか知つてますよ。私から先へ最初の訪問をするのね、本當に片意地な方！其代り今度は全一日自宅に引留めて置きますからね。さ、被往しやい。そして、支度をして置いて下さい。』

かう言つて、彼女は伴侶の騎者と一緒に駈け去つた。私どもも戻つた。ステバーン・トラフィモーギーチは長椅子の上に坐つて泣出した。

『Dieu, Dieu !（神樣、神樣！）』と、彼は叫んだ。『Enfin une minute de bonheur !（到頭少しの間の幸福が來た！）』

十分間も經たない間に、彼女はマヴーリキイ・ニコラーエギーチに扈從されながら約束通りに遣つて來た。

『Vous et bonheur, Vous arrivez en même temps !（貴方と幸福と、二人が同時に著いた！）』彼は彼女を迎へに立上つた。

『さア貴方の許へ花束を持つて來ましたよ。今ね、シェヴリエー夫人の店へ行つたのよ。あの女は子供の誕生日に賣るとて冬でも花を藏つて居ますからね。これがマヴーリキイ・ニコラーエギーチよ。何卒宜しく。私花束の代りにお菓子を持つて來たかつたのよ。でも、マヴーリキイ・ニコラーエギーチがそれぢや露西亞式でないと言ふんですもの。』

マヴーリキイ・ニコラーエギーチは砲兵大尉で、年齢は三十三、身丈の高い好男子で、點の打ち處のない程服裝が整然として、凛々しい、一寸見ると威かつい顏附をして居た。で、實際は不思議な程優しい親切氣を有つて居たが、禦意に成つた當座は何人にもそれが判らなかつた。年併彼は無口で、非常に落着き拂つて居た、友達を捧へ

ようとも思はなかつた。後に成つて、私どもの仲間では彼を餘り悧巧でないやうに言つたが、それは全然當つて居なかつた。

私はリザベータ・ニコラーエヴナの美しさを說かうとは企てまい。町中が其話で持ち切つて居た。尤も、夫人や娘達の中には腹を立てながら、それに反對して居る向きも有つた。殊に彼女が傲慢だと云ふので、疾くも彼女を憎む手合も有つた。ドロズドフ家では未だ答禮廻りを始めなかつた。實際、後れた理由はプラスコーギヤ・イヴーノヴナの病身のために有つたけれど、それが又皆の感情を害したらしい。彼等は又彼女が知事夫人の親類だと云ふので、次には又彼女が毎日馬に乘つて出歩くと云ふので、彼女を憎んだ。私達は是迄若い婦人が馬に乘つて歩くのを見たことがない。リザベータ・ニコラーエヴナの馬に乘つた姿と答訪を怠つたことが一緒に成つて、田舍の交際社會の機嫌を損ねたのは、只最う當然と云ふ外ない。而も彼女が醫師の勸告に依つて馬に乘つて歩くのだとは、誰も彼も知つて居た。そして、彼女の病氣を冷笑的に話合つた。實際、彼女は病氣なのだ。一目見て私の氣が附いたのは、彼女の異常な神經質的な絕間のない焦燥しさで有つた。あはれ、此娘は氣の毒にも大層不幸な身で有つた。後に成つて何も彼も解つた。今、其時分のことを想出して見るに、あの頃私に見えた程美人ではなかつたらしい。恐らく彼女は些とも綺麗ではなかつたのだ。身丈高で、痩ぎすで、でも、何處か確乎として矯やかでは有つたが、顏の線の不規則なのが人目に立つた。眼はカルマック（蒙古種族）のそれの樣に、幾許か斜に引釣つて居た。顴骨が高くて、蒼白い薄ッぺらな顏だが、何處か人を征服する、惹附けるやうな或物が有つた。其の黑い眼の燃ゆるやうな光の中には、何か力ある或物が有つた。彼女は毎も勝ち矜つた女王のやうに、又其勝利を擴げて行くやうな態度をして居た。彼女は毎も氣位が高かつた、時には橫柄にさへ見えた。私は彼女が能く親切で有り得たか如何かを知らない。が、親切にしたがつて居たことは知つて居る。で、少許でも親切にしようと恐ろしく努力して居た。實際、彼女の性格の中には、澤山の美しい衝動や、善良な要素が有つた。が、何れも此れも絕えず平衡を得ようと求めながら、それを見出し得ないで居たらしい。總てが混沌として、雜然として、不安の中に有つた。恐らく自分に求むる要求が嚴格に過ぎて、それを滿足させるだけの力を如何しても自分の中に見出し得なかつたので有らう。

彼女は長椅子に腰掛けて、室の中を見廻した。

『如何して私は毎も斯んな時に悲しく成るんでせうね。貴方は學者だから此の不思議を說明して下さいな。私貴方のお目に懸つたら、何も彼も想出して、何んなに嬉しいだらうと、そればかり思つて居たのに、今と成つて見ると、如何したのやら些とも嬉しくないのね、私本當に貴方を愛して居るんだけれど……まア如何でせう！ 此人は私の肖像を壁に懸けて！ 一寸それを取つて下さい。私おぼえてますよ、記憶えてますよ。』

十二歲のリザの水彩畫で描かれた、精巧な縮畫は、九年前に彼得斯堡のドロズドフ家からステパーン・トラフィモーギチの許へ送られた。それ以來、彼はずつとそれを壁に懸け通して來た。

『私こんな綺麗な兒だつて！ これが本當に私の顏でしたらうか。』

彼女は立上つて、其の肖像畫を手に持つたまゝ鏡の中を覗き込んだ。

『急いで脫つて下さい』と、彼女は肖像畫を返しながら叫んだ。『これから最う懸けて置いちや可厭よ。私見たくないもの。』彼女は再び長椅子に腰掛けた。『一つの時代が終つて、次の時代が始まる、それが又終つて——第三の時代が始まる、斯んな風に私達の生活も際涯がないのね。そして、一番お終ひは皆鋏でちよん切られた樣に成るのね。何て古臭い事を私は言つてるのでせう！ でも、其中には澤山の眞理が有るんですね。』

彼女はにつこり笑ひながら私を見た。前にも何度か私を見た。が、ステパーン・トラフィモーギーチは昂奮して居たので、私を紹介するのを忘れて居た。

『で、何だつて貴方は私の肖像をこんな短劍の下に掛けて置くの！　又何だつて貴方はこんなに澤山短劍だの長劍だのを持つて被坐しやるの？』

譯は私にも解らないが、彼は事實として二口の組合せた短刀と、生粹のサアカッシヤの長劍とを壁の上に懸けて置いた。彼女はこんな質問を發しながら、眞當面に私の顏を眺めた。私は返辭をしようかと思つた。が、又躊躇して止めた。ステパーン・トラフィモーギーチは漸と氣が附いて私を紹介した。

『知つてます、知つてます』と、彼女は言つた。『まアお目に懸つて嬉しいこと。母が貴方のことも隨分お噂を聞いてますよ。私に又マヴーリキイ・ニコラーエギーチを紹介させて下さいな、此人は立派な方なんですよ。私は前から貴方を面白い方だと思つて居たんですわ。貴方はステパーン・トラフィモーギーチの親友でせう、何でも打明けられてる方でせう？左樣ぢやなくつて？』

私はやゝ赧く成つた。

『あッ何卒御免なさい。私は大變惡いことを言ひましたのね。いえ、決して可笑しいと云ふ譯ぢやないのよ、只一寸……』彼女は狼狽して顏を赧らめた。『それに貴方を立派な方だと言つたとて、別に恥かしがることはないと思ひますわ。さア、最う歸りませうね、マヴーリキイ・ニコラーエギーチさん。では、ステパーン・トラフィモーギーチさん、小半時もしたら屹度被入しやいね。まア嬉しい、お話することが澤山有りますよ。これからは私が貴方の親友よ、何でも打明けられる人よ、何でも彼でもね、お解りに成つて？』

ステパーン・トラフィモーギーチはそれを聞くと、急に顏色を變へた。

『あゝ、マヴーリキイ・ニコラーエギーチは何でも知つてるんですよ。些とも構はないのよ。』

『な、何を知つてるんですか。』

『まア、如何なすつて？』と、彼女は吃驚して叫んだ。『ぢや、あの人達が隱して居ると云ふのは眞實なんだわ！何うも眞實とは思へない！ダーシャも隱されたんだわ。叔母さんは今日私がダーシャに會つちや不可ないと云ふのよ。頭痛がするんですとさ。』

『併し……貴方は如何して聞き出したか。』

『をやツ、何人でも知つてますわ。別に巧者も何も要らないわ。』

『が、何人でも知つてると云ふやうな……』

『えゝ、左樣ですとも。阿母さんは始めにアリヨーナ・フロローヴナといふ私の乳母から聞いたんですよ。彼女は又貴方の許のナスターシャから聞いたのですよ。貴方はナスターシャにお話なすッたんぢやないの？あの女は貴方御自身の口から聞いたと言ひましたよ。』

『私は……私は一度だけ言ひました』と、ステパーン・トラフィモーギーチは眞靑に成りながら口籠つた。『併し……只表面の事を一寸言つたばかりだ……（私はあの時非常に神經が昂奮して、病氣だつたので、それに）……』

彼女は笑つた。

『それに貴方の御親友が傍に被坐しやらなかつた。そこへナスターシャが來合せたのでせう。最う解りましたよ。

で、あの女は町中觸れ廻したのね。さ、そんな事は最う如何でも可いわ、知つてる奴には知らして置くが可い、其方が結局都合が好いわ。急いで被入しやいね、自宅では夕御飯が早いのよ……あッ忘れた』と、彼女は再び椅子に腰掛けながら附け足した。『一體、シャトーフとは何んな人なの？』

『シャトーフ？ダーリャ・バブローヴナの兄弟ですよ。』

『えゝ、それは知つてるのよ。實際、何んな人ですか』と、彼女は急き込んで言葉を挟んだ。『何んな風の人だか聞きたいのよ。一體、何んな質の人？』

『C'est un penseur creux d'ici. C'est le meilleur et le plus irascible homme du monde.（そりやア此處の空想家ですよ。世界中で一番善い、又一番慣りツぽい人間ですよ。）』

『一寸變な人だとは聞きましたよ。が、そんな事何ふ積りぢやアないわ。あの人は三箇國の國語に通じてるんだ相ですね、其一つは英語で、文學的な仕事も出來るんですつてね。左樣すりや、私はお願ひしたいことが澤山有るのよ。誰か手傳つて呉れる人が欲しいのですがね、早ければ早いだけ可いの。あの人は遣つて呉れるか、如何でせう？私は何からあの人を推薦されたのよ。』

『えゝ、大丈夫遣りませう。Et vous ferez un bienfait（貴方は功德を爲さるんですよ。）』

『私は bienfait（功德）の積りで爲るんぢやなくつてよ。手傳ひが入用なのよ。』

『私はシャトーフ君を好く知つてますが』と、私は口を出した。『若し私が使者に行つて宜しいのなら、今から直ぐ參りますよ。』

『明日の朝十二時に私の許へ來て呉れるやうに言つて頂戴な。まア旨く行くこと！何うも有難う。マヴーリキイ・ニコラーエヴイーチさん、さア出掛けませうね。』

二人は行つて仕舞つた。私は云ふ迄もなくシャトーフの許へ駈け着けた。

『Mon nuit!（ねえ、君！）』と、ステパーン・トラフィモーヴイーチは階段の上で私に追着きながら言つた。『十時か十一時頃、僕が歸つて來る時分には、是非とも僕の許へ來て呉れ玉へ。實際、僕は君に對しても、又他の人に對しても、濟まない事ばかりしたよ。』

八

シャトーフは自宅に居なかつた。二時間經つてから又訪ねて見た。未だ歸つて居なかつた。最後に、今度留守だつたら書置きして來る積りで、八時頃に又出掛けた。矢張駄目だつた。彼の室はぴたりと閉つて居た。彼は雇人なしに只一人で暮して居た。私は一寸レビャードキンの許へ行つて、シャトーフのことを訊いて見ようかと思つた。が、下の室も矢張閉つて居た。宛然空屋のやうに燈火一つ射さなければ、物音一つ聞えない。私は其日聞いた話を想出して、好奇心からレビャードキンの扉口の前を通つて見た。到頭、私は明日の朝早く來ようと決心した。實を言へば、私は書置をして置いた位ぢや安心が出來なかつたからだ。シャトーフはそんな物に頓着しないかも知れない。彼は並外れて頑固な含羞家で有つた。で、私が入口を出ようとした時、不意にキーリロフ君と衝き當つた。彼は家に這入る處だつた。私よりも前に先方で氣が附いた。彼が私に話掛けた時、私は事の次第を話つて、且つ書置まで書いて持つてることを話した。

『まア お這入りなさい』と、彼は言つた。『私が何も彼もして上げますよ。』

リーブティンが言つたやうに、彼は其朝から構内の木造小屋を借りて住つて居た。小舎は一人では廣過ぎたが、彼の用を足して呉れる孀の婆さんも其中に棲んで居た。此家の持主は他の町の新しい家に移つて、そこで料理店を出して居た。婆さんは其の親類の者だが、元の家の何や彼やを番するために後に殘されたものらしい。小舎の中の室々は可成清潔して居た、尤も壁紙は汚れて居たけれど。私達の通つた室の道具は、此處彼處で買ひ集めた不揃ひの品ばかりで、全然値の踏める代物はなかつた。骨牌卓子が二脚、接骨木で造つた簞笥、何處かの百姓の家から持つて來たやうな、大きな樅板の食卓、それに脊が格子に成つた、革の堅い椅子と長椅子とが有つた。片隅に昔風な神の畫像が有つて、其前に婆さんは私達の這入つて行く前に最う燈火を點けて居た。壁の上には二枚の煤けた油畫が懸つて居た。一つは明かに千八百二十年から三十年の間に畫かれたニコラース一世の肖像で、他は何處かの僧正の肖像で有つた。キーリロフは蠟燭を點けて、未だ括られたまゝ片隅に置いて有つた鞄から封筒と護謨糊と硝子の封印とを出して來た。

『其の書附封じて、封筒に宛名書いて下さい。』

私はそれに及ばないと言つたが、彼は何處までも遣れと言つた。で、私は封筒に宛名を書くと、直に帽子を手に取つた。

『貴方は茶を飲んで行かれるでせうと思ひましたよ』と、彼は言つた。『私は茶を煎れさせました。一つ飲んで行きませんか。』

私は斷り切れなかつた。婆さんは直ぐお茶を持つて來た。卽ち煮立つた湯の入つた大きな茶瓶と、濃いお茶の入つた小さな茶瓶と、粗い繪を畫いた二つの大きな陶器の茶碗と、麪包菓子と、角砂糖を入れた深い牒とを持つて來た。

『私は夜お茶を飲むが所好です』と、彼は言つた。『私は澤山歩いて、夜明まで飲んで居る。外國では、夜お茶を飲むが不便ですよ。』

『貴方は曉方に寢るんですか。』

『毎でも、最う長い間ですよ。私は少許しか喫べない、毎でもお茶ばかり飲んで居る。リーブティンは狡いが、短氣ですね。』

私は彼が談話をしたがつて居るのに驚いた。で、此の機會を利用して遣らうと決心した。『今朝は何うも不愉快な行違ひが有りましたね』と切出した。

彼は顏を蹙めた。

『あれは馬鹿な話ですよ。眞個下らない。レビャードキンが醉拂つて居るから、皆無意味です。私はリーブティンと談話をした譯でない、あの人が餘り間違へてばかり居るから、私が其の無意味なことを說明して遣つたばかりです。リーブティンは澤山想像力を有つて居ます。あの男は何にもない處から山を建てました。私は昨日リーブティンを信用して居りました。』

『で、今日は私をですか』と、私は笑ひながら言つた。

『併し貴方は何でせう、貴方は最う今朝皆聞いて知つたでせう。リーブティンは狡猾い、でなければ短氣だ、でなければ惡意が有る、でなければ……嫉妬心が深い。』

最後の言葉で、私はぎくりとした。

『貴方は澤山形容詞を並べましたね。それだけ擧げりや、何れか此れか一つは當るでせう。』

『でなければ、皆一緒に有つて居る。』

『左樣です、實際リープティンは混沌ですよ。今朝もあの男は嘘を言ひましたね、貴方が何か書いて被坐しやるなぞと言つて――左樣ぢや有りませんか。』

『何故左樣です』と、彼は再び顔を蹙めて、床を見詰めながら言つた。

私は辯解をした、別段聞きたがる譯ではないと念を押した。彼は赧く成つた。

『あの人の言つたのは眞實です、私は今書いて居ます。が、そんな物は何でも有りませんよ。』

二人は少時默つて居た。彼は急に又子供らしい微笑を泛べた。

『あの人はそれも頭で拵へました。が、何うも解釋の仕樣が悪い、皆解つて晃れない。私は只如何して人間が自殺し得ないか、それを調べて居る。それだけです。で、何でもないのです。』

『人が自殺し得ないとは如何いふ意味ですか。隨分自殺するぢや有りませんか。』

『いや、殆ど自殺しない。』

『本當に左樣考へて被坐しやいますか。』

彼は返辭をせずに立上つて、ほんやり考へに沈みながら、彼方此方歩き出した。

『では、人の自殺を妨げるものは何だとお考へですか』と、私は訊ねた。

彼は二人が何を話して居たのか頻に想出さうとするやうに、ぼかんとして私の顔を眺めて居た。『僕は……未だ熟く知らない……二つの偏見が人間を妨けて居るやうだ。二つのもの、只二つ――一つは極めて小さい、一つは極めて大きい。』

『小さい方は何です。』

『苦痛。』

『苦痛？そんな場合に、それが重要なことでせうか。』

『大いに重要ですね。で、自殺する人間にも二種有りますよ。一つは非常な悲しみとか、恨みとか、狂人に成るとか、其他何でも可いが……そんな原因から自殺する者は急に遣附けます。殆ど苦痛といふこと考へない、不意に自殺します。併し或者は理性から自殺する――そんなのは大いに考へる。』

『何ですつて、理性から自殺する者が有るでせうか。』

『澤山有ります。迷信といふものがなかつたら、最つと有りますよ。最つと澤山、悉皆。』

『なに、悉皆ですつて？』

彼は返辭をしなかつた。

『だが、苦痛なしに死ねる方法が有りやしませんか。』

『想像して御覽なさい』――彼は私の前に立停つた――『大きな家位の大石を想像して御覽なさい。それがぶら下つて居る、貴方は其下に居る。其石が落ちたら、頭の上へ落ちたら、貴方は苦痛を感じませうか。』

『家位の大きな石？勿論、そりやァ怖ろしいでせうよ。』

『私は怖ろしいか訊いて居るんぢやない。只苦痛を感じませうか。』

『百萬噸も重さの有る山のやうな石？勿論苦痛なぞ感じませんね。』

『併し實際そこに立つて、それが頭の上にぶら下つて居る間は、苦痛を感じるだらうと大變心配しますよ。何んな博學な人でも、何んな偉いお醫者でも、皆が皆怖かながりますよ。何人でも苦痛を感じないといふことは知つてませう。そして、何人でも苦痛を感じるだらうと思つて怖がるでせう。』

『うむ、で第二の原因は、大きい方は？』

『あの世。』

『罰が怖ろしいと云ふのですか。』

『そんな事如何でも構はない。只あの世、あの世だけ。』

『あの世と云ふものを全然信じない無神論者が有りやしませんか。』

彼は又返辭をしなかつた。

『貴方は多分自分から推して判斷して被坐しやるのでせう。』

『何人でも自分から推して判斷する外はない』と、彼は緩く成りながら言つた。『生きて居やうが居なからうが、同じだと云ふやうに成つた時、完全な自由が有るのでせう。それが有らゆる人間の目標です。』

『目標？が、左樣成つたら、何人もわざ〳〵生きて居る者はないでせう？』

『何人も生きて居ないです』と、彼はきッぱり言ひ切つた。

『人は生を愛するから死を怖れるんです。私は左樣解釋して居ます』と、私は言つた。『そして、それは自然に依つて決定されて居るのですよ。』

『それは下劣だ。そして、其處から虛僞が這入つて來るのです。』彼の眼は閃いた。『生は苦痛である、恐怖である、人間は不幸で有る。今人が生を愛するのは、人が苦痛や恐怖を愛するからで有る。と、左樣いふことに成つて仕舞つた。此處に虛僞が有る、生は苦痛と恐怖のために與へられたと云ふのは虛僞で有る。で、人間は未だ達すべき處に達して居ない。今に幸福な、矜りを有つた新しい人が出ませう。左樣いふ人に取つては、生きて居やうが居なからうが同じ事で有る。其人は新しい人ですよ。苦痛と恐怖とを征服する人は彼自身神に成る。そして、此の所謂神は存在しなく成る。』

『では、所謂此の神は貴方に言はせると存在しないのですね。』

『彼は存在しない、けれども彼は有る。石には苦痛がない、けれども石の恐怖には苦痛が有る。神は死の恐怖の苦痛です。苦痛と恐怖とに打勝つ人は彼自身神に成るのです。左樣成れば、新しい生が來る、新しい人が出る、何でも皆新しく成る……つまり歷史は二つの部分に別れる、大猩々から神の滅亡まで、神の滅亡から……』

『大猩々まで？』

『……此世と人間の物質的改造に至るまで。人は神に成る、そして、物質的にも改造される。世界も改造される、萬物皆改造される、思想も、有らゆる感情もですよ。貴方は如何思ひますか、人間は其時物質的にも改造されるでせうか。』

『生きて居るのも死ぬのも同じ事なら、皆死んで仕舞ひませう。それが恐らく改造でせうよ。』

『それは如何でも可い。が、虛僞は殺されますよ。最高の自由を望むものは、敢て自殺しなければ成らない。敢て自殺するものは、虛僞の祕密を見破つたのですよ。其外に自由はない。それだけだ、其外に何にもない。自殺を敢てするものは神ですよ。で、總ての人が自殺し得たとすれば、此世に神といふものはない、何にもない。併し未

だ一人もそれを敢てし得たものがない。』

『數百萬の自殺が有つたぢや有りませんか。』

『併し皆其の爲ぢやない。皆怖れながら自殺した、併し其の爲ぢやない、怖れを殺すために自殺した者ばかりが、直に神に成るのですよ。』

『恐らくそんな餘裕がないのでせう』と、私は言つて見た。

『そんな事は如何でも可い』と、彼は落着き拂つて、殆ど馬鹿にしてるかと思はれる程徐かに言つた。『貴方は何うも笑つて被坐しやるやうだね』と、半分間も經つてから附け足した。

『今朝あんなに苛々して被坐したのに、今は是程落着いて居られるのは、何うも不思議ですね。尤も熱心には話してお坐だけれど。』

『今朝ですか。今朝は妙でしたよ』と、彼は莞爾しながら答へた。『私はがみ〳〵言ふのが嫌ひですよ。又決して笑はない』と、黯然として附け加へた

『左樣、貴方は毎夜茶を飮んでも餘り愉快ぢやない樣ですね。』

私は立上つて帽子を取つた。

『貴方は左樣思はないのか』と、彼は一寸吃驚したやうに微笑した。『何故？いや、私は……私は知らない。』彼は急に混亂して來た。『私は他人が如何いふ風だか知らない。他人は皆考へる、直に又他の事を考へて居る。私には他の事が考へられない。私は始終一つ事を考へて居る。神は是迄始終私を苦しめたものだ』と、彼は不意に吃驚するやうな飛躍をしながら談話を結んだ。

『それから一寸伺ひたいのですが、如何して貴方は露西亞語を正しくお使ひなさらないのですか。屹度外國に五年も被坐したからお忘れに成つたのでせうね？』

『私が正しく饒舌らない？私は知りませんよ。いや、そりや外國に居た爲では有りません。私は始終斯んな風に話して來た……そんな事私には如何でも可い。』

『では、最う一つ伺ひます。これは一層立入つた話ですがね。私は確に貴方が人と會ひたがらない、滅多に談話をしない方だと信じて居ますが、如何して今夜は私と談話をなすつたのでせうね？』

『貴方にか。今朝貴方は大層品好くして被坐した。いや、それは如何でも好い……貴方は私の兄に大層好く似て居る、非常に似て居る』と、彼は顏を顰くしながら附け足した。『兄は七年前に死にました、最つと〳〵、ずつと年老つて居た。』

『兄さんが貴方の思想に大分影響してるやうに見えますね。』

『い、いや、兄は少しも物を言はなかつた、何にも言はなかつた。私は貴方の書置を屆けませうよ。』

彼は角燈を持つて門迄私を送つて來た。私の出た後で鍵を懸けるためで有る。『勿論、此男は狂人だ』と、私は心に決した。門口で私は又別な男に遭逢した。

九

門口の高い閾に足を掛けた時、不意に力強い手がむづと私の襟を摑んだ。

『誰か』と、其奴が叫喚いた。『敵か味方か、白狀しろッ！』

『仲間の一人だ、仲間の一人だ！」と、リーブティンの聲が近くできいくゝ言つた。『G――ν君と云つて、古典的教育を受けた、上流社會にも緣邊のある青年だよ。』

『社會へ出た男なら、僕は所好だ。古典……てえのは、高等教育を受けたと云ふことぢやらう。退職大尉レビャードキンは世の中のために、仲間のために何でも爲るぞ……仲間の奴等が眞正でさへ有りや、ま、眞正でさへ有りや、あの破落戸どもが。』

大尉レビャードキンは身の丈六尺に餘り、巖疊な、肉附の好い男で、縮れ毛に赫ら顏をして居たが、私の前に立つて居るのも危ない程、ぐでん〳〵に醉拂つて居た。舌も能くは廻らなかつた。私は以前にも遠方から彼を見たことが有つた。

『で、此奴が！』と、彼は角燈を持つて靜乎と立つて居るキーリロフに氣が附くと、又吠え出した。一旦拳を振上けたが、直に又下に卸した。『貴樣は物識だから宥して遣るよ。イグナット・レビャードキン……高等、教、育の有る……

「愛の爆烈彈、イグナットの胸で、
胸で爆ぜるよ、その辛さ。
セヴストボールで腕切つた時に、
泣いた涙を、此處で泣く！」

だけど、俺セヴストボールへ行つたことはないんだ、腕切つたこともないんだ。併し歌ツてえものは、何んなものだか知つてるだろ。』彼は又私の前へ醉ひどれた醜い顏を突出した。

『此人は急いでるんだ、自宅へ歸る處だよ』と、リーブティンは彼を止めようとした。『明日此人がリザベータ・ニコラーエヴナに話すよ。』

『リザベータ！』と、彼は再び咆吼した。『待て、行くな！ グリエーション（變唄）だぞ。

「アマゾンの乙女の中でも、
あれは花形、馬で行く。
馬の上から此方見て笑ふ、
あゝ、貴――族――の子、
星のアマゾン」

讃美の歌だよ。ねえ、君、讃美歌だよ。君が馬鹿でなけりや解る筈だ。古屑買ひにや解らない。待て！』

私は力の限り拂ひ除けたが、到頭上衣の端を摑まれた。

『あの女に言つて呉れ、俺は騎士だと、名譽の魂だと。それからダーシャだが……俺は彼女を二本の指で摑んで、ぎやフ〳〵吠えさせて見るよ……彼女は奴隷だ、何が出來るかい……』

此時私は力任せに引離したので、彼はどさりと倒れた。私は街の上へ駈出した。リーブティンも後から跟いて來た。

『アレキセイ・ニーリイチ君が如何にか爲ますよ。ねえ君、僕は只今彼奴から大變な事を聞き出したよ。』彼は無性に急いでぶつ〳〵言つた。『彼奴の歌を聞きましたかい。あれを封筒に入れて、「星のアマゾン樣へ」として、自分の名前を麗々と書いたまよ、明日リザベータ・ニコラーエヴナへ送らうツてんだよ。何といふ野郎だい！』

『君が彼奴を唆かしたんだらう、僕は賭でもするよ。』

『賭けても可いが、君が負けるよ』と、リーブティンは笑つた。『彼奴は惚れて居るんだよ、猫のやうに惚れて居るんだよ。それが如何だい、最初は憎惡から始まつたんだからね。彼奴はリザベータ・ニコラーエヴナが馬に乘つて歩くと云ふので、非常に憎らしがつて居た。それこそ往來の眞中でも大聲に罵り兼ねなかつたのだよ。實際彼奴は遣つたね。一昨日のことだ、彼奴は女が馬に乘つて通つた時、背後から惡態を吐いた――好い鹽梅に先方へは聞えなかつたがね。で、今日は不意に――宛然詩だね！彼奴はあんな申込み迄しようと云ふ勢ひだ、眞面目に、大眞面目に！』

『君は實に不思議だよ、リーブティン君、何か知ら可厭な事が有ると、君は屹度其場に居て先頭に立つてるぢやないか』と、私は腹立たしげに言つた。

『そりやア口が過ぎるね。何かい、氣の小さい君のことだから、戀敵の怖ろしさに顫えて居るのぢやないか。』

『なにッ！』と、私は立停つて叫んだ。

『うむ、今度は君を罰するために、これ以上何も言つて遣らない。併し君の方ぢや最つと知りたいのだらう！まアこれだけ呑込んで居玉へ、あの無頼漢も今後は普通の大尉ぢやアない、此州の地主だよ、而も却々大した地主だよ。と云ふのは、此間ニコラーイ・フシェヴォロードギーチは自分の所有地を悉皆あの男に賣つたのだよ。昔なら二百人の農奴が居た地面だね。神樣も見てお坐だ、僕は嘘は吐かない。僕も只今聞いたのだ。が、極めて信用の置ける筋から聞いたのだよ。さア今度は君が自分で探り玉へ。僕は最う何にも言はない、左樣なら。』

十

ステパーン・トラフィモーギーチはヒステリイ性の苛々しさで私を待つて居た。彼が歸宅してから一時間にも成るさうな。私は彼を酩酊に似たやうな狀態に於て見出した。最初の五分間といふもの、私は眞個彼を醉拂つて居るんだと思つた。あゝ、ドロズドフ家の訪問は最後の打擊で有つたのだ。

『Mon ami！（ねえ君！）僕は全然絲口を失つた……リザ……僕は今でもあの子を天使のやうに尊敬もすれば愛しても居るさ。今でも元の通りにだよ。併しあの連中は單に僕から何物かを引出したいばッかりに、そして何物かを引出したら、後は一昨日來いと抛り出すために僕を招び寄せたとしきや思はれんのだよ……先づ左樣云つた有樣だよ。』

『何を言ふのです！』と、私は叫ばずに居られなかつた。『迚も、我慢して聞いちや居られない。』

『ねえ、君。僕は最う眞個一人だよ。Enfin, c'est ridicule.（要するに滑稽な譯さね。）如何だい、君、あの家も宛然謎に包まれて居るんだよ。あの連中は突如僕に飛びかゝつて、根掘り葉掘りいろんな事を訊くんだね。彼得斯堡時代の隱れた噂に就いても、如何だ、如何だと迫るんだよ。あの連中は四年前にニコラースが此町で演じた惡戯も、此處へ着く迄は丸切り聞いて居なかつたんだね。「貴方は此處に居て目擊したのだ、あの人が狂人だといふのは眞實か」と訊くんだよ。何處でそんな事を聞き出したのか、僕には解らない。で、又如何してプラスコーギヤは彼樣にニコラースを狂人にしたがつて居るんかね。あの女は左樣したいのだよ。左樣したいのだとも。あのモオリスでない、何とか云つたね、あの男の名は？左樣々々、マヴーリキイ・ニコラーエギーチ、brave homme tout de même（兎に角正直な男だよ）……あの男のためかい、それが？で、又如何してあの女は巴里から cette pauvre amie（自宅の憐れな友）の許へあんな手紙を寄越したのかね。……Enfin,（要するに、）此のプラスコーギヤは――自宅の友が

喚ぶ處に從へばだよ――ゴーゴルが不朽の作『小箱夫人』の型だね。只あの女の方が一層怨念の強い、一層惡意の有る、特に一層誇大した形式に於ける「小箱夫人」だよ。』

『一層誇大した形式に於ける小箱だとすれば、差詰め長持のやうな大箱に成る譯ですね。』

『いや、そりや恐らく逆樣だね。が、そんな事は何方でも可いんだ。只交ぜッ返さずに聞いて呉れ玉へ、僕は最う頭が渦の樣に亂れて居るんだよ。彼處の連中は皆喧嘩腰で居る。勿論リザだけは左樣でないがね。あの子は毎も叔母さん〳〵と言つて居る。が、リザも悧巧だからね。何うも其背後に何か有るらしいんだよ。祕密！あの子は老夫人と喧嘩したさうな。成程自宅の叔母さんは衆皆を虐待するがね、併し周圍には知事の夫人が有り、田舍の粗野な交際社會が有り、カルマーヂノフの無作法が有るんだからね。それに又此の狂氣といふ考へ――(ce Lipoutine, ce que je ne comprends pas（あのリープティン、あれは僕には解らない）……それにあの女は頭に醋酸を貼つて居たと云ふことだ、それに僕等は斯うして不平を言つて坐つて居る……あゝ、僕は何んなにあの女の心を苦しめたか知れない、而もこんな時にだよ。Je suis un ingrat.（僕は恩知らずだ！）まア如何だらう、僕は歸つて來て、あの女の手紙を見附けたんだよ。讀んで呉れ玉へ、此手紙を讀んで呉れ玉へ！あゝ、僕は眞個恩知らずだ！』

彼は今ヴルヴーラ・ペトローヴナから受取つた手紙を私に見せた。彼女は「自宅に被坐しやい」とばかり書いた最後の手紙を後悔して居るらしい。其手紙は簡單な、有無を言はせないものでは有つたけれど、又極めて親愛な調子に充ちて居た。彼女は明後土曜日の十二時に自分の許へ來て呉れるやうにステパーン・トラフィモーヰチを招待した。そして、一緒に友達の一人を連れて來るやうに勸告した。私の名が括弧して書いて有つた。彼女の側では又ダーシャ・パブローヴナの同胞として、シャトーフを招待すると約束した。『貴方は相手の女から最後の返辭が得られませう。それで十分でせうね。貴方が彼樣に氣に懸けて被坐した儀式はこれぢや有りませんか。』

『此の儀式云々といふ處の苟々した文句を見て呉れ玉へ。可憫相なものだ、わが生涯の友は可憫相なものだ！僕は白狀するがね、僕の將來が斯う急に決定したといふことは、殆ど僕を粉碎したよ……實際のところ、僕は未だ希望を持つて居た。が、今は最う tout est fini（萬事終れりだよ。）僕は覺悟して居る。C'est terrible.（そりやア怖しいものだよ。）あゝ、其の日曜が永久に來なかつたら――左樣すりや、何も彼も元々通りに行くんだらうにねえ。君も續いて訪ねて來て呉れるだらうし、僕も此處で……』

『何うも貴方はリープティン君の言つた、あんな蔭言のために、すッかり顫動して仕舞はれた樣ですね。』

『あゝ、君は又友情の指で他の瘡口に觸れて呉れたね。左樣いふ友情の指は慨して殘酷なものだよ、時としては不道理なものでも有るよ。Pardon.（御免なさい。）だがね、斯う言つたら信じられないかも知れぬが、僕は最うあんな噂や蔭言なぞ殆ど忘れて仕舞つたよ。僕はリザの許に居た間、如何かして幸福に成らうと努めた、又幸福だとも思つた。馬鹿だね。處が、今は……あゝ、今は永い間僕の厭ふべき缺點を辛抱して呉れた、あの寬大な、人情に篤い婦人のことを考へて居るよ。いや、全然辛抱して呉れたと云ふ譯ぢやないがね。併し僕自身は如何だい、僕の空虛な、無價値な性格は如何するんだい！僕は宛然馬鹿な子供だよ。而も子供の利己主義は悉く有つて居ながら、子供の無邪氣な所は一つもない。二十年間といふもの、あの女は保姆のやうに僕の面倒を見て呉れた、リザの所謂 notre pauvre（あの憐れな）叔母さんがだね。で、二十年後、其子供が結婚したいと言出した。そして、あの女が頭を醋酸で抑えて居る時、手紙又手紙と書いて送る……今や彼は其目的を達した――日曜日に、僕は最う結婚した男に成るのだ。そりやア戲談ぢやないよ。何と思つて僕はあんな事を主張したらう、何と思つてあんな手紙を書い

たらう？私は最う忘れて仕舞つた。リザはダーリャ・パブローヴナを崇拜して居る、少くとも左樣言つて居る。あの子はダーシャのことを「c'est une ange,（あれは天使だ、）只少し默つて居る方だけれども」と言つたよ。あの連中は皆僕に忠告した、プラスコーギヤですら……いや、プラスコーギヤは僕に忠告して呉れなかつた。あゝ、あの「小箱」の中には何んな毒が隱されて居ることだらう！又リザも本當に忠告して呉れた譯ぢやない。あの子は「何のために貴方は結婚なぞ爲さるの？貴方には智識上の快樂で十分ぢやないの」と言つて笑つた。僕もあの子の笑つたのは宥して遣る、あの子の胸には痛みが有るんだからね。「だけど、貴方は女なしに居られないでせう」と、あの連中は僕に言つた。「老年の衰へが貴方の上に加はつて來た。其時はあの女が貴方を包んで呉れませう」と云ふやうなことをね……ma foi,（實際）僕も君と相對して居る間、始終、波風騷がしい一生の終りに、天があの女を僕に下し賜はるのでないか、あの女が僕を包んで呉れるぢやらうと云ふやうなことを考へて居たよ。要するにあの女は家を遣つて行くには便利だからね。まア此の亂次もない塵埃を見て呉れ玉へ。これでも、今朝掃除をするやうに言つて置いたのだがね。あゝ、此の床の上の本を見て呉れ玉へ。La pauvre amie（あの憐れな友）は始終此家が不潔だといふので怒つて居たよ……あゝ、今後は最う此家であの女の聲も聞かれまいよ。Vingt ans!（二十年か！）で、あの連中は幾本も無名の手紙を受取つて居るらしいのだね。それで如何だい、ニコラースがレビャードキンに所有地を賣つたと言ふんだよ。C'est un monstre.（眞個亂暴な話だね。）Et enfin,（で、要するに、）レビャードキンといふのは何者かい。リザは聽いて居る、聽いて居る、耳を傾けて聽いて居る！僕はあの子の笑ふのを宥して遣つた。僕はあの子が聽いて居る時の顏を見た。で、あのモオリスは……僕も最うあんな男の代りに成らうとは思はない。正直な男は男だが、少し含羞家だ。が、あの男なぞ如何でも可い……』

彼は漸つと話し止んだ。彼は勞れて、顚動して、倦怠さうな眼に凝乎と床を見詰めたまゝ、頸垂れながら坐つて居た。私は此の中斷を利用して、フィリポフの家を訪ねた顚末を語つた。そして、手短かに冷淡に、レビャードキンの妹――私は一度も見たことはないが――はリープティンの所謂彼の暗黑時代に於て、何日か如何にかしてニコラースのために犧牲にされたものらしい。そして、レビャードキンが或理由の下にニコラースの手から或額の金子を貰つたと云ふことも事實のやうだ。が、總てそれだけの事で有るといふ私の意見を發表した。ダーリャ・パブローヴナに對する蔭言に至つては、全然取るに足らない。盡くリープティンの畜生の誣言である。少くともアレキセイ・ニーリィチは熱心に左樣主張して居るのだ、而も吾々はそれに反對する理由を有たない。ステパーン・トラフィモーギーチは私の證言が彼に關係したことではないやうに、氣のない容子で、ぼんやり耳を傾けて居た。私は序ながらキーリロフと交へた會話を取次いだ。そして、あの男は狂人に違ひないと附け足した。

『あの男は狂人ぢやない、只世の中にある淺薄な人間の一人だ』と、ステパーン・トラフィモーギーチは口の中で呟いた。『Ces gens-là supposent la nature et la société humaine autres que Dieu ne les a faites et qu'elles ne sont réellement.（彼樣いふ人間は自然と社會とを、神がそれ等を造つたより、又實際それ等が在るより別なものと想像する。）或人は彼等と調和しようと試みる。が、ステパーン・ヴェルホーヱンスキイは少くともそんな事は爲ない。僕は avec cette chère amie,（自宅の親愛な友と一緒に、）彼得斯堡に居た時代に、彼等の多くを見た――あゝ、あの時分僕は何んなにあの女を苦しめたことだらう――が、僕は彼等の侮辱を怖れなかつた。又彼等の稱讃をも怖れなかつた。今も二つながら怖れては居ない。Mais parlons d'autre chose（併しそんな話は止めに爲よう）……僕は何うも怖ろしいことを爲たよ。僕はね、昨日ダーリャ・パブローヴナに手紙を遣つたのだ。で……僕は自分ながら馬鹿なことを爲

たと思つて残念で堪らないよ。』

『一體何を書いたのです？』

『ねえ君、僕を信じて呉れ玉へ、僕は皆高潔な精神から遣つたのだよ。僕は五日前にニコラースへ手紙を送つたことを――それも矢張高潔な精神から遣つたのだがね――それをあの女に知らせて遣つたのだ。』

『あゝ、漸つと解つた！』と、私は憤然として叫んだ。『貴方は又如何してそんな事をする權利が有るんです？』

『だが、君、僕を粉砕して呉れ玉ふな、そんなに呶鳴つて呉れ玉ふなよ。僕は……甲蟲のやうに壓潰されて居るんだからね。加之、僕は又それが高潔な所業だと考へて居たんだよ。實際、何事かが起つたのだと爲玉へ……（瑞西でだよ）……でなくとも、何事かゞ起り掛けたのだと爲玉へ。僕は豫め二人の心中を聞いて置く必要が有りはしないか……要するに、僕が二人の心を強制しない爲にだよ。二人の道に横たはる岩石に成らない爲にだよ。僕は單に高潔な感情からあんな行爲に出たんだよ。』

『本當に馬鹿な事を爲たもんですねえ！』と、私は思はず叫んだ。

『左樣だ、左樣だ』と、彼は心から熱心に同意した。『眞個君の言ふ通りだよ。C'était bête, mais que faire ? Tout est dit.（馬鹿な事を爲たものだ。が、仕方がない。萬事終れりだ。）僕は「他人の罪惡」を藏ふためでも可いから、矢張あの女と結婚するだらうよ。して見りや、手紙を遣る必要もなかつたのさ。え、左樣ぢやないか。』

『貴方は又そんな事を考へて居るんですね！』

『あゝ、君、そんなに呶鳴つて僕を吃驚させて呉れ玉ふな。今君の前に居るステパーン・ヴェルホーヱンスキイは全く別人だよ。元の僕は葬むられて仕舞つた。Enfin, tout est dit.（要するに、萬事終れりだよ。）又君は何と思つて

そんなに呶鳴るのかい。單に君が結婚しないからと云ふのか、頭に盛裝飾を載せる必要がないからと云ふのか。可哀相に、君は未だ女を知らないよ。僕は一生女を研究するより外に何にも爲なかつた人間だのにね。「世界を征服しようと思つたら、汝自身を征服せよ」と云ふのは、最一人君のやうにロマンティックな、僕の花嫁の同胞シャトーフの言つた只一つの善い事だがね。で、僕は今自分に打克つて結婚しようとして居るのだ。併し僕は世界の代りに何を征服しようとして居るのだらう？あゝ君、結婚は有らゆる獨立と自尊の念に富んだ人間の精神的死だよ。夫婦生活は僕を腐敗させるよ、僕の精力を吸ひ取つて、主義のために盡す勇氣を奪つて仕舞ふだらうよ。子供も生れるだらう、恐くは僕自身の子でない――確に僕の子でない子供が生れるだらう。知慧ある者は眞實に面することを恐れない。リープティンは今朝ニコラースを入れない樣に柵を造れと提言した。彼奴は馬鹿だね。女は神樣の眼でも瀆むものだよ。神樣が女をお造りに成る時は、勿論何を造るか御存じで有つたに違ひない。が、女といふ奴は神樣に差出口をして、強ひてあんな風な……あんな性質を具へた女を造らせたに相違ないんだよ。でなけりや、誰がそんな面倒な仕事を引受けるものかね。斯んな事を言ふと、又ナスターシャが僕を無神論者だと云つて怒るだらうがね、併し……enfin, tout est dit.（要するに、萬事終れりだ。）』

此の今時流行らぬ、廉ッぽい瀆神的自由思想を止めることが出來たら、彼は彼でなく成るのだ。今や少くとも彼は其雜言を以て自ら慰めて居る。が、それも永くは續かない。

『あゝ、明後日が、其の日曜日が永久に來なかつたら！』と、彼は不意に、今度は全く絶望して叫んだ。『Si le miracle existe（若し奇蹟といふものが有るなら）――此の一週間だけ日曜日なしに濟まないだらうか。曆から日曜日一つ抹殺する位、天帝に取つて何で有らう？單に神の力を無神論者どもの前に證明するだけでも！あゝ、僕は實際

あの女を愛したものだ！二十年、此の二十年間、而もあの女は些とも僕を了解して居ないのだ！』

『併し貴方は何人のことを言つてるんです？眞個、私には貴方の仰有ることが能く解りませんよ』と、私は吃驚しながら訊いた。

『Vingt ans!（二十年！）而もあの女は一度も僕を了解したことがないのだ！實際、あの女は僕が貧乏のために結婚するものと信じて居るのかね。あゝ、叔母さん、叔母さん、私は貴方のために結婚するのだよ……あゝ、あの叔母さんに知らせて呉れ、あの女こそ僕が二十年の間崇拜して來た只一人の女だといふことを！そんなに無理矢理僕を（ce qu'on appelle（謂ふ所の）結婚の祭壇の下へ引張り込まないでも、左樣成るんだと云ふことをあの女に知らせて遣りたいのだ！』

私は始めてこんな告白を聞いた、而もこんなに力強く發表されたのを聞いた。私は刄其際慾ろしく笑ひの誘惑を感じたといふ事實を隱さうとも思はない。私は惡かつた。

『彼兒が今や僕に殘された唯一のものだよ。唯一の僕の希望だよ』と、不意に新しい希望に打たれたやうに、彼は兩手を揉みながら叫んだ。『只彼兒が、僕の憐れな子供が僕を救つて呉れるよ。何故彼兒は最う來んちやらうか。あゝ、わが兒、わがペトルーシャよ……僕は父の名に値ひしないけれども、寧ろ虎と云つた方が可い位だけれども……Laissez-moi, mon ami.（ねえ、君、最う歸つて呉れ玉へ。）少許寢て考へを纏めようと思ふからね。僕は勞れた、本當に勞れた。君も最う寢る時間だよ。ねえ、最う十二時だよ。』

第四章　不具者

一

シャトーフは片意地な事をしないで、私の置手紙通りに實行して、正午に、リザベータ・ニコラーエヴナを訪れた。私達は殆ど一緒に這入つた。私も亦これが始めての訪問なので有る。皆、と云ふのはリザに、彼女の母親に、マヴーリキイ・ニコラーエヴィチだのが大きな客間に集まつて談話をして居た。母親は何か舞踏曲を洋琴で彈いて呉れとリザに强請んで居たが、リザが言ふまゝに其曲を彈き出すと、突然それは違つて居ると極め附けた。マヴーリキイ・ニコラーエヴィチは、何の氣もなく單純に、それが正しい舞踏曲だと言ひ張つて、リザの味方をした。年寄つた婦人は泣聲を擧けむばかりに怒つた。彼女は身體の具合が惡く、歩くさへ苦し相に見えた。脚は腫れ上つて居た。此の五六日と云ふもの引續いて腹立ちツぽく、誰とでも口喧嘩をした。尤も、何方かと云へば、リザには始終恐れを爲して居た。彼等は私達を喜んで迎へて呉れた。リザは嬉しさに眞赧に成つて、私に『merci.（有難う）』と言つて——勿論シャトーフの事でだ——興味有りげに彼を見遣りながら、彼女は彼を母親の許に導いた。

シャトーフは入口の處で不恰好に立ち停つた。其來訪を感謝しながら、彼を出迎へに立つた。

『此方がシャトーフさんよ、貴方にお話した。そして、此方がG——v さん、私の親友で、又ステパーン・トラフィモーヴィチの左樣よ。マヴーリキイ・ニコラーエヴィチも昨日お知合に成つたのよ。』

『大學教授なんか被坐しやらないわ、阿母さん。』

『如何して、一人は被坐しやる筈だよ。お前が自分で大學教授も被入しやるだらうと言つたんだよ。此方が左樣なんだらう』と、彼女は横柄にシャトーフを指差した。

『私は大學教授も被入しやるだらうなんて、阿母さんに言ひはしません。G——vさんは今お勤めに出て被坐しやるの、シャトーフさんは元の大學生ですよ。』

『大學生だらうが、大學教授だらうが同じ事だね、皆大學から來るんだもの。お前は只理窟が言ひたいんだよ。』

『阿母さんが毎も大學教授と言ふのはステパーン・トラフィモーギチの息子さんですよ』と、リザは言つた。で、彼女はシャトーフを客間の向うの隅の長椅子へ連れて行つた。

『脚が腫れると毎も斯うなんですよ。えゝ、一寸加減が悪いのよ』と、彼女は矢張同じやうな際立つた好奇心で相手を、特に彼の髪の毛の縮れを見守りながらシャトーフに囁いた。

『貴方は士官ですか』と、老夫人は私に訊いた。リザは無情にも私を彼女の許に打擲り放して置いた。

『い、いや、私は勤めに出て居ります……』

『G——vさんは、ステパーン・トラフィモーギチの御親友よ』と、リザは直ぐに調子を合せた。

『貴方はステパーン・トラフィモーギチの許に使はれて被坐しやるのですか。左樣、あの人も大學教授だ。ね、左樣ですね？』

『あゝ、阿母さんは、夜に成ると屹度大學教授を夢に見るに違ひないわ』と、リザは面倒臭相に叫んだ。

『眼が開いてる時餘まり澤山見るからさ。だが、お前は毎も阿母さんに楯突くんだね。貴方は、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチが四年前此邊に居た時分も、此處にお坐でしたか。』

私は居たと答へた。

『ぢや、何人か英吉利人と御一緒でしたか。』

『いえ、そんな人は居ませんでした。』

リザは笑つた。

『ねえ、英吉利人は居なかつたでせう。だからほんの噂に過ぎなかつたのだよ。で、グルヴーラ・ペトローヴナもステパーン・トラフィモーギチも、二人とも嘘を吐いたのだよ。あの人達は皆嘘を吐くよ。』

『叔母さんとステパーン・トラフィモーギチがね、昨日ね、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチとシェクスピーヤの「ヘンリー四世」の中へ出て來るハアリイ公子とには、何處か似通つた處が有るつて言つてたのよ。そんな處から、母は此處に英吉利人は居ないなぞと言ひますのよ』と、リザは私達に説明した。

『ハアリイが此處に居ないなら、英吉利人なんか居やしないんだよ。他の人ぢやない、ニコラーイ・フシェヴォロードギーチの惡戯なんだね。』

『母は屹度故とあんな事を言つてるんですよ』と、リザはシャトーフに説明する必要が有ると思つた。『本當に母はシェクスピーヤの話を聞いたことが有るんですよ。私が自分で「オセロ」の第一幕を讀んで遣りましたの。でも、今は大變苦しんで居るんですよ。阿母さん、十二時打ちましたし、お藥を召上る時よ。』

『お醫者さんが被入しやいました』と、女中が入口で通じた。

老夫人は立ち上つて、犬を呼び掛けた。『ツェミルカ、ツェミルカ、切めてお前だけも一緒にお出で。』

氣味の悪い小さな老犬は命に應ずる代りに、リザの腰掛けて居る長椅子の下へ潜り込んだ。

『來ないのかい。そんなら來て要らないよ。左樣なら、貴方――貴方のお名も、貴方の阿父さんのお名も知りませんで』と、彼女は私に向けて言つた。

『アントン・ラヴレンチェーギーチ……』

『え、それは如何でも可いのですよ、此方の耳から這入つて、彼方の耳へ脫けて行つて仕舞ひますからね。一緒に來ないの、マヴーリキイ・ニコラーエギーチ、いえ、私が呼んだのはツェミルカのことですよ。有難い、又杖がなくつて歩ける、これなら明日は馬に乘れませうよ。』

彼女はぶり〳〵しながら客間を出て行つた。

『アントン・ラヴレンチェーギーチ、少時マヴーリキイ・ニコラーエギーチと話して居て下さいませんか。貴方方がお互に熟くお知り合ひに成ると、屹度雙方都合が可いと思ひますよ』と、リザは言つた。そして、親しけな微笑をマヴーリキイ・ニコラーエギーチに見せた。マヴーリキイ・ニコラーエギーチは、それを見ると、何處から何處まで嬉しさに輝いて居た、何うも仕方がない、私は其儘マヴーリキイ・ニコラーエギーチと話して居た。

二

驚いた事には、リザベータ・ニコラーエヴナのシャトーフに賴む用事といふのは、實際文學に關したどけの事で有つた。何故だか知らないが、私は彼女が最つと他の目的で彼に來て呉れと言つて居るのだと推量して居た。私達、マヴーリキイ・ニコラーエギーチと私とは、あの人達が聲高に話合つて、別に隱し立てしようともして居ないのを見たから耳を傾け出した。到頭、彼等は私達の助言を求めた。

リザベータ・ニコラーエヴナは自分で有益だと考へた一册の書を發刊しようと思案して居たが、全く無經驗なので、誰か手傳ひが欲しかつたのだ。シャトーフに其の目論見を說いて聞かせて居る其熱心さに、私はすツかり驚かされた。

『彼女も新しい女の一人に違ひない』と、私は思つた。『彼女は空しく瑞西に往つて來たのぢやァない。』

シャトーフは社交的に華やかな若い婦人が、彼女とは迚も釣合ひさうもない仕事を始めようと云ふのに、些さかの驚異をも表さないで、眼を床に落したまゝ、一生懸命に傾聽して居た。

彼女の文學的計畫といふは次の樣で有つた。露西亞の新聞や雜誌が數々發行されて、日々の出來事は一ト纏めに成つてそれに報道される。が、一年經つと、其新聞は何處でも縛り上げられて、戸棚に拋り込まれて仕舞ふ。でなければ、引裂かれたり、紙屑に成つたり、又は小包を拵へたり、物を包んだりするのに使はれる。新聞記載の事實は、幾許か腦裡に刻まれて、公衆に記憶されては居るが、年が經つに伴れて忘られて仕舞ふ。それ等を見たいと思ふ人も、澤山有らう。が、其事件の起つた日附も、場所も、年さへも忘れられ勝ちのもので、新聞の海に船出するのは彼等に取つて一つの骨折で有る。處が、假に一年中の有らゆる事實が、一定の計畫の下に、一定の目的を以て、據所を示した標題の下に、月日の順に列載されたなら、斯ういふ編纂は、縱令其中に公表される事實は實際起つた出來事の一小破片に過ぎなくとも、一年間の露西亞の生活の特性を反映するに違ひない。

『澤山の新聞の代りに、何冊かの厚い本が出來ようといふ、それだけですね』と、シャトーフは口を出した。

併しリザベータ・ニコラーエヴナは、それを說き示す力の不足をも顧みず、只

管自分の意見を固守した。『一册でなければ駄目ですわ、それも大層厚くては不可ないのよ』と、彼女は言ひ張つた。厚くなくとも、明瞭でさへあれば可い。要點は、事實再現の方案と特質とに有るのだからで有る。勿論、何から何まで集めて印刷に附する譯ではない。例へば、政府の法例法規とか、州令とか、法律とか、凡てそんなやうな事實は、此の立案された印刷物から悉く取除いても可い。事實の大部分は捨てゝ、唯現代に於ける露西亞人民の個性に觸れたものや、多少に係らず人民の道德的生活の特性に關した出來事ばかりを撰り拔いたものに限つて可いので有る。勿論、何を打込んでも差支へはない。奇怪な椿事、火事、公共義捐金、善い事でも惡い事でも、演說でも、人の言葉でも、川の氾濫だつて可い、時には政府の法令でも可い、只撰り拔いたものに時代の特性が有れば可い。何でも、一定の見識、特種の意義と企圖、おしなべて、全册に表れた事實を照明するに足るやうな思想を以て書けば可いので有る。で、最後に參考書としての價値から離れても、輕い讀み物として、尙且興味深いものでなければ成らない。謂はゞ、一年間の露西亞に於ける精神的、道德的、內的生活の再現で有るべきで有る。

『衆皆に買つて貰ひたいものね、何處の卓子でも見られるやうな本にしたいものね』と、リザは思ひ切つたことを言つた。『それも皆遣り方に、方案の立て樣に有ると思つてますのよ、だから私が貴方にお願ひするのですよ』と、彼女は言葉を結んだ、彼女はだん〳〵話に熱中して來た。彼女の說明は朦朧として不完全では有つたが、シャトーフにも解り掛けて來た。

『ぢや、政治的臭味を帶びたものに成りますね、特種の傾向を帶んで事實を撰擇する段に成ると』と、彼は尙頭を垂れたまゝ呟いた。

『そんな事ないわ、特種な癖なぞで撰擇しては不可ません、政治的傾向なぞ一つでも有つては不可ませんわ。只只公平よ。それが唯一の傾向よ。』

『なに、些と位傾向が有つても構ひませんよ』と、シャトーフは微かに動いて言つた。『苟も撰擇すると成ると、必ずそれは避けられない。事實の撰擇其者が、如何それを理解すべきかを暗示して居ますからね。で、貴方のお考へは惡く有りませんよ。』

『ぢや、そんな本が出來ませうか』と、リザは嬉しがつて叫んだ。

『好く調べもし、考へもしなければ不可ませんね。隨分大きな計畫ですよ。迚も一ト息に拵へ上げて仕舞ふ譯には行かない。經驗が必要ですよ。で、いよ〳〵此書を出版すると成ると、さア如何したら可いかと周章くやうなことが有りはせぬか心配ですね。恐らくいろんな目に逢つて見た後でなければ――併しお考へは至極面白いですよ。有益なお考へです。』

彼は漸と眼を擧げた、それが確かに愉悅を以て輝いて居た。それだけ興味を惹かされたのだ。

『貴方御自身のお考へなのですか』と、親しげな、而も、何處か羞らつた容子で、彼はリザに訊いた。

『此の考へは別に艱かしいものぢや有りませんわ、遣り方が面倒なのですよ』と、リザは莞爾した。『私にはほんの少許しか解りません。私は大して悧巧ぢや有りませんもの。只、私は自分に判然解つて居ることにばかり凝つて居るのですよ。』

『凝つてるんですつて？』

『それはしつくり當て嵌つた言葉ぢやないかも知れませんね』と、リザは早速に問ひ質した。

『それで宜しいのです。いや、別に如何いふ積りもないのでした。』

『私は外國に居ました時分、私のやうな者でも何かの役に立ちたいと思つて居ましたの。些と許り無駄に寝かして有るお金子が有るのですよ。だつて、まア私、私だつて公共の利益のために働けないなんて事が有りますか、ねえ。それに、此の考へが如何かして、不意と自然に泛んで來たのですよ。決して私が發明した譯では有りません、只それが嬉しいのよ。でもね、何誰かに手傳つて頂かなくちや遣つて行けないと直に思ひましたわ。何だつて自分一人ぢや遣つて行くだけの力がないのですもの。私を助けて下さる方は、勿論、此書の共同出版人よ。私達は半分宛出し合つて行くのですからね。貴方が方案を立てゝ仕事をして下さる、私の方は元の考へとそれを發行する資本とを出すんでせう。で、此書で其の出費だけ償へませうか、如何でせう？』

『旨い方案さへ想ひ着けば遣つて行かれませう。』

『申上げて置きますがね、私は利益のためにそれを始めるんぢやない。が、其本が播まつて儲かるのを自慢するやうに成りたいとは思つて居ますのよ。』

『成程、でも私は、如何いふ風にお仲間入りしませうか。』

『まア私の仕事仲間に、二人して遣つて行くのに、貴方をお招きしたのですよ。貴方は方案を考へ出して下されば可いんですよ。』

『私がそんな方案を考へ出せるなんて、何うして御存じなのですか。』

『皆さんが貴方のことを私に話して下さいましたわ、又此處でも聞いてよ……貴方は大層悧巧だつて何つてよ……主義のために働いて被坐しやるつて。ピヨートル・ステパーノヰチ・ヴェルホーヱンスキイが、瑞西で貴方のことを話してましたのよ』と、彼女は遽てゝ附け加へた。『あの方は大層悧巧な方ね、左樣でせう？』

シャトーフは掠めるやうに、一寸彼女の方へ眼を忍ばせたが、再び其眼を床に落した。

『ニコラーイ・フシェヴォロードヰーチも亦貴方のことを澤山私に話して居りましたよ。』

シャトーフは突然眞赧に成つた。

『此處に新聞が有つてよ』と、リザは不意に言つて、一緒に綴ぢた新聞の束を椅子から取上げた。『一寸撰り抜く事實へ記號を附けたり、種類分けをしたりして見ましたの、新聞は揃へて有りますのよ……御覽なさいね。』

シャトーフは其束を取上げた。

『お宅へ持つて被坐して御覽下さい、何處にお住ひなの？』

『バガヤーヴレンスキイ街のフィリポフの家に。』

『知つてます。貴方の外に、レビャードキンさんと云ふ大尉も住んで被坐しやる相ですね』と、リザは同じ樣にせか〳〵した容子で言つた。

シャトーフは全一分間、何とも返辭をしないで、床を見詰めたまゝ、前へ差出した手に新聞の束を持つて居た。

『こんな仕事には、最つと他の人を見附けた方が可う御座いませう。私は全然適して居ませんよ』と、彼は到頭切り出した。殆ど喘いてるかとばかり、恐ろしく妙な風に聲を落して居た。

リザはさつと面に朱を漲らした。

『何の事を言つて被坐しやるの？マヴーリキイ・ニコラーエヴヰーチ』と、彼女は叫んだ。『何卒あの手紙を此處へ持つて來て下さい。』

私もマヴーリキイ・ニコラーエギーチに隨いて、卓子の所へ行つた。

『これを御覽なさい』と、彼女は非常に昂奮して手紙を開封しながら、突然私の方を向いた。『今迄にこんな風のものを御覽に成つたことが有つて、何卒大きな聲で讀んで下さい、シャトーフさんも亦聽いて被坐して下さい。』

私は少からず惘れながら、次の書狀を大聲に讀んだ。

『美の君、ツージン孃へ。

『惠み深き姬よ、

『リザベータ・ニコラーエヴナの君よ。

『おゝ、君は美し女、

美の女王！

片鞍に乘つて君駈ける時、
黃金の髮の微風に靡く時！
或は母君と教會に額づいて、
敬虔な顏に紅葉の散る時！

それよ、吾は婚禮の悅びに憧れて、
戀の淚に君の後を追ふよ。

——喧嘩の後、無學な男の手に綴られて——

『おゝ、惠み深き姬よ。

『私は自分がセヴストポールで腕を失はなかつたことを、何人よりも一番深く自ら憐れんで居る。てんで私は彼處へ行つたことがない、全征役の間糧食を撒んだりして、詰らない役に就いて居たのですからね。貴方は古への女神で有る。私は蟲けら同然だ。が、永遠を覗いて來たことは有るのですよ。あれは只詩だと思つて下さい、それだけですよ。何となれば詩は要するに無意味で有る、それに散文では許し難いものをも正當にするのですからね。で、若し浸液蟲類が太陽に對して氷滴から詩を編むだとすれば、彼女は腹を立てますかい。顯微鏡で見ると、そんな蟲類は到る處に充滿して居るのですよ。彼得斯堡の上流社會に於て、大きな動物の愛護を奬勵する俱樂部ですら、犬や馬に對しては正當な同情を慇じても、小さな浸液蟲類に對しては之を蔑視して毫末も顧みる處がない。それも只彼等が大きくないからと云ふに過ぎないので有る。私も亦餘り大きくない。で、結婚なぞ考へるのは滑稽に見えるかも知れない。が、私は間もなく貴方の輕蔑に値ひして居る或人間嫌忌者の手から、二百人の奴隸に相當する所領を受けるんですよ。私はいろんな事を申告することが出來る、又西伯利亞を意味するやうな書類をも提出することが出來るので有る。私の此の申込みを輕蔑して下さるな。浸液蟲類の手紙は勿論韻文で有る。

貴方の最も柔順な臣僕にして、時間に際限のない、大尉レビャードキン拜。

『醉拂つた下らない奴が書いたものですね』と、私は腹立しけに叫んだ。『私は其奴を知つてますよ。』

『其手紙を昨日受取りましたのよ』と、リザは顏を赧くして、口早に其次第を語り出した。『馬鹿者が寄越したのだと、私も直ぐ見て取つたのよ。未だ阿母さんには見せませんの、此上氣を顚倒させると困りますからね。でも、

あの人がこんな風にして續けて行つたら、私は如何いふ態度を取つて可いか解らないわ。マヴーリキイ・ニコラーエヸーチは自分で行つて、そんな事爲せないやうに禁めて來ると言ふんですがね。シャトーフさん、貴方はお仲間ですし、それに』と、彼女はシャトーフの方へ振向いた。『彼處に住んで被坐しやるんだから、この先あの人が何んな事を爲るか、貴方なら一番近い判斷がして頂けようと思ひますのよ。』

『彼奴は泥醉漢で、下らない奴です』と、シャトーフは見るから氣がなさ相に呟いた。

『あの人は毎もそんなに馬鹿なの？』

『いや、醉つてなければ、些とも馬鹿ぢや有りませんよ。』

『私は、恰度こんな風な詩を書く將官を前から知つてましたよ』と、私は笑ひながら口を出した。

『自分の目的のためには相應に悧巧なことが、此の手紙を見ても判りますよ』と、マヴーリキイ・ニコラーエヸーチは其時迄默つて居て、思ひも懸けず、不意に口を挾んだ。

『何か妹さんと一緒ですつて？』と、リザは問ひ掛けた。

『左樣、妹と一緒に居ます。』

『あの人が妹さんに酷くするといふ話ですが、眞實？』

シャトーフは又も眉を顰めて、リザを見遣つた。『それが私に何の關係が有るんだらう』と呟きながら、だん〳〵入口の方に動いた。

『あら、一寸待つて』と、リザは飛上りながら叫んだ。『何處へ被往しやるの？　未だ御相談せねば成らぬことが澤山有るぢや有りませんか。』

『何を相談するのです？　明日にしませう。』

『まア、一番大切な事よ——印刷機の事！　私は戲談に言つてるんぢやないのよ、眞實に、非常に眞面目に働きたいのですから、左樣思つて下さいね』と、リザはだん〳〵やきもきして來て、相手に念を押した。『それを出版するとしたら、何處で印刷したものでせう？　ねえ、これが一番大切な問題よ。其爲にわざ〳〵莫斯科へも行かれないし、左樣かと言つて、此處の印刷機はそんな出版物を印刷するなぞ思ひも寄らないことですからね。まア貴方のお名前にして、私自分の活版所を設けようかと、ず、ずつと前から決心して居るのですよ、貴方のお名前にして有りさへすれば、母も許可して呉れるだらうと思つてますの。』

『私が活版屋に成れるなんて、如何して知つたのです？』と、シャトーフは苦々しけに訊いた。

『だつて、ピョートル・ステパーノヸーチが瑞西で貴方のことを話したのよ。そして、此職業のことも御存じだし、印刷機を据ゑ附けることも出來るのだといふやうなお話も有つたのよ。あの人は自分から貴方へ宛てた手紙を私に呉れるなぞと言つてましたが、私が忘れて仕舞ひましたの。』

今想出して見ると、シャトーフの顏色は變つた。彼は其上數秒間立ち停つて居たが、やがて室を出て行つた。リザは怒つた。

『あの人は毎もあんな風にして出て行くのですか』と、彼女は私の方へ振向いて訊いた。

私が恰度肩を聳かした處へ、突然シャトーフが戻つて來て、づか〳〵と卓子の傍へ近寄りながら、一旦持つて行つた新聞紙の束を下に置いた。

『私は貴方のお手傳ひは致しますまい、時間が有りませんから……』

『何故？何故？貴方は怒つてらつしやるのでせう！』と、彼に訊いた。

リザは悲しく成つたやうな、懇願するやうな調子で、彼女の魂迄突き入らうとでもするやうに、凝乎と相手を見詰めて居た。

彼女の聲が彼を感動させたらしい、少時の間、女の魂迄突き入らうとでもするやうに、凝乎と相手を見詰

『何でもないんです』と、彼はそつと呟いた。『私は遣りたくないんです……』

そして、彼は全く行つて仕舞つた。

リザはすツかり顚倒して仕舞つた、實際、度外れに——私には左樣見えた。

『眞個、變手古な男だ』と、マヴーリキイ・ニコラーエギーチは聲高に言つた。

三

確かに變手古な男だ。が、其中には、私にはツきり解らない處が澤山有つた。何か其裏に有るのだ。私はてんからあの出版の話に信を置かなかつた。それから、『申告』だとか『書類』だとか、可訝しなことを書いて居るあの馬鹿らしい手紙だ。尤も、あれに就いては衆皆口を緘して、他の事ばかり話して居たけれど。最後にあの印刷機だ。あの話が出ると、シャトーフは不意に立上つて歸つて仕舞つた。そんなこんなから、私は自分が此處へ來る前に、何か私の知らない事が持ち上つたのだと推察した。從つて私に關係したことぢやない、私は却て邪魔をしたのだと思惟した。實際、最早暇を告げる時刻で有つた、初めての訪問にしては隨分長く居たものだ。私は別れを告げにリサベータ・ニコラーエヴナの傍へ行つた。

彼女は私が此室に居ることも忘れて居るらしい。首を頽垂れたまゝ、思ひに沈んで、凝乎と敷物の或一點を見詰めながら、未だ卓子の傍の同じ所に立つて居た。

『あツ、貴方も最うお歸り、左樣なら』と、彼女は平常の親しけな調子で口籠つた。『ステパーン・トラフィモーギーチに宜しく、成べく早く來て頂くやうに勸めて下さい。マヴーリキイ・ニコラーエギーチ、アントン・ラヴレンチェーギーチがお歸りですよ、母が出て來られませんで、又御挨拶も申上げられないで、失禮致します。』

私は戸外に出た、そして、階子段の根に着いた時、急に下男が玄關まで私を追ひ掛けて來た。

『御主人樣が最う一度お歸り下さるやうにとの事で……』

『奥樣ですか、それともリザベータ・ニコラーエヴナさんか。』

『お孃樣で。』

前に私達が話をして居た大きな室でない、隣の應接間に、リザは待つて居た。其室とマヴーリキイ・ニコラーエギーチが一人取殘された客間との間の扉はぴつたり閉つて居た。

リザは私を見て莞爾した。が、顔色は眞蒼で有つた。彼女は明々と内心に藻掻きながら、未だ決心の着かない容子で、室の中央に立つて居た。併し彼女は突然、私の手を取つて、手早く私を窓の所に導いた。

『私は卽刻あの方に會ひたう御座います』と、彼女は反對の暗示さへ許さないやうな、燃え輝いた、情熱的な、苛々した一瞥を私に與れながら囁いた。『私は何うしても此眼で一目あの方に會ひたい、何卒助けて下さい。』

彼女は全く氣が狂つて居た——それも失望のために。

『會ひたいと仰有るのは誰のことです、リザベータ・ニコラーエヴナ』と、私は訊き返した。

『あのレビャードキンの妹さん、あの跛の娘さんですよ……跛つて眞實ですか。』

私は惘れた。

『私はあの女を見たことが有りません、只跛だと聞いたばかりです。それも昨日聞きました』と、私は口早に、矢張低聲で言つた。

『如何してでもあの方に會はなくつちや……今日其運びを着けて頂けて？』

私は何とも言はれない程彼女が氣の毒に成つた。

『そりやア迚も難かしい、それに、如何いふ風に手を着けて可いか、丸ッ切り見當が附きませんからね』と、私は彼女を納得させようとした。『兎に角シャトーフの許へ行つて見ませう……』

『貴方が明日迄に其運びを着けて下さらなければ、私は一人であの方の許へ參ります、だつて、マヴーリキイ・ニコラーエヴィーチは斷りましたもの。私は丸ッ切り貴方を手頼にして居るんですよ、他にないのですからね。私はシャトーフに下手な口を利きましたわ……貴方は心から正直な、恐らく私のために何でも爲て下さる方だと思つてますのよ。只其の運びだけ着けて下さい。』

私は如何してでも彼女を助けて遣りたいやうな、情熱的の慾望を感じた。

『斯うして見ませう』と、私は一寸考へた後で言つた。『私は今日自分で行つて、是非あの女に會ひませう、屹度ですよ。そして、何うでも貴方のお望みを果すやうに計らひませう。私は貴方に誓つて置きます。只シャトーフにだけは打明けさして下さい。』

『えゝ、私がそれを望んで居るんだつてことも、最う些とも待つて居られないことも、又、今し方はあの方を欺して居たんぢやないことも、すツかりお話して下さい。屹度餘まり正直なので行つてお仕舞ひなすつたのよ、私があの方を欺し相に見えたので可厭にお成りなすつたのですよ。私はあの方を決して欺すんぢやない。正直、書物が發行したい、活版所が起したいのですよ。』

『あの男は正直です、大變に正直です』と、私は熱心に同意した。

『ですが、明日迄に手筈が着かなければ、私は何事が起つても、又誰に知れようとも、自分で行きますよ。』

『明日三時前には何はれませんがね』と、私は一寸思案して見た後で言つた。

『それなら三時に。ぢや、昨日私がステパーン・トラフィモーヰチの許で想像したことは——貴方なら私のために何んな事でもして下さり相だつてえのは、眞實でしたね？』彼女は急いで別れを告げに私の手を握り緊めながら莞爾して言つた。そして、打捨られて居たマヴーリキイ・ニコラーエヴィーチの處へ急いで歸つて行つた。

私は自分のした約束に自分ながら重い氣分に成つて、戸外へ出た。一體、何事が持上つたのか、さつぱり譯が判らない。私はろくさま知らない人に迄打明け話をして、自分を陷入れることさへ躊躇しない程に、心から絶望に陷つた婦人を見たので有る。あれ程彼女に取つて怖ろしい瞬間に、彼女の漏らしたあの女らしい微笑と、昨日私の心持に氣が附いたといふ暗示とが、痛く私の心を惱ませた。が、私は彼女を氣の毒に感じた、非常に氣の毒に——それだけで有る。彼女の祕密は私に取つて何か神聖なものゝやうな氣がして來た。そして、萬一誰かゞ今私にそれを聞かせて呉れようとしても、私は耳を掩ふて走つたらうと思ふ。是以上何にも聞きたくない。私は只何か知ら虫の知らせを感じて居る……而も私は如何して可いのか、それさへ未だ解つて居ないのだ。會見といふが、一體何んな風な會見だらう？又如何いふ樣にしたら、二人を一緒に會はし

せられるだらう？私の只一つの賴みはシャトーフだ。尤も、何の道彼が私の手助けに成りさうもないのは、私にも解つて居た。が、何でも可い、私は彼の許に急いだ。

四

其夜、七時過ぎ迄彼は不在で有つた。驚いた事には、彼にはお客が有つた。アレキセイ・ニーリイチと最う一人の紳士、好くは知らないが、何でもヴィルギンスキイの細君の兄弟で、ジガーロフとかいふ人らしい。此の紳士は、此町に二箇月許り滯在して居たものらしい。何處から來たかは解らない。只彼得斯堡の或進歩的な雜誌に、何か論文を書いたことが有るとは聞いて居た。ヴィルギンスキイが街の中で、遇然私に紹介したことが有つた。私は一生の間に、是程沈み返つた、陰氣な氣艱しさを人間の顔に見たことがない。眞個、此世の破滅を待つて居るやうな顔附をして居た。それも豫言に從つて、實現されるか何うか判らないやうな、或不定の時期に於てではなく、明後日の十時二十五分過ぎに、それが起ると言つたやうな顔附だ。私達は其折互に一言言つたか言はないか位で別れた、只二人の共犯者の樣に握手したばかりだ。彼の耳には眞個驚かされた。異常な大きさで、長くて、廣くて、厚はツたくて、妙な風に飛び出して居る。彼の擧止は緩くて間が拔けて居た。私どもの州に同住共產國が實現されさうだとリープティンが眞面目に想像したとすれば、此紳士はそれが何日の何時に建てられるか、屹度知つて居たに違ひない。彼は不快な印象を私に與へた。シャトーフがお客を好かないのに、此處に彼を見出したのには猶更驚いた。

彼等は非常に聲高に、三人が一度に饒舌つてるのが階子段から聞えた。彼等は口論をして居るなと想つた。が、

私が這入つて行くや否や、衆皆話を止めた。彼等は突立つたまゝ議論して居たが、突然一度に腰を卸した。で、私も腰を掛けた。白けた沈默がもの三分間も續いた。ジガーロフは私を知つて居ながら知らないやうな振をして居た。別段敵對心からでは有るまい、別に理由はないので有らう。アレキセイ・ニーリイチと私とは無言で互にお叩頭をしたが、何かの理由で握手はしなかつた。ジガーロフは顔を蹙めながら、私が直にも立ち上つて此處を去らねば成らないとでも言ふやうに、極々子供染みた自信を以て、ぢろ〳〵私を睨め出した。最後にシャトーフは椅子から立ち上つた、他の人達も一度に飛び上つた。彼等は左樣ならとも言はずに出て行つた。ジガーロフだけが送り出して來たシャトーフに入口の處で言つた。

『君は說明をする義務が有るんだよ、記憶えて居玉へ。』

『說明も糞も有るものか一體何人に說明するんだい？』

彼は二人を送り出して、扉に鍵を掛けた。

『鈍物達』と、彼はかさ〳〵したやうな一種の微笑を含んで、私を見返りながら言つた。彼の顔附は怒つたやうに見えた。それに、彼が最初に口を利いたのが、私には不思議に思はれた。私が以前彼に會ひに來た時なぞは——尤も度々も來ないが——毎も隅ツこに蹙め面をして腰掛けながら、不機嫌な返辭をして、可成時間が經つてからでなけりや、十分に打融けて、喜んで饒舌り出すと云ふやうなことはなかつた。それでも、左樣ならを言ふ時は、毎も蹙め面をして居た。そして、自分の敵を追拂ひでもするやうに人を出して遣つたものだ。

『僕はあのアレキセイ・ニーリイチと昨日茶を飮んだよ』と、私は口を開いた。『あの人は無神論で夢中のやうだね。』

『露西亞人の無神論は警句でも言ふ以上には進まないのだよ』と、シャトーフは燃え盡した蠟燭の端を捨てゝ、其跡へ新しいのを立てながら唸つた。

『いや、あの人が警句なぞ言ひたがる男とは見えないね。警句どころか、眞當面に物を言ふことも知らないやうだよ。』

『紙で出來てる人間だよ、彼奴等の思想は皆自由の缺乏と追從主義から來て居るんだよ』と、シャトーフは片隅の椅子に腰を卸して、膝の上で兩手の掌を擦り合せながら、物柔らかに言つた。

『それに又憎惡も有るんだね』と、一寸休んでから、彼は續けた『若し露西亞が不意に改革されて、彼奴等の言ふ通りにだよ、そして、法外に繁榮に、幸福に成つたとしたら、第一に困るのは彼奴等だよ。左樣成りや、彼奴等には憎む人も呪ふ物も、不平を言ふ相手もなく成る譯だからね。只、彼奴等の有機々能の中に喰ひ込んで居る露西亞に對する非常な動物的の憎惡だけしか殘らないのだよ。從つて又彼奴等の所謂「愉快らしい笑ひの下に隱されて、人の眼に觸れずに泣く涙」なぞは通用しないからね。凡そ、此の「人の眼に觸れない涙」と云ふ位嘘ッぱちの馬鹿な言葉は露西亞でも他にないよ』と、彼は氣も狂はむばかりに呶鳴つた。

『一體、君は何を饒舌つてるんだね？』と、私は笑つた。

『あゝ、君は穩和派の自由主義者だつたね』と、シャトーフも亦莞爾しながら言つた。『ねえ君』と、彼は唐突に續けた。僕は「思想の追從主義」に就いて下らない事を饒舌つて居たかも知れない。吃度君は正面から「追從者の息子と云ふのは君のことだ、僕は追從者でも何でもないよ」と言ふだらうね。』

『そんな事は夢にも思つて居ないよ……何を言つて居るんだい』

『なに、辯解なぞしなくとも可いよ。僕は君を怖がつては居ないからね。僕も嘗ては追從者の息子でした。が、今ぢや君と同じやうに、僕自身追從者に成つたよ。露西亞の進歩主義者は何よりも先づ追從者なんだね。そして、何人か長靴を磨かせて呉れる者はないかと、其人ばかり搜して居るんだよ。』

『長靴？それは如何いふ比喩かね？』

『比喩、成程！君は笑つて居るね……左樣だ、ステパーン・トラフィモーギチが僕のことを石の下に壓潰されながら、未だ死にはしない、が、只藻掻く外に何にも爲ない男だと言つたが、あれは眞實だね。あの人の比喩ちや旨い方だよ。』

『ステパーン・トラフィモーギチが君のことを獨逸人で夢中だと言つてるが』と、私は笑つた。『それも一理有るね。兎に角、僕等は彼等から何物かを借用して居るんだからね。』

『僕等は二十哥貰つたさ。が、それに對して此方の金子を百留布も拂つた。』

二人は少時默つて居た。

『あの男は亞米利加で寢ながら、あの苦痛を拂へたのさ。』

『あの男とは？何んな苦痛だい？』

『キーリロフのことさ。僕は或小舍の床に四箇月もあの男と一緒に寢て暮したものだ。』

『えツ、亞米利加へ行つたことが有るのかい』と、私は魂消て訊ねた。『今迄そんな事を些とも言はなかつたやうだね。』

『何で話すことが有るんだい？一昨年移民船に乘つて亞米利加へ出掛けて、三人ながら最後の一錢迄遣つて仕舞